

令和5年度

報告書

国際キャリア 教育プログラム

UTSUNOMIYA UNIVERSITY

国際キャリア教育セミナー

国際キャリア教育

International Career Seminar

国際キャリア実習

主催：大学コンソーシアムとちぎ・宇都宮大学

開催趣旨

宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際交流に関心がある高校生の皆さんも、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。



そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア教育プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって2004年から毎年実施され、参加者数は過去20年間で合計2189名（宇都宮大学1389名、外部参加者800名）となっています。2020年より、新型コロナウイルス感染症流行への対応のためのオンライン化によって、海外からの参加も可能になり、英語でセミナー全体を行う「International Career Seminar」へは、本学交流協定校であるペラデニヤ大学(スリランカ)、サラワク大学(マレーシア)から多数学生の参加があり、今年度は、王立ブノンペン大学(カンボジア)とタマサート大学(タイ)からの学生も参加し、より一層の国際交流実体験の場としての学修効果を生んでいます。

このプログラムの科目は、学生が生きることや働くことの意味について考えるという点で共通の「国際キャリア教育」（日本語によるセミナー）と、「International Career Seminar」（英語によるセミナー）、そして、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPOで実習体験を行う「国際キャリア実習」の3科目、6単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行われます。2つのセミナーはどちらも3日間の集中講義形式で、共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化（Globalization）」、「地域のグローバル化（Glocalization）」の2つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの4つのテーマで分科会を構成します。各分科会のためには、その道のプロの専門家や講師を揃えています。一方、総時間数80時間で行われる「国際キャリア実習」のためには、国内・海外の魅力的で個性的な実習先を用意しています。3科目すべての履修を勧めますが、1つか2つを選択して受講することも可能です。

「国際キャリア教育プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から優秀な大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、栃木県からの支援を受けて、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、NPO法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA筑波センターからご後援をいただきました。また、(公財)あしぎん国際交流財団からはご協賛、宇都宮市創造都市研究センターからは特別協力をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

令和6（2024）年3月

国際キャリア教育プログラム委員会 委員長
宇都宮大学 国際学部 教授
吉田 一彦

目次

開催趣旨 1

第1部 国際キャリア教育セミナー

1. 目標とルール 3

国際キャリア教育

1. 概要 4
2. 開催日程 5
3. 全体講義 6
4. 分科会・講師及び講義概要..... 12
5. パネルトーク 41

International Career Seminar

1. 概要 44
2. 開催日程 45
3. 全体講義 46
4. 分科会・講師及び講義概要..... 52
5. パネルトーク 81

附 表

1. 修了者名簿 83
2. 参加者全体コメント 85

第2部 国際キャリア実習

1. 実施要項 89
2. 令和5年度夏期受入団体および実習概要一覧..... 93
3. これまでの受入団体および実習概要一覧..... 93
4. 実習生からの報告 96

国際キャリア教育セミナー

目標とルール

目標

- 「働く」とはどのようなことなのかについて考える。
- 自分と地域社会や世界とのつながりについて考える。
- 主体的に関わりたい分野を見つけ、今後の学びに向けた“きっかけ”を得る。

ルール

- どんな意見も臆せず、積極的に発言しよう。
- 一人ひとりが参加者の自覚をもとう。
- 異なる意見を尊重するとともに自分の意見をもとう。
- 自分独自の意見を述べよう。
- 多様な発想を生み出す雰囲気をつくろう。
- 時間厳守で行動しよう！
- 安全、健康に注意をしよう。

AIM

- Engage with those who wish to work on the world stage.
- Grasp the image of “working in society with motivation.”
- Provide opportunities to think about your roles in local and global societies.
- Find motivation to actively pursue your career.

RULES

- Speak out! Share your opinions freely.
- Make sure that we are all participants.
- Have your own ideas as well as respecting different ideas of others.
- Express your own opinion.
- Try to make a congenial atmosphere to encourage interest and creativity.
- Always be punctual.
- Pay attention to safety and to your health.

国際キャリア教育

1. 概要

🌐 目的

－問題解決能力を身につける－

国際的な分野で仕事をするための専門的知識と実務能力の向上に向け、第一線で活躍する講師を招き、演習を通して高度な専門知識や技能、仕事への姿勢を学び、国際キャリアの具体化を目指します。

🌐 開催日程

2023年9月16日(土) ～ 9月18日(月祝)

事前指導：2023年7月24日(火) 18:00-19:30

🌐 実施形態

Zoom 等によるオンライン授業

	<p>2「グローバル人材」とは何か?</p> <ul style="list-style-type: none"> 2009年「新成長戦略実現会議」の開催 2010年「グローバル人材育成推進会議」設置 2012年度「グローバル人材育成事業公募」 <p>の景気後退、若い世代の「内向き志向」</p> <p>の台頭、アジア諸国の国際的な産業競争力や国と国との絆の強化</p> <p>な舞台上に活躍できる「人材」の育成</p> <p>グローバル化を目的とした体制整備を事業に対する政府の財政支援、採択42億円支給</p>	<p>ブレイクアウトルーム 1 (B R10分+MS 10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己紹介(名前・所属など) 参加目的や参加しようと思った理由は? 参加する「分科会」は? 学 今回のセミナーに期待するこ
<p>開講式</p>	<p>全体講義</p>	<p>ワークショップ</p>
<p>トリエの未来</p> <p>『ライフスタイルビューティコンサルタント』</p> <p>三面美容＝外見×内面×精神面</p> <p>100年時代をお客様が健康で美しく自分らしい暮らしが出来るようにサポートさせていただきます</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美しい暮らしをデザインする＝日常のお客様の生活の中の占 ・マインドディスタンスは、近く・・・お客様との心の距離 	<p>宇都宮大学国際キャリア教育プログラム</p> <p>セミナー1日目パネルトーク</p> <p>キーワード</p> <p>留学生のサポート</p> <p>留学生の生活</p> <p>留学生のサポート</p>	<p>課題①日本語初期指導教室</p> <p>現状</p> <ul style="list-style-type: none"> <羽ばたき教室> 二か月間 午前中に日本語の授業 二か月間の後、在籍校に移籍 <外国人児童生徒の声> 日本語がわからない <保護者の声> 進学や就職についての悩み
<p>パネルトーク</p>	<p>パネルトーク</p>	<p>分科会</p>
<p>なぜインドなのか</p> <p>都市部では女性の社会進出が進んでいる</p> <p>インドが中産階級の47%が女性のCEOを務める</p> <p>例) PepsiCoのCEO インドラ・ノイ</p> <p>ICDのCEO、チャンドラ・コトナカー</p> <p>都市部では女性に選ばれる機会が増えてきている</p> <p>しかし、一方で差別と偏見や、都市部と地方との格差が大きくなっている</p>	<p>私たちはなぜ多文化共生に興味を持ったのか?</p> <p>一文字など、身近に外国人といることがきっかけとして多かった</p> <p>多文化共生に興味を持ったため文化とかかわる機会が必要である</p> <p>しかし日本の中での普段の生活の中で、かわったり、異文化を感じる機会が少ない</p>	
<p>中間発表</p>	<p>全体発表</p>	<p>振りかえり・閉講式</p>

2. 開催日程

1日目（9月16日 土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
9:00 9:30	受付	13:00 15:00	パネルトーク 「グローバル時代におけるキャリア形成について」
9:30 9:50	開講式 オリエンテーション	15:10 15:30	趣旨説明 分科会・プレゼン方法の説明等
9:50 12:00	全体講義 ワークショップ	15:50 17:50	分科会
12:00 12:50	昼食		

2日目（9月17日 日曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30 12:00	分科会	15:30 16:30	分科会まとめ 中間発表準備
12:00 12:50	昼食	16:30 17:30	中間発表
13:00 15:30	分科会	17:30 18:30	分科会 発表準備

3日目（9月18日 月曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30 10:00	分科会 発表準備	12:20 13:10	昼食
10:00 12:20	全体発表 (発表10分、質疑応答5分、講評5分)	13:30 15:00	ふりかえり・閉講式

3. 全体講義



混迷の時代の国際キャリアを考える — 真のグローバル人材に必要な条件 —

重田 康博 (しげた やすひろ)

宇都宮大学 国際学部客員教授 / 前国際キャリア教育運営委員会委員長

略 歴：

北九州市立大学大学院社会システム研究科博士後期課程修了 (博士・学術)。国際協力推進協会 (APIC) 主任研究員、クリスチャン・エイド客員研究員 (イギリス・ロンドン)、NGO 活動推進センター (現、国際協力 NGO センター、JANIC) 主幹等を経て元宇都宮大学国際学部教授 (2007-2022)、専門は国際開発研究、国際 NGO 研究。JANIC 政策アドバイザー、アジア・アフリカ研究所理事、JVC とちぎネットワーク代表。福島原発震災に関する研究フォーラム・アドバイザー。著書に『NGO の発展の軌跡』 (明石書店 2005)、『国際 NGO が世界を変える』 (共著、東信堂 2006)、『開発教育—持続可能な世界のために』 (共著、学文社 2008)、『激動するグローバル市民社会—慈善から公正への発展と展開』 (明石書店 2017)、『グローバル時代の「開発」を考える—世界と関わり、共に生きるための 7 つのヒント』 (共著、2017 明石書店)、『SDGs 時代のグローバル開発協力論』 (編著、明石書店 2019)、『日本の国際協力 アジア編—経済成長から「持続可能な社会」の実現へ』 (編著、ミネルヴァ書房 2021)、他。

🌐 全体講義の概要

今世界は混迷の時代と言われています。その混迷の時代を生きるための真のグローバル人材とは何か、その必要な条件を具体的な事例を示しながら紹介し、国際キャリア形成について考えます。

★最初に、混迷の時代とはどのような時代なのかを説明します。

21 世紀は 9.11 米国同時多発テロに始まり、今日まで世界のいたるところで、未曾有の

危機が発生しています。米国などの主導による経済のグローバル化の進行により、かつての先進国と途上国の間の格差だけではなく、同じ国の中の富者と貧者、都市生活者と農今世界各地で、国家の分断、孤立、難民・移民の排除、自国第一主義とポピュリズムの波が押し寄せ、第 2 次世界大戦後世界の多くの国が目指してきた、「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の危機が叫ばれています。

このような「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の崩壊の危機の中で、NGO・CSO (市民社会組織) も含めたグローバル市民社会による多元主義の再構築と公共圏の形成が求められています。

この危機をどのように乗り越えるのか、どのように「国際協調主義」と「共生できる寛容な社会」を取り戻せるのでしょうか。混迷する時代を生きるためにグローバル人材をどのように育成すればいいのでしょうか。

★次に、「グローバル人材」とは、何かを説明します。

では、「グローバル人材」にはどのような能力が求められるのでしょうか。2011 年 6 月文部省「グローバル人材育成推進会議」中間まとめ」では、そのポイントとして、「語学力向上 (英語)」と「内向き志向」



の克服で、その取組みは「英語」と「海外体験」となっています。しかし、この「英語」と「海外体験」だけで今の混迷の時代を生きるグローバル人材を育てられるのでしょうか？

☆宇都宮大学グローバル構想—「地域からのグローバル化」「地域のグローバル化」に貢献

☆国際学部国際学科において養成する人材像（改組に伴い2017年4月から実施）

⇒21世紀型グローバル人材（グローカル人材）の育成

☆国際学部の卒業生は、その多くがグローバル企業、マスコミ、NGOなどで働き、国内外で活躍しています。

★最後に、地球公益を目指す「グローバル（地球）市民」について説明します。

「グローバル（地球）市民」として生きるためには、「グローバル（地球）市民社会」の育成が必要だと思えます。つまり、「国際協調」を超えた「地球公益」を求めていく人間や社会を育て、「非寛容社会」から「寛容社会」への価値観の転換が求められています。

☆国連による「持続可能な開発目標（SDGs, Sustainable Development Goals）」は、2015年9月の国連総会で採択され、17の目標と169のターゲットからなり、2016年から2030年までの15年間世界の国々はこの開発目標の達成に向けて取り組み、その達成のために、国際機関、国家、企業、NGO・CSOが問題の解決に向けて取り組むことが求められています。

☆「地球公益（地球市民のための公益, Global Public Interests）」とは、公正な地球社会を求める世界の人々のための非営利活動です。その根底にあるのは公正、寛容、包摂、共生、多様性、多文化です。「地球公益」を求めることは、グローバルマインドを養い、グローバル人材を育成することだと思えます。

★グローバル人材には何が必要？- 多様性の尊重 Diversity

☆海外に住む日本人、日本に住む外国人の増加

☆女性、マイノリティの社会参加

☆相手の宗教、言語、文化の尊重

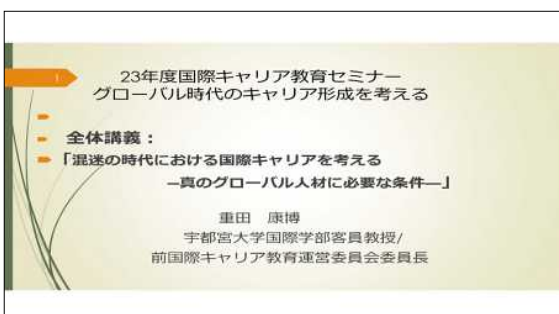
☆コロナ禍の中で世界や日本がどのように変わるのか

☆多様な働き方、多様な学び方に変化

☆多様なITの活用による人のつながり方の変化—SNS、検索エンジン、GAFAsのパワフル化

参考文献

- 駒井洋監修/五十嵐泰正・明石純一編著『「グローバル人材」をめぐる政策と現実』
- 明石書店、2015年
- 加藤／九木元『グローバル人材とは誰か 若者の海外経験の意味を問う』
- 青弓社、2016年
- 重田康博『激動するグローバル市民社会—慈善から公正へ発展と展開』
- 明石書店、2017年
- 友松篤信『グローバルキャリア教育—グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版 2012年



3 本日の構成

- レクチャー1： 混迷の時代とはどのような時代なのか？
- レクチャー2： 「グローバル人材」とは何か？
- レクチャー3： 地球市民（グローバル市民）とは？
- レクチャー4： 真のグローバル人材に必要な条件とは？

1 混迷の時代とはどのような時代なのか

1が 一続き世界の激変

- 今日世界各地で、国境、個人の間、道徳、不寛容、難民、移民の排除、投票第一主義と化けりてきた。コロナ禍後始末、大衆の非難の波が押し寄せ、第2次世界大戦後世界最大の国が自壊してきた。【国際経済主義】「決まてきた再発は社会」の危機
- イギリスのEU離脱、ポピュリズムの台頭-内向き志向
- 中国の一帶一路政策、強硬的・権威主義的な国家の台頭
- シリア難民、ロヒンギヤ難民の流入
- イスラム過激派集団（アルカイダ、IS）の台頭
- 3.11日本の自然災害、原発災害
- COVID-19（新型コロナウイルス感染症）拡大によるパンデミック増加、都市封鎖（ロックダウン）、人の移動に影響
- ロシアのウクライナ侵襲、ミャンマー一軍事クーデター発生、アフガニスタン米軍撤退とタリバン政権樹立、平和とエネルギー-食料不安、物価高、円安

複合危機 Polycrisis

世界経済フォーラム2023年1月年次総会（ダボス会議）「グローバルリスク報告書」

- 「現在あるいは将来の複数のグローバルリスクが組み合って複合的な影響や予測できない結果を生み出す。様々なリスクが連鎖して増幅すること」
- 外務省「開発協力大綱」「国際社会は歴史的な転換点にあり、複合的危機に直面している」（2023年6月9日）
- JICA高原所長「複合危機（Compounded Crisis）の時代の生活、私たちが囲む3つのシステムの間の脅威」
- 1 物理的システム、2 生活的システム、3 社会的システム



「バタフライ効果：Butterfly Effect」

「コロナ後は「VOCA」の時代

- 「バタフライ効果：Butterfly Effect」
- 1972年 気象学者エドワード・ローレンツ提唱
- 「一匹の蝶の羽ばたきで遠くの場所の気象に影響を与える」
- 例、ジェームズ・グリック『カオス-新しい科学をつくる』、映画『バハバ』、NHKテレビ「映像の世紀」
- 人類が病気に対する免疫力を持つのかどうか？ ウイルスは「隠れることに」シラレット・ガイザモト『疫、病源書- 疾』（早稲社、『危機と人類』（日本経済新聞社）等
- 新型コロナウイルスは私たちの生活を一家させ、「VOCA（ブーカ）」の時代
- 変動性（Volatility）、不確実性（Uncertainty）、複雑性（Complexity）、曖昧性（Ambiguity）、2016年の世界経済フォーラムで使用



SDGs(持続可能な開発目標)

2015年9月の国連サミットで全会一致で採択。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標」

- 普遍性 先進国を含め、全ての国が行動
- 包摂性 人間の安全保障の理念を反映し「誰一人取り残さない」
- 参加型 全てのステークホルダーが参加
- 統合性 社会・経済・環境に統合的に取り組む
- 透明性 定期的なレビュー

2 「グローバル人材」とは何か？

- 2009年「新成長戦略実現会議」の開催
- 2010年「グローバル人材育成推進会議」設置
- 2012年度「グローバル人材育成事業公募」
- 日本経済の景気後退、若い世代の「内向き志向」の克服
- 中国、韓国、台湾、アジア諸国の国際的な産業競争力の向上や国と国との絆の強化
- グローバルな舞台に活躍できる「人材」の育成
- 高等教育のグローバル化を目的とした体制整備を推進する事業に対する政府の財政支援、採択42校、50億円支給

求められる能力

- 2011年6月「推進会議 中間とめ」
- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ
- ポイントは、「語学力向上」(英語)と「内向き志向」の克服、取組は「英語」と「海外体験」

「優れた取組」を評価する観点 (日本学術振興会)

- 1 教育課程の国際有用性 (大学の改革)
- 2 グローバル人材としての能力育成(学生の育成)
- 3 語学力向上のための一体的取組 (学生の育成)
- 4 教員のグローバル教育力向上 (大学の改革)
- 5 日本人留学生の留学を促進するための環境整備 (学生の育成)

グローバル人材には何が必要？ 多様性の尊重 Diversity

- 海外に住む日本人、日本に住む外国人の増加
- 女性、マイノリティの社会参加
- 相手の宗教、言語、文化の尊重
- コロナ禍の中で世界や日本がどのように変わるのか
- 多様な働き方、多様な学び方に変化
- 多様なITの活用による人のつながり方の変化-SNS、検索エンジン、GAFAのパワフル化

3 「地球（グローバル）市民」とは どのような国際キャリアを歩むのか？

なぜ世界の問題に関心を持ったのか？

- 主体的に「きっかけ」を作る。
- 自分が気づかなければ何も変わらない、自分が気づけば世界が変わる
- 世界の問題に関わることができるキャリアの道
- 世界の問題に関心を持ち続け、常に自分との関わりを考える

2019年に亡くなった二人の日本の国際人 —国際協力、平和、アフガニスタン

緒方貞子さん (1927-2019) **中村哲さん** (1946-2019)

緒方貞子さんの人生キャリア

—難民救済と人間の安全保障—

- 1927年生、東京都、大隈毅首相のひ孫、父中村豊（日外交官、外交官一家）
- 米国での経験、英語の勉強、日中関係の重要性
- 聖心女子大学、ジョージタウン大学、カルフォルニア大学パーフルー校、国際協力を学ぶ
- 結婚して家庭へ、国際基督教大学講師から国際連帯協会日本代表団へ、女性国連公使第1号、国連の定員外委員
- 国際基督教大学准教授、上智大学教授等歴任
- 第8代国連難民高等弁務官（1990年～2000年）
- JICA理事長（2003年-2013年）
- 2019年ご逝去
- 『2020年4月の安全保障危機、援助再開を希望する双方が利益が失事、懸念を恐れ、援助再開を希望』

中村哲さんの人生キャリア

—アフガニスタン30年の闘いと難民支援

- 1946年福岡市生、医師、脳神経内科、九州大学医学部
- 日本キリスト教海外医療協力会（JOC5）からパキスタン・ベトナムへ派遣、ベトナム戦争現場代表、ハンセン病を中心とする医療活動
- その後、アフガニスタンで医療活動、純粋に土木技術を学ぶ、アフガニスタンでクナール川からカンヘリ一筋まで掘（せき、筑後川山田堀）を作り、5千口の用水路建設・約20万人の農民の生計基盤を支援、**医学、農業、土木の融合**
- 2018年アフガニスタン国家勲章受章、2019年名誉市民
- 2019年12月4日アフガニスタン東部ジャラーバドで銃撃を受け、ご逝去
- 中村さんの言葉「一隅を顧らす」（藤原の名言）、「良心を束ねて河となす」、「天、共に在り」

私の世界の問題への関心

- 大学の時インドシナ内戦とインドシナ難民の発生、カンボジアのポルポト政権による大虐殺とベトナムからのボートピープルの大きな衝撃、世界の問題に関心を持つきっかけ
- 民間企業化学メーカー営業 1年半勤務
- 特殊法人嘱託出版・編集 3年半勤務
- 財団法人国際協力推進協会（IAPIC）研究員 8年勤務
- 英国NGO Christian Aid ロンドン客員研究員 3年勤務
- NGO活動推進センター（JANIC）政策提言・調査 3年勤務
- 大学教員22年、宇都宮大学国際学部教授15年勤務
- 2022年定年退職、その後宇都宮大学国際学部客員教授
- 国際協力NGOセンター（JANIC）/THINK Lobby政策アドバイザー

国際文化会館・国際協力推進協会理事 松本博史（享年91歳）との出会い私の人生の原動力

- 松本氏の持論：3つのP・3つの心
- Public Mind（おおやけの心）
- Produced Mind（しかつもの心）
- Play Mind（あそびの心）
- 自分のボールは相手に投げ返せ！
- 「誰と出会うのか、人との出会い」



南の国々との出会い

- 大学時代の1981年に南の大国「インド」を訪問、コルカタ、ヴェナラシ、アグラ、カジュラホ、ゴア、ムンバイに滞在
- インドを訪問したのは南の国の代表であり、混沌とした状態を実体験したかった
- 例、小田実『何でも見てやろう』、藤原新也『インド放浪』『全東洋街道』
- 南の都市カルカッタ（コルカタ）へ行ってみて、「貧困」というグローバル・イシューの問題と初めて直接向き合う。



南の国々でのグローバル・イシューとの出会い （カンボジア）クメール・ルージュの悲劇を乗り越えて

- カンボジアの国際報道
- 1977年のカンボジアのポルポト政権による虐政と約150万人の虐殺、カンボジア難民の流出の衝撃
- その後筆者がカンボジアのNGO研究を行い、国際協力活動に参加していく契機
- 1988年カンボジアを日本国際ボランティアセンター（JVC）の視察団のメンバーとして訪問し、虐殺や紛争の悲惨を知る。
- カンボジアの紛争や貧困問題などグローバル・イシューに関わることになる。



1988年日本国際ボランティアセンター（JVC）カンボジア・給水活動を行う豊田さん




南の国々でのグローバル・イシューとの出会い （スリランカ）

- 1987年スリランカサルボヤヤ運動領袖者アリヤットネ氏と記念撮影、私情結露、人間の尊厳と労働の分かち合い
- サルボヤヤの「人間開発モデル」人間開発の二ス（DHC）を高たすために、
 - ①きれいで美しい環境。
 - ②清潔な飲料水。
 - ③十分な食料の供給。
 - ④適正でバランスのとれた労働。
 - ⑤健全な健康。
 - ⑥基本的ヘルスケア。
 - ⑦基本的な交通・通信機能。
 - ⑧中小企業の土手手一供給。
 - ⑨十分な教育。
 - ⑩精神的・文化的二スの実現（アリヤットネ、ビニヤ、2011）
- 人間開発モデルは、経済開発だけでなく、文化的、道徳的、精神的開発が重要であり、伝統文化、宗教的価値観を尊重し、心の豊かというアプローチを重視、低所得社会を多面的に支援する必要があると提言されている。



北の国々でのグローバル・イシューとの出会い（カナダ、イギリス）

- 多様な移民国家「カナダ」での開発教育活動
- 1987年に外務省の「カナダの開発教育実地調査団」に参加した時、カナダのNGOや開発教育団体が多様な開発の課題を自らの「多文化共生社会」に引き付けて、教材の作成など開発教育の実践を行っていることが新鮮だった。
- 「イギリス」でのNGO活動
- 1994年から1997年までのNGO「クリスチャン・エイド」に客員研究員として在籍した。英国のNGOは海外協力、キャンペーン政策提言、開発教育、フェアトレード活動を通じて行って「貧困問題」「貿易問題」（例「貿易ゲーム」）「債務問題」を扱う。



北の国々でのグローバル・イシューとの出会い（イギリス） 多様性と女性の参加

- クリスチャン・エイドのアジア・太平洋チームと共に、左巻が筆者（1994）。
- 特にグローバル・イシューはやり方次第で世界的なキャンペーンになることをアフリカの債務削減運動「ジュビリー2000」の活動を通じて実感
- 1994年からロンドンの大学院にも通い、Development Studiesを学んだことはグローバル・イシューをマクロの視点から開発、貧困、債務問題など総合的に分析する必要性を教えてくれた。世襲の東洋の高級、アフリカの構造調整プログラムの原動力

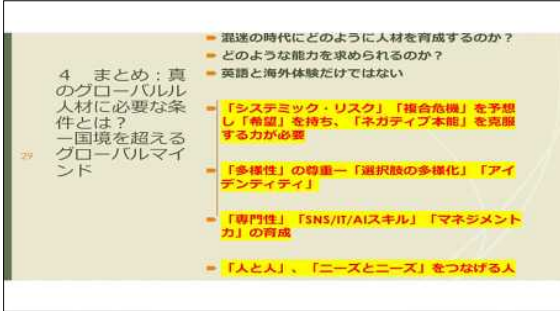
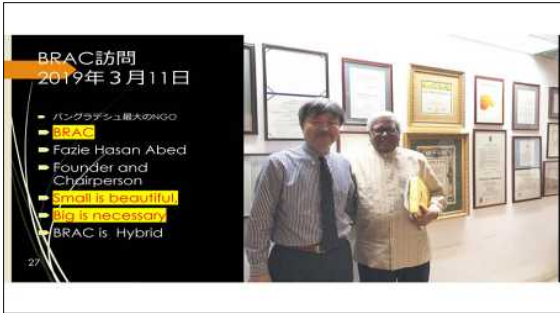


グローバル・イシューの活動に参加（貧困問題、貿易格差、債務削減）

2000年オックスファム・インターナショナル誌、事務局長クリスティー・ボウアップスと共に

筆者も日本のNGO「オックスファム・ジャパン」や「ほっとけない世界のまずしさキャンペーン（通称ホワイトバンド・キャンペーン）」「ジュビリー2000九州」の活動への参加を通じて、貧困問題、貿易格差、債務削減の解決を訴えた。

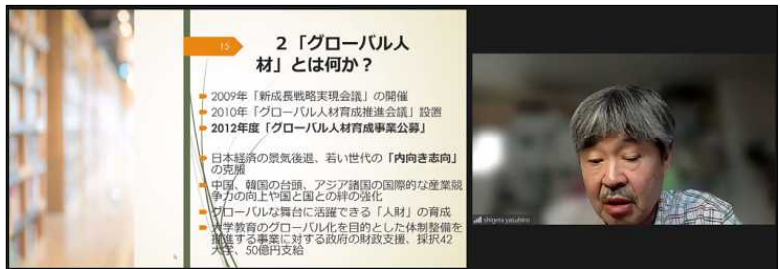




参加者のレポートより

(コメントは原文のまま記載しています。)

- 「グローバル人材」についての議論では、語学のスキルだけでなく「主体的に行動を起こせる人」が話題となった。自分のこれまでの内気な行動を省みて、さまざまな場面で周りの目や失敗を恐れずに行動していくことが国際社会で活躍するために大切なことだと考えた。
- 全体講義で「グローバル人材」になるためには課題発見力・解決力、柔軟性、コミュニケーション能力、積極性、国際的感覚、偏見をなくすことが大切だと先生がおっしゃっていたことから、
- 「グローバル人材」は国際学部に限らず他のすべての学部や学問で必要とされるのではないかと感じた。「グローバル=世界」というイメージもあるが、日本国内、地域社会の中でも広い視野を持って問題を見つけ解決していく姿勢は重要であり忘れてはいけない。それが自分の仕事やキャリアにも必然的に繋がっていくと考える。
- 講義のはじめで示された、G7のみならずグローバルサウスや中国の影響が国際社会において強くなっていることや、物理的、生活、社会的システムという様々な危機が表面化してきている複合危機の時代に生きるということは、今の時代がよりスピード感を持って変化しているということであり、その変化に対応していくためには、グループワークでの議論にもあったが、誰もがグローバル人材を意識していかなければならないということである。
- 講義とグループワークの内容から、異文化間の違いは「乗り越えるべきもの」ではないのかも知れないという新たな気づきがあった。それぞれが持つアイデンティティは、周りとは異なる時に弱いものと



なりどうしても周りに合わせようとしがちになるが、そうした視点から重田先生はアイデンティティを大切にすることをお話されていたのかもしれないと洞察した。

- グローバル人材には様々な能力が求められるが、グローバル人材を育成するためには日本の教育制度や社会の風潮を変えていく必要があると思った。年上や目上の人を無条件に敬い従うのではなく本当に正しい意見を取り入れる、空気を読むということをしすぎない社会を作っていく、各々が自分の池に自信をもって発言しやすくしていく必要があると思った。
- 自分と相手を客観視できる人。相手の文化と日本の文化の違いを客観的に捉え、互いの違いや特徴を客観的に分析してコミュニケーションをとることが大切だと考える。たとえ、自分の文化と相手の文化が異なっていたとしても、冷静に互いを見つめることが重要だと考える。
- 講義のキーワードから次のことを考えた。「複合危機」という問題について、多くの事態が世界で同時に起こっていることを実感する。一方で、いつの時代にも、複合的な課題はあるのではないのかと考える。特に、現在はその重要度が高い。「AI との向き合い方」について、自動化の可能性が低いといわれる職業は人同士の関わりや協調性が必要とされること、娯楽として楽しめるものを創造する職業が挙げられると考える。複合的な理由から生まれる人同士の問題は、人の手による解決が望まれることが多いからだと考える。「歴史を忘れずに対話を提唱する」ことについて、互いの利益がある状態でない摩擦が生じる可能性も考えられる。これまでの歴史を忘れることなく、双方の発展のためにどのような援助、取り組みをするかも重要だと考える。「AI に勝つ、勝たないではなく、利用していく」こと。人間が生み出した技術は、利用し、共生していく必要があると考える。AI にできること、AI にしかできないことを考える必要があると考える。
- 全体講義では、重田先生の講義をお聞きして、現代におけるこの混迷の時代に私たちが出来ることは何なのかについて個人的に考えながら講義をお聞きしていました。様々な要素が複雑に絡み合った現代において、一つ一つの事について深く考えていく必要性を改めて全体講義とブレイクアウトセッションを通して感じました。
- 全体で発言する事はまだできませんでしたが、ブレイクアウトセッションがあることで自分の意見を発言し、また、他人の意見を聞いて学ぶことができました。ブレイクアウトセッションがあったことによって自分の意見を深掘りすることができました。
- 最初にグローバル人材とは何か?ということについて知れたことで、この2日間の心構えができました。また、ブレイクアウトルームで大学生の方とお話できたことで、この後の分科会などで話すことの中でのハードルを下げることができました。



4. 分科会・講師及び講義概要

分科会 A	視点を改めて誰でもチャレンジできる国際ビジネス
講師	郡司 成江 氏 ビューティーアトリエグループ総美有限会社 代表取締役社長
分科会 B	日本と海外をつなぐ働き方を考える
講師	宮原 麻季 氏 認定 NPO 法人シャプラニール＝市民による海外協力の会 事業推進グループ チーフ
分科会 C	国際社会における都市経営
講師	毛塚 幹人 氏 都市経営アドバイザー（那須塩原市・さくら市市政アドバイザー等）
分科会 D	「多文化」が「共生」する社会とは？
講師	申 惠媛 氏 宇都宮大学 国際学部 助教
分科会 E	「違い」を越えた友だち
講師	リーペレス・ファビオ 氏 宇都宮大学 国際学部 助教
分科会 F	異文化理解コミュニケーションで必要なこととは？
講師	浅水 伸介 氏 カンボジア・ベトナム屋 代表

分科会 A



視点を変えて誰でもチャレンジできる 国際ビジネス

郡司 成江（ぐんじ まさえ）

ビューティーアトリエグループ総美有限会社 代表取締役社長

略 歴：

大学卒業し英国留学後、美容師から美容室経営へ。「三面美養（外面・内面・精神面）」をテーマにベトナム進出や多業種を展開。現在 9 業種 26 店舗を運営。これまでに独自の人財育成を 1000 人以上行い、第 11 回「日本でいちばん大切にしたい会社大賞」審査委員会特別賞受賞。経営者向けの講演への登壇や、著書を出版。

🌐 講義の概要

1. 仕事の概要

宇都宮と海外店舗ホーチミン、ダナン 9 業種 23 店舗（三面美容＝外面：理美容室、マツエクサロン、エステサロン、頭皮専門店、内面：米粉のバームクーヘン専門店、カフェ、精神面：セミナー事業）の経営と人財育成を行っております。

ビジネス成功の、秘訣の一つは『人』だと思い、人財育成に力を入れています。理美容の地位向上と働く環境の改善、そして生産性を高め一生働ける仕事にするために、髪を切るだけの仕事ではいけないと考え、新たな思考でライフスタイルビューティコンサルタントを構築している最中です。

100 年時代のキャリアパス、日本の素晴らしい理美容技術とおもてなしのサービス精神を世界に広める為に、海外ビジネスを取り入れております。



2. キャリアパス

『学生時代』

子供の頃の夢は、『専業主婦』でした。共稼ぎの両親の元育った私は、帰って来たら母が家において、手作りのお菓子がある家庭環境に憧れていました。しかし、思春期を迎えるにあたり「頑張る事で自分を認めて欲しい」「自分の得意なモノを身に付けたい」と考えました。

大学はまだまだそれが見えずに、目的もあまり明確ではなく、ただリーダーになりたい、リーダーになるだろうという思いで経営学部に入學。大学の授業を受ける中で違和感を覚え、やりたいことは、人やモデルさんを綺麗にするヘアメイク、美容師だと気づき、大学を中退しようとなりました。しかし、「始めた事を途中で投げ出すな！」「無責任な事はするな！」と両親から助言され、大学と夜間のヘアメイク専門学校という二足の草鞋を履きました。

『海外留学』

その後、大学卒業とともに就職先に迷い、実践的なヘアの技術を学ぶためにイギリス、ヴィダルサスーンに留学。その後現地のヘアサロンで就職し、経験を積み、日本のビューティーアトリエに入社しました。

『社会人』

技術者としてお客様に日々向き合い、自分の経験を活かし若手スタッフへの技術指導や、憧れだったパリコレクション、NY コレクションなど、世界のファッションショーのヘアメイクを約 10 年間担当。しかし、個人の夢は叶うが自分の完璧主義とエゴにより、スタッフ、仲間は育たず。人は辞め、売り上げは伸びず人財育成には失敗の日々でした。

『転換期』

結婚、出産をする事で、「自分一人では何も出来ない。仲間は大切だ」と気づき、人を育てる事に力を入れました。その結果、働き方は一つじゃない、人を生かし輝かせる経営「人を大切に作る経営」を目指すようになりました。その結果 2011 年「日本でいちばん大切にしたい会社大賞 審査委員会特別賞」を頂きました。

『現在』

業界の地位向上、未来 100 年時代に対応できる働き方のために、髪を切るだけではない「三面美容」をお伝えし、お客様に寄り添うライフスタイルビューティコンサルタントの職を作り上げています。10 年前から日本の技術とおもてなしを栃木から世界に広げるために、ベトナム海外店を展開中。そして、考え方を未来からの逆算思考にする事と、習慣をつける事で未来は劇的に変わると自分自身が体験した事をきっかけに、セミナー講師として『自分らしい未来デザインの作り方』『これからの人財育成』『理想のメンバーを育む魔法の書の作り方』などの講座を運営。人財育成コンサルタントの仕事を行なっています。

3. 分科会の内容

100 年時代、働き方改革、DX化などのスピードが速い時代が訪れ、何が正しいか何が求められるかを読んでいくことは、大変難しい時代になっています。

これからのビジネスや国際ビジネスを考える上で大切な事は、何のために何をするか？という“WHY”。

なぜそのビジネスをやるのか？やりたいのか？目の前の利益や現状だけでなく、未来から考えてくる逆算思考で、自分の未来を計画してみることがビジネスの第一歩。

答えは、必ずあなたの中にある。その答えをしっかりと言語化してみることから始めていきます。

その後、現状把握をして、可能なビジネスのプランを立ててみましょう。

4. 事前に調べてほしいキーワード

- 100 年時代
- これからのニーズ
- 逆算思考
- やり方と在り方

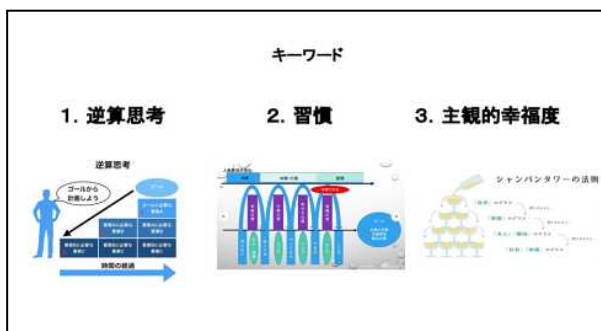
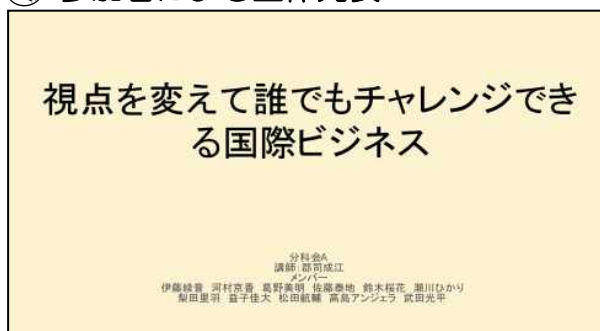
5. 参考資料等

- 『LIFE SHIFT (ライフ・シフト) —100 年時代の人生戦略』
アンドリュー・スコット、リンダ・グラットン著、池村千秋訳、東洋経済新報社、2016 年
- 『賢者の書』多喜川泰著、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2009 年

6. 事前予習用リーディング課題

特別ありませんが、自分の未来や夢について考えておいてください。

参加者による全体発表




思考の習慣
 逆算思考を取り入れて、前向きに自分に必要なことを考えてみる...

思考が変われば、意識も変わる

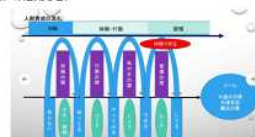
➡ **何に意識を向けるかで人生が大きく変わる!**

"成功"は人によって違う
 自分がなりたいモノに意識を向けていく



行動の習慣、思考の習慣は一人で継続することは
 少し難しいかもしれない...

そんな時は、一人ではなく**仲間**と共に取り組みましょう!
 (家族、友達、恋人、ネット上の仲間、継続アプリケーションの活用など)



行動・思考を習慣化していく上で、
 新たな価値観や目標ができるかもしれない

➡ 一度決めた習慣にとらわれずに、
日々変化させていくことが大切である。

自己の成長のために、身近なことから
 チャレンジしていきましょう!

3. 主観的幸福度

あなたは1日の中で何回幸せを感じますか?

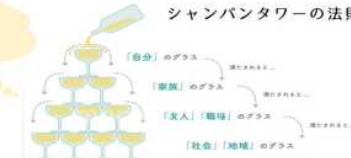
主観的幸福度

なぜ重要か

1. **自分が満たされてないと相手を傷つけてしまう**

自分を満たすことで満足感が連鎖していく

シャンパンタワーの法則



行動計画

①「自分が辛くなってきたら自分を満たす」
 e.g) 自分ばかり大変だと感じる
 →積極的に休暇を取ってリフレッシュすることで
良いチームワークを構築する

②「福利厚生を充実させる」
 e.g) 有給休暇、育児休暇、介護休暇を取りやすくする
 →個人のQOLの上昇により**国際社会全体の生産性向上**



主観的幸福度

なぜ重要か

2. **創造性、生産性、売上があがる**

考え方一つでパフォーマンスが向上する

主観的幸福度が高い人は、
 そうでない人に比べて、

創造性は3倍
生産性は31%
売上げは37%高い

イリノイス大学春田校のエド・ディーナー博士

4. 私たちが考える国際ビジネスの例

留学生との言語交換

<事業内容>
 宇都宮(栃木)に来ている留学生と言語交換を行う、ツアーを考える。
 普通の言語教室より安く提供する。日本には教室がない珍しい言語、ひとりでは学ぶことが難しい言語を学ぶことができる。

<方法>
 ターゲットを決める＝**逆算思考**
 ↓
 言語を学ぶ＝**習慣**

主観的幸福度を高める
 ↓
 働きやすい環境になる
 ↓
 事業が大きくなる

まとめ

逆算思考 **キーワード** **主観的幸福度**

逆算思考 習慣 シャンパンタワーの逆順

参考文献 画像引用元 (最終閲覧日 2023年9月18日)

・郡司成江「視点を変えて誰でも挑戦出来る国際ビジネス2」
<https://2023-zit7565-slack.com/files/u0564-47EYM7F9J5TONYBDEDJ.pdf>

Sonja Lyubomirsky, Laura King, and Ed Diener, 2005, The Benefits of Frequent Positive Affect: Does Happiness Lead to Success?, American Psychological Association (APA).

Takashi Sugimura「逆算思考のやり方」https://sugimuratakashi.com/back_think/

ご清聴ありがとうございました

分科会A: 視点を変えて誰でもチャレンジできる国際ビジネス

参加者のレポートより

(コメントは原文のまま記載しています。)

- 私は、将来やりたいことが明確に決まっていなかった状態でセミナーに臨んだが、講義を通して、自分と向き合うことができ、将来やりたいこと、自分の興味があることを見つけることができたと感じている。若者である私たちは、将来に向けていろいろなことにチャレンジすることができ、成長

できるタイミングも無限大にある。失敗を恐れずに物事に取り組むことで後悔しない人生づくりができると思う。また、周囲にある様々なものに対応していくために、知識を得て、柔軟な思考を身につけていこうと思う。

- 本当にお世話になりました。キーワードの勉強に留まらず、自己分析などを通して非常に勉強になる3日間になりました。自分の興味のある分科会に入ることができて幸せでした。
- 先生のお話が面白く、ためになり受講して本当に良かったと感じています。自分の将来をもう一度考えることができました。普段ならネガティブに考えがちなこともポジティブに考える術をもらいました。
- 将来は先が見えず暗いものではなく、自分の未知の世界に触れ自分のやりたい方法で築いていけるものだと気づくことができた。失敗は長い人生でのほんの短く儂いものであり、失敗することで多くのものが見えてくる。人生の100年計画を逆算思考で考え、それに向かって、良き習慣を継続し未来を形作っていくことが大事であると学んだ。
- 分科会を通して、キャリア形成の基盤となる、人格形成であったり、心理であったり、習慣構築の重要性を学ぶことができた。
- 自分自身にはやりたいことがないと思っていたが、事前課題の「やりたいことリスト」に取り組み自分と向き合い、自分にもやりたことがあるのだと気づき安心した。まだ漠然としている「やりたいこと」から逆算思考で今自分がやるべきこと、習慣を身につけていくことで、少しずつ、将来に向けた道筋ができるのだと学んだ。
- 多くの学びの中で、特に「逆算思考」の考え方が印象的だった。今できること・できないことに注目するのではなく、目標に向けてこれからできること・できるようにならないといけないことを洗い出し、ゴールに向けた明確なプロセスを構築して行くことが大切だとの学びを得た。
- このセミナーの利点は学外の先生方からもお話を聞ける点であると思う。郡司先生の豊かな経験から来るお話は学問とは違う部分での深い内容で、有意義な時間を過ごすことができた。機会があったら是非また参加していただきたいと思う。
- 自分がやりたいことをリストアップすることで、自分の長所は何か等、自分を見つめ直す機会が設けられており、その中で、現状を重視するがあまり自分のやりたいことを目標とせず諦めてしまうことが多いと実感した。分科会で学んだ逆算思考・主観的幸福度を意識したキャリア形成をして行こうと思う。自分の欲に対して素直になることが第一歩であると感じた。



- 将来の職業については明確なプランをまだ持っていない。まずは、自分が何をしたいのかから考えていきたい。これまでは、自分に何ができるかを軸に考えていた。足りないものは補えばよいというシンプルな考え方を今回のセミナーから自らのキャリアの道筋の一つとして加えていきたい。自分が何をしたいか何に興味を持っているか少し自分にわがままになって考えてみようと思うに至った。
- 逆算思考(バックキャストिंग): 行き当たりばったりの足し算思考ではなくプランニングしたうえで逆算思考を考えることが大切。習慣・スモールスタート: 未来を作るは現在の習慣であるからこそスモールスタートで行動・アクションをおこすことが大切である。一人で抱え込まずセルフシャンパングラスを(主観的幸福度): 「自分は頑張っているのに誰もわかってくれない」と限界を迎える前にストレス対処はリフレッシュをすることが大切。自分が休むことで他の人が貢献してくれて、調和が可能になる場合もある。
- 今回のセミナーではビジネスを行っていく上で、一人で行うのではなく仲間と一緒にゴールから逆算して努力していくことが大切だと学んだ。仲間がいることで自分の過度な負担も減り周りを見る余裕も生まれ結果的に良い方向に繋がっていくことが分かった。分科会では「シャンパンタワーの法則」という考え方が印象に残った。自分を満たすことでその人の友人、地域への広がっていくというものである。まずは自分を満たすことから何事でも始めていきたい。また、講師の先生から、コミュニティーの作り方をはじめとした沢山のことを学んだので、今後しっかりと自分のものにしていきたい。



分科会 B



日本と海外をつなぐ働き方を考える

宮原 麻季 (みやはら まき)

認定 NPO 法人シャプラニール=市民による海外協力の会
事業推進グループ チーフ

略 歴：

慶応義塾大学大学院法学研究科修了。企業勤務の後、JICA 海外協力隊にてネパールに派遣。帰国後入職し、ネパール事務所に 4 年間駐在、帰国後フェアトレード担当、海外活動グループを担当、児童労働削減、防災事業等の統括をする傍ら、在住外国人事業の立ち上げに関わる。プライベートでネパール人留学生支援の NPO 法人の立ち上げ、行政書士資格を取得。

講義の概要

1. 仕事の内容

シャプラニール=市民による海外協力の会という名前の NGO に勤務して 11 年になります。今まで大きく分けて 3 つの業務に従事してきました。

ネパール事務所長

2012 年から 2016 年までネパール事務所で、児童労働削減事業、洪水防災事業及び 2015 年ネパール大地震の緊急救援、復興事業に関わりました。事業地に足を運び、住民の生活の変化や行政への対応など現場の最前線を見せていただく機会に恵まれました。

フェアトレード部門

2016 年～2020 年まで「お買い物で国際協力」をキャッチフレーズにしているフェアトレード部門（当会ではクラフトリンク部門）で、商品開発、のちに全体統括の役割につきました。製品を通じて日本の人びとに現地の社会課題をお伝えするという、今までとは異なったアプローチでの国際協力に関わり、深い学びを得ました。

事業推進部門

2020 年～現職。バングラデシュ、ネパールの事業統括及び多文化共生事業の立ち上げに関わっています。多文化共生事業の立ち上げにより海外の現場に行って事業をするということから、現地の人々が日本の社会の中に暮らしているという視点が大きく異なるアプローチの中で、国際協力の現場がより身近になってきていることを実感しています。

2. キャリアパス

埼玉県出身。大学院では現代中国政治を専攻し政治と市民運動の研究をし、副専攻では多文化共生を勉強しました。修士課程修了後、一般企業に就職しましたが、国際的な仕事へのあこがれから JICA 海外協力隊隊員としてネパールで 2 年間のボランティアに従事したことか人生の道筋が定まりました。実際に現地での言葉を話し、現地の人びととの交流を通じて、現場に近い国際協力を仕事にしたいと強く思うようになり現在の勤務先である NGO に就職しました。



現在は、多文化共生への興味が高まり、制度面から在住外国人やその周り人びとの暮らしを支えるために行政書士としての活動を模索中。

3. 分科会の内容

国際協力の仕事につく、というのは一体どのようなことなのでしょう。まずは国際協力の分野にはどのようなアクターがいるのかを整理していきます。国際協力の仕事は社会の課題に対して多様なアプローチを考え解決を目指すものだと考えます。分科会では、ワークを通じて、自分のやりたいこと、強みなどを整理すると同時に、周囲の人にも目を向けていきます。社会課題の解決に向けて、社会課題を生み出している背後の要因も分析を加えながら、自分がどんな関わり方ができるのか一緒に考えていきましょう。

4. キーワードリスト

- SDGs
- 国際協力
- マルチステークホルダー)

5. 参考資料等

- 藤岡みなみ著『シャプラニール流 人生を変える働き方』2013年、エスプレ
- シャプラニール『進化する国際協力NPO』2006年、明石書店

6. 事前予習用課題

ご自身が興味のある社会課題を1-2個挙げ、なぜそれが課題だと思うのか理由を400字程度にまとめたものを作成ください。

参加者による全体発表

インドの教育格差

分科会B
 講師：宮原 麻季先生
 学生：伊藤美咲 氏家沙絵 小尾胡桃 狩野日那
 工藤侑華子 館野紗弥 野口来望 原美月
 福田鮎夢 守岡菜すな 蓮井菜乃花

学んだこと

マルチステークホルダー
 複数の利害関係者が問題を解決するために
 それぞれの立場から解決策を考えていくこと

例え... バングラディッシュの児童労働問題

子供 ← お金を稼ぐため... → 雇い主
 ← 雇ってあげているという考え →

× 子供への働きかけのみ ○ 複数のアクターへの働きかけ

なぜインドなのか
 □インド人やインドにルーツを持つ人々が世界で活躍

(例) 英首相 リシ・スナク
 シャネルCEO リーナ・ナール
 マイクロソフトCEO兼会長 サティア・ナデラ

なぜインドなのか
 都市部では女性の社会進出が進み始めている
 インドの中堅企業の47%が女性のCEOを擁している

(例) Shahnaz Husaini Herballs 社長 シャナズ・フセイン
 ICIC銀行元CEO チャンダ・コッチャー

都市部では、働に誇りを感じる女子児童の数が増えてきている

なぜインドなのか
 カースト制度：ヒンドゥー教の身分制度 → インド憲法17条より「カーストによる差別の禁止」「不可触民を意味する差別用語の使用禁止」

しかし、カーストが根強く残る地域も多くある理由：社会構造の一部、「輪廻転生」の教え → 貧富の差、職業格差に大きく影響

インドは古くからの格差社会 + 現在教育格差による貧富の差、地域差が広がっている

現状：1

親の教育に対する 理解不足
 地域住民の 理解不足
 教育現場における 様々な障壁 (性的虐待、いじめ)
 政府や地方行政の ガバナンス不足

○それぞれの立場の問題を理解し解決する必要がある

政府
 教育現場
 地域住民
 親
 子ども

現状：2

就学率

初等
約99.9%

→

中等
約75.48%

(World Vision)

②途中で「ドロップアウト」してしまっているのではないか？
→ドロップアウトしてしまっている子どもの割合：約**29%** (UNICEF)

現状：3

なぜ**ドロップアウト**してしまうのか？

公立学校の質が
良くない

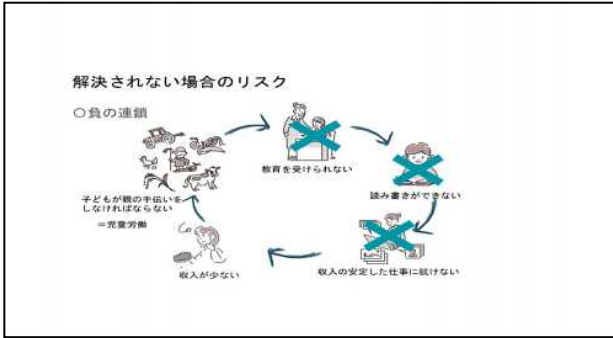
例) ・学校の備品が足りない

親の教育に対する
理解不足

例) ・女子は進学しなくても良い
家業を継ぐから学校に行か
なくてもよい

法律はあるが、
地域差が生じて
いる

例) 都市部は環境が整っている
ところが多いが、農村部では
整っていないところが多い



解決されない場合のリスク

○SDGで掲げた目標が達成できない

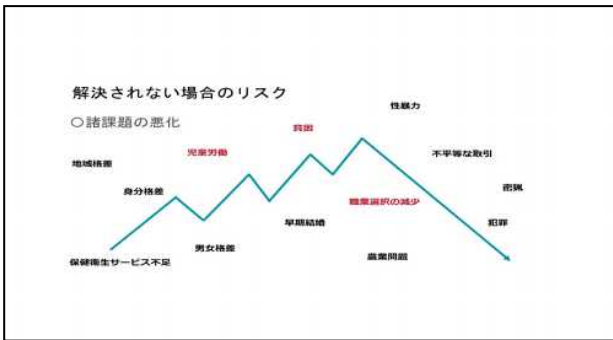
1-1 2030年までに、世界中で「**飢餓に負けない**」暮らしをしている人をなくす。

1-3 それぞれの国で、人びとの生活を守るためのきちんとした計画づくりや対策を急ごう。2030年までに、貧しい人や特に弱い立場にいる人たちが十分に守られるようになる。

4-1 2030年までに、男の子も女の子も、すべての子どもが、しっかりと学ぶことのできる、公平で質の高い教育を受けて喜び、学びと学習の成果を享受できるようにする。

4-5 2030年までに、教育の妨げとなる男女の差別をなくす。障壁があったり、責任が重かったり、特に貧しい暮らしを強いられる子どもどもでも、あらゆる種類の教育や、職業訓練を受けることができるようになる。

□インドの国際的な **立場** や **印象** が悪くなる



アクションプラン

○個人でできること

日本：インドの現状を知る→SNSで発信→寄付してくれる人を探すor自分で寄付する、寄付の仕組みを学ぶ
募金活動に参加する

インド：日本から物品寄付を受ける

アクションプラン

地域・NPO・NGO

○日本：行動を促す

- 現地で開催する人への支援
- 情報やノウハウを通じて発信する
- インドの都市部の人へ地方支援できるように啓発
- 在日のインド人の協力を促す、インドに発信

○インド：職業訓練センターへの勧誘

前への働きかけ

AGE 世界の子どもを
完璧労働から守るNGO ACE (エース)

アクションプラン

国家でできること

□日本：インドの現状を知るきっかけを日本の子供たちに作る (教育機関)
社会慣習・宗教制限を超えた学校を作り、学校に通えなかった子供たちをサポート

インドに対して政策提言を行う (物の寄付、指導力のある教員の派遣)

□インド：教師の質向上を目的とした教育方法の普及
教師向けの教育の指針を改めて出す
学校の通学路の整備

参考文献

- ① Overseas World Bank (n.d.). <https://www.worldbank.org/en/topic/education/overview> (2023年8月17日閲覧)
- ② Education, UNICEF (n.d.). <https://www.unicef.org/education/what-we-do/education> (2023年8月17日閲覧)
- ③ SDGsでなんだろう? <https://www.unicef.org/japan/sdgs/17goal17poverty/> (2023年8月17日閲覧)
- ④ 【インド版】 難民を助けるなら、まずは子どもたちに学びの機会を! <https://www.unicef.org/japan/sdgs/17goal17poverty/> (2023年8月17日閲覧)
- ⑤ 世界標準ノート | <https://www.unicef.org/japan/sdgs/17goal17poverty/> (2023年8月17日閲覧)
- ⑥ HARRISON | <https://www.unicef.org/japan/sdgs/17goal17poverty/> (2023年8月17日閲覧)
- ⑦ World Vision: <https://www.wvi.org/japan/sdgs/17goal17poverty/> (2023年8月17日閲覧)
- ⑧ 日本国際協力財団: https://www.jica.go.jp/press/2023/08/17/20230817_01.html (2023年8月17日閲覧)
- ⑨ 日本国際協力財団: https://www.jica.go.jp/press/2023/08/17/20230817_02.html (2023年8月17日閲覧)
- ⑩ アイ・オー・ネット教育情報 | https://www.io-net.com/press/2023/08/17/20230817_03.html (2023年8月17日閲覧)



参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 将来は、教員免許を取得し高校の教師になりたいと思っているが、「マルチステークホルダー」の概念から考えたときに、英語教育は、実際に英語を教える役割がある他に、環境や制度を整備していく役割もあると考えた。そのため、具体的にはどのような職業があるのか、その職に就くために必要な資格は何かを調べる必要があるかと感じた。
- 将来の目標は外国にルーツのある子どもたちをサポートすることである。今まで現場で実際に支援を行いたいと思っていたが、まずその仕組みを整えることも重要なことだと思った。自分の興味関心を中心にしてその周りにはいるマルチステークホルダーについて調べ、業種についての知識も得ていきたい。
- 分科会での講義や活動を通して、一つの問題には、様々な別の問題が複雑に絡みあっていて、一概に何が悪いとは言えないと感じた。そのため、「マルチステークホルダー」というキーワードがあったように、様々な立場から問題を捉えそれぞれの解決策を考えていくことが重要であると考えた。日頃から、ある課題について考える時には、複数存在する利害関係者の立場になって多方面から考えていく姿勢を持つようにしたい。
- 「マルチステークホルダー」という考え方を学んだ。一つの社会問題を解決しようとするとき、まずその問題を分析し目的や対象を整理する。問題解決となるとまず何をすべきか行動を考えてしまいがちであった。しかし今回のディスカッションの中で分析の過程をしっかりと踏んだことで関連する問題が多数あり、目の前のことだけに対処するだけでは真の解決にはならないということに気づいた。また、マルチステークホルダーを整理し、それぞれに向けたアクションプランを考えることで、先生の仰っていた多くの人々が問題を自分事として捉え多様なレベルで関わることの重要性を理解できた。
- セミナー前までは、現場において人々と直接関わり活動することが一番の助けになると考えており、自分自身もそのような活動に参加したいと思っていたが、今回実際の活動までの過程や振り返り、改善がとても重要であることに気づいた。今後は、国内における国際協力や社会問題の分析について学びながら将来を考えていきたい。
- これまで国際問題に触れ改善策を考えるという機会は何度かありましたが、ここまで深く議論し考える機会はなかったもので、貴重な時間となりました。インドにおける教育格差の問題について、現状と理想を見比べながら仲間と議論し、ここまで自分自身の考えを深堀できるのかとの気づきも得ました。
- 分科会では一つの社会問題について、更に掘り下げて考えていき、新たに見えてきたことも踏まえて向きあうことの重要性を学修した。全体発表のテーマの「インドの教育格差」について考える際、格差が生じる原因や背景を掘り下げていくと想定していた以上に多くの発見があった。この思考法から社会問題の構造や解決が難しいことを実感できたと同時に社会問題全体を考える契機として役立てられることを学んだ。
- 分科会を通じて問題を多角的にとらえる姿勢を身につけることができた。「インドの教育格差」について議論する際、議論を深めれば深めるほど様々な別の問題に繋がったり、現実性が欠けた方向に進んだりした。特に、インドが他国の干渉を嫌うだとか、個人が募金に参加して終わりというのはどうなのかを考える際はどの立場なら実践可能か、どの問題にならアプローチが可能かなど見方を変えての議論ができた。
- インドの教育格差という問題を取り上げる際、この問題の解決策を考えようとすると、他の様々な問題についても考えなければならないことが多かった。そのため、多角的な視点で、色々な可能性を考えて問題の解決策を見出すことができた。学年など関係なく意見を交わすことができ、自分の知識不足を感じたり、もっと積極的であるべきだと気づくことができたり、多くの刺激を受けた。今回学んだ、ステークホルダーという考え方、そして、身につけた姿勢は今後の授業等でも生かしていきたいと思う。
- 「NGO が積極的に関わることでその国の自立が妨げられるのではないか。」という質問を受けた。このことについて、早速、今後調べるようにしたい。このように、他者の意見を大事にしてそこから新しい考えを構築していきたいと考える。それが、自分キャリア形成に繋がるのだと思う。



分科会 C



国際社会における都市経営

毛塚 幹人 (けづか みきと)

都市経営アドバイザー

(那須塩原市・さくら市市政アドバイザー等)

略 歴：

宇都宮市出身在住。2013年に財務省に入省し、国際局 G20・IMF 担当等に従事。2017年からつくば市副市長を務める。2021年から都市経営アドバイザーとして政策立案・行政職員育成支援を開始。那須塩原市・さくら市市政アドバイザーを務める。Forbes JAPAN「世界を変える 30 歳未満の 30 人」選出。

🌐 講義の概要

1. 仕事の概要

都市経営アドバイザーとして、国内各地の地方自治体の経営・政策立案・職員育成等の支援事業を行っています。

2. キャリアパス

都市経営アドバイザーとして独立する以前は、東京大学法学部を卒業後、財務省に4年間勤務した後、つくば市副市長を4年間務めてきました。私のキャリアパスは一貫して行政を専門としていますが、フィールドは国から地方都市へ、アプローチも政府職員から地方自治体幹部、そして個人事業の都市経営アドバイザーへと変化しています。行政の変革は難しいことではありますが、地方都市は行政に変革を起こすフロンティアと捉えています。フィールドやアプローチを模索し、自分で仮説の検証を重ねながら、オリジナルのキャリアを切り拓いて成果を出してきました。



・学生時代、最初からキャリアパスを決めていた訳ではありませんでした。栃木県の宇都宮市で生まれ育ち、高校時代まで海外に行ったこともなかった私は、大学に入学してから国際社会に強い関心を持ちました。サークル活動では東京大学と北京大学の討論会や模擬国連に参加して国際交流を満喫し、授業も国際関係論など国際系の科目を多く受講し、フィリピンのスラムでホームステイしたこともありました。社会人になり、財務省でも最初の2年間担当したのはG7やG20、国際通貨基金(IMF)等の国際交渉でした。しかし、在学中や社会人として働き、自分が本当にやりたいことを模索する中、宇都宮市で生まれ育ち問題意識を強く持ってきた地方都市の現状の変革に注力することを選びました。フィールドは全く変わりましたが、実はこれまでの経験が活かしています。地方都市も国際交流や企業誘致、インバウンド獲得、多文化共生等に取り組んでおり国際社会に向き合っているためです。

・2021年に都市経営アドバイザーとして独立してからは、地元栃木県宇都宮市に12年ぶりにUターンして栃木県内の自治体の支援を活動の中心にしています。これまで東京、つくば市で活動しており故郷に貢献できていませんでしたが、自分の次の挑戦は故郷をフィールドに選びました。

3. 分科会の内容

地方都市の人口や財政の状況が厳しくなる中、国際的な視座で都市経営を考える重要性が増しています。人材獲得、インバウンド受け入れなど、選ばれる都市になるため取り組むべきことを議論したいと思います。

4. キーワードリスト

- 宇都宮市の姉妹都市交流
- つくば市の姉妹都市交流
- 地方自治体の国際交流や企業誘致、インバウンド獲得、多文化共生に関するニュース

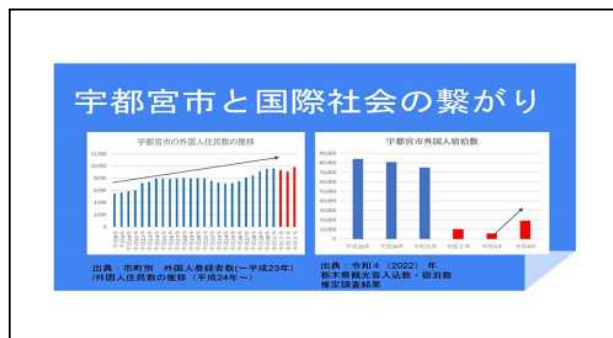
5. 参考資料

- 宇都宮市ホームページ「国際交流」
<https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kurashi/1013609/index.html>
- つくば市ホームページ「国際交流」
<https://www.city.tsukuba.lg.jp/soshikikarasagasu/shichokoshitsukokusiteshisuishinka/gyomuannai/23/1/1001936.html>
- 自治体国際化協会（CLAIR）ホームページ
<https://www.clair.or.jp/index.html>
- Forbes JAPAN 記事
「26歳で「史上最年少の副市長」に アジャイル型で変革するつくば市経営」
<https://forbesjapan.com/articles/detail/29276/page1>

6. 予習用リーディング課題

特にありません。

参加者による全体発表



STEP 1
1 アピールしたい対象を決める

ターゲット：
 SNSなどの発信力のあるツールを扱える20代から30代の日光を観光しようと考えている訪日外国人

STEP2
どのようにアプローチするか

現状

宇都宮単体の魅力では正直外国人観光客が訪れるとは考えにくい（日光と言えは東照宮といった強烈な魅力はない）

→世界的に有名な日光と一緒にアピールできないだろうか。○○○

発見

日光の課題：夜の滞在者が昼に比べ極端に少ない！

宇都宮の理想

- ①夜の宇都宮に魅力がある
- ②「昼は日光へ行って、夜は宇都宮で観光して宿泊」というイメージが浸透している

課題

- ・発信力の弱さ
 英語によるSNS発信が少ない。
 →市内にも海外にもイベントをPR出来ていない。
- ・他地域との差異をどう見出すか
 →魅力がいかせていない

◎提言

1. お酒を楽しむスタンプラリー
 居酒屋、バー(ナイトタイムエコノミー)を巡ることに加え(スタンプは電子化して来店したらスタンプを贈呈する。SNSに投稿してもらったらクーポンや特典を贈呈する。(企業に協力してくれる)のための支援金を宇都宮市が提供する。)
 事例：会津酒場スタンプラリー

◎提言

2. ツアー会社との協力
 →日光へのバック旅行で宿泊先を宇都宮に
 ・歴史と絡める(宇都宮は江戸時代日光東照宮に将軍がお参りするのための宿泊地であった*宇都宮城)
 ・スタンプラリーを紹介 運営補助
 ・クーポンの配布

2. 宇都宮市が外国人住民にとって住みよい町になるためには

ターゲット 外国人児童生徒

目標

- ①日本語教育の充実化
 →日本語能力の向上によって日本で生活しやすくなる。
 日本での進学や就職を考えた場合、日本語能力は重要
- ②学校での外国人児童生徒との交流の場を作る
 →交流の場を作ることで学校になじめるようになる

課題①日本語初期指導教室

現状

<羽ばたき教室>
二ヶ月間 午前中（9時～12時）に日本語の授業や学校一そでの後、在籍校へ移籍

<外国人児童生徒の声>
日本語がわからない（22.2%）
授業中の日本語の説明がわからない（22.2%）
気持ちよく話すことができない（33.3%）
友達がない（9%）

◎提言

- 最初の二か月間は5日間すべて日本語教室へ行き、日本語の基礎を集中的に学ぶ（1日5時間 勉強の仕方を覚えて日本語学習をする 例会話やゲーム）
（日本語習得の進度によって日本語教室の割合を減らしていき最終的に5日全部在籍校に通えるようにする）
- 日本語教室にいる間に在籍予定校の先生との面談する時間をとり、積極的にコミュニケーションをとることで不安を解消する
- 在籍予定の学校の生徒との交流を持てるようにする

他の市の例

- 愛知県西尾市
約3か月間在籍する学校で週1日、日本語初期指導教室では週4日勉強している。
- 愛知県犬山市
週5日16時～21時までボランティアが放課後学習の支援
- 神奈川県横浜市の
週3日の集中的な日本語教育で日本語や学校での過ごし方の指導

課題②外国人児童との交流の場

現状

- 国際交流はあるが、あまり発信されていない
- 機会があれば参加したいという人（保護者）は多いが、機会がない
- 外国人住民の中にも交流したいと思っている人はいる（特に日本人の自国の料理を紹介したい人が多い34.4%）
- あまり交流したくないという人も日本人・外国人の両方にいる

◎提言

- 交流する場を設ける場合、事前に外国人児童生徒に意見を聞き開催するか決める（やりたくない字への配慮）
- 日本の文化と外国の文化を両方取り入れたイベントを行う
- 学校行事の中に国際交流のイベントを組み込む
（運動会、文化祭、授業参観）
- BNSに加えて学校のお便りなどを活用してイベントを発信する

他の市の事例1

神奈川県川崎市さくら小学校
運動会で朝鮮半島の民族を披露

4月から始めた韓国の民族を呼び呼びと披露する児童ら（11時 市のさくら小）

他の市の事例2

神奈川県横浜市南吉田小学校
多文化共生の取り組み

学んだこと

- 都市の国際的なつながりは日常生活に組み込まれている
→多文化への対応が必要
- 国際社会で選ばれる都市になるには
・人の流れを生み出すための情報発信
（観光）観光ガイドやBNSを通じた情報発信
（住居）交流企画やサポート体制、交流事業の企画の発信
- ローカル×グローバルの視点
多言語やハラルなど宗教、文化に対応した取り組み
手取市が持つ魅力を生かしつつ、多様な文化に対応できる柔軟性

参考文献

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

https://www.city.yokohama.lg.jp/... (最終閲覧日2023/09/18)

参加者のレポートより

(コメントは原文のまま記載しています。)

- 分科会を通して、国際社会に選ばれる都市になるためのアプローチは無限大に広がっており、また、既存のものを活かすことがいかに重要であるかということも学んだ。
- 分科会では、殆ど講師の先生がレクチャーをすることなく、学生が主体となって活動を進めていった。その中で、講師の先生が一人一つ必ず役割を持つようにして下さったためにより一層自分が分科会の一メンバーとして参加しているんだという意識が高まり、他のメンバーたちと真剣に議論ができたことが非常に有意義な時間であったと思う。
- 将来の職として、外国人児童・生徒教育、英語・ドイツ語教育といった言語教育といったキャリアを築いていきたいという想いは変わらず、加えて、自分の地元や地域で能力を活かす機会を見つけることも選択肢に含めることも、このセミナーを通して、考えるに至った。分科会ご担当の毛塚先生も、財務省でのご経験を経て今は地元宇都宮で都市計画アドバイザーとしてご活躍されている。このように、若いうちは自分のやりたいことに専念して、経験を重ねてから、地元で新たなキャリアを構築するのも魅力的だと思った。
- 分科会を通して、「国際社会に選ばれるための都市経営」というテーマで会を進める中で、スモールスタートで毎日コツコツとアプローチ、努力をしていくことが大切だと学んだ。このことは、分科会進行のプロセスとしても重要であったし、自分自身の日常生活、勉学についても応用できる。
- 最もこの分科会の中で印象的だったのは、毛塚先生の、「大学生は、全国、世界を見て学んでほしい。」という言葉でした。今後の人生、キャリア形成を考える時、こんなに自由な大学生の期間を大切に過ごしたいと再認識できたからです。
- 今後、日本を訪れた外国人の方に日本での生活で安心して過ごせるようなサポートをしたい。分科会では、観光のグループに所属し、宇都宮市長への提案を想定しプレゼンを作成した。その過程で、一つの政策に対するアクターの多さに気づいた。セミナー参加の目的の一つとして、将来就きたい職業や目標を見つけることが挙げられる。参加前は、仕事に対して興味のある分野を中心に探していたため具体的な内容まで考えることができていなかった。今回、職業間の関わりや、それぞれの業務の幅広さについて触れることができた。まだ将来就きたい職業は決まっていないが、広い視野を持ち、選択肢を広げていきたいと思う。
- 分科会で学んだことで最も印象に残ったのは、毛塚先生がキーワードとして挙げた「仮説思考」という考え方である。分科会は、先生の講義のみでなく、学生主体の活動がメインであったため、「国際社会に選ばれる都市になるためには」という大きなテーマから3日間議論を重ねて焦点を絞っていった。その過程で必要であると痛感したのが、「仮説思考」であり、スコープを絞るということだ。議論の際には、仮説を立てなければ議論が発展せず時間ばかり食う。各人が何等かの仮説のもと議論に臨むことで話の軸ができてくるが多かった。スコープを絞ることに限っては、国際社会、特に、外国人観光客に選ばれる都市になるためにはというテーマで議論の過程で、どの年代、国、層に向けてアピールするのか、何パーセントをターゲットとするかの数値目標設定等、細かな設定が必要だと学んだ。この仮説思考、スコープを絞るという考え方は、普段の生活の中での目標設定に応用できるスキルであるし、分科会での議論の過程で多少なりとも身につけられたことは、今後の大きな糧となった。
- まずは現状を捉えて、そこから課題を導き出し、現実性のある解決策を考えることの重要性を学んだ。また、提言するにあたっては、誰に、どのくらいの規模で行うか等、細かなところまで検討していかなければ実現性のあるものにはならないと学んだ。



分科会 D



「多文化」が「共生」する社会とは？

申 惠媛 (しん ひえうおん / SHIN Hyewon)
宇都宮大学 国際学部 助教

略 歴：

韓国ソウル市生まれ、2001 年来日。東京大学大学院総合文化研究科にて博士（学術）を取得。東京大学教養学部附属教養教育高度化機構・特任助教を経て、2022 年より現職。専門は社会学、特に観光地化など新しい局面を迎える地域社会における「多文化共生」の研究に取り組んでいる。

🌐 講義の概要

1. 仕事の概要・研究のテーマ

宇都宮大学国際学部で教育や研究に取り組んでいます。専門は社会学（特に移民・エスニシティ研究、都市社会学）で、現在はエスニック・ビジネス集積地域におけるローカルな社会関係の再編を主な研究テーマとしています。これまでは主に東京都新宿区の「新大久保」と呼ばれるエリアをフィールドに調査・研究を進めてきました。韓流や K-POP のブームで知られる観光地化は、地域の人々にどのような影響を与えたのか。それは従来の「多文化共生」という枠組みから、あるいはそれを越えてどのように捉えることができるのか。こうした問いを立てて研究してきました。最近も引き続き、エスニック・ビジネス経営者の実践や、グローバル化・モバイル化の進むなかでの地域社会の変容などに関心を向けています。



2. キャリアパス

2001 年に韓国から来日し、日本国内でも転居を何度か繰り返し、地域を移動しながら小中高大の学生時代を過ごしてきました。こうした確たる「地元」をもたない自分自身の経験が、(出自を問わず) 移動する人びとがつくる社会への関心につながったのかもしれない。

大学では教養学部に進学し、社会学を軸に幅広い学問の世界に触れることができました。卒業論文では漠然と日本に暮らす移民をテーマにしたい、と考えていたところ、折しも韓流・K-POP ブームを迎えて活性化していた「新大久保」という地域と改めて出会い、移民やエスニック・マイノリティだけでなく都市やメディアにも関心を広げていきました。その後、大学院の修士課程、博士課程と進みながら、研究の面白さと大変さの両方を噛み締めてきました。

3. 分科会の内容

近年、多様性の時代といわれ、さまざまな場面で多様性（ダイバーシティ）が奨励・推進されています。これから皆さんがどのようなキャリアを進むにせよ、何らかの形で多様性と向き合うことを余儀なくされるでしょう。しかし、考えてみると近年称揚される「多様性」は、魅力的ながらもどこかふわふわとして曖昧なように思えます。これほど注目される前は、昨今「多様性」として包摂すべきとされる人々はどのように捉えられていたのでしょうか？また、最近の「多様性」「ダイバーシティ」は楽しくポジティブな印象を与えますが、多様であるとは差異が存在することを意味します。「多様性」に光を当てるとき、その裏面にもとより横たわってきた、差異に基づく不平等や差別が覆い隠されてはいないのでしょうか？

この分科会では、こうした「多様性の時代」を考えるひとつの手がかりとして、いつしか耳慣れた言葉になってきた「多文化共生」という言葉について改めて考えてみたいと思います。「多文化共生」自体、非常に広い射程をもつ言葉ですが、ここではひとまず「多文化」の内容を「外国人」ないし「移民」に由来するものに限定して考えてみましょう。この言葉は、どのような場面でどのように使用され、どのような広がりを持ち、いかなる課題を抱えてきたのでしょうか？日本社会における「多文化共生」を他の人に説明しようとするとき、どのように伝えれば良いのでしょうか？その方法を一緒に探っていきます。

4. キーワードリスト

- 多文化共生
- 多様性（ダイバーシティ）
- オールドカマー／ニューカマー

5. 参考資料等

- ナディ、2019、『ふるさとって呼んでもいいですか：6歳で「移民」になった私の物語』大月書店。
- 深沢潮、2015→2019、『緑と赤』小学館。

1冊目はエッセイ、2冊目は小説です。下記「予習用リーディング課題」の文献は、統計資料や政策等を通じて、または概念的に「多文化共生」を考えるための資料ですが、もう少し身近に感じるところから考えてみたい人におすすめです。これらを読むことで、下記課題文献の理解も深まるでしょう。どちらも可愛い表紙とは裏腹に考えさせられることが多く、気持ちの余裕があるときに読んでみてください。

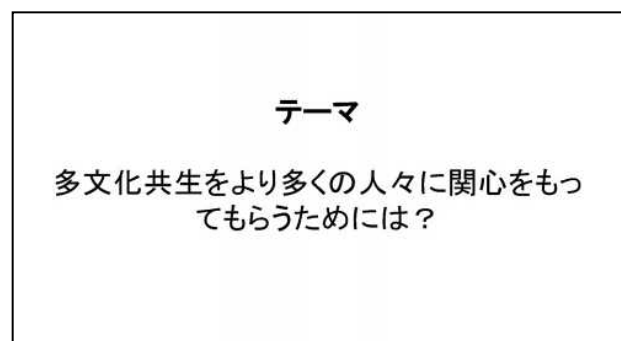
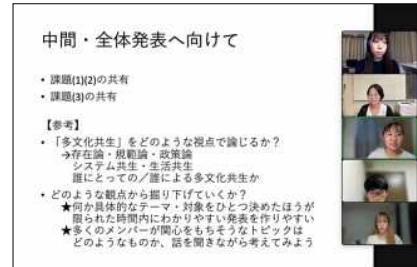
6. 事前予習用リーディング課題

- 永吉希久子、2020、『移民と日本社会：データで読み解く実態と将来像』中央公論新社。
→このうち、「序章 移住という現象を見る」(pp. 3-22)
- 高谷幸、2021、「移民・多様性・民主主義：誰による、誰にとっての多文化共生か」岩淵功一編著『多様性との対話』青弓社, pp. 68-92.
- 小内透、2007、「外国人集住地域の現実と共生の視点」『調査と社会理論』・研究報告書, 23, pp. 1-13.
(専門用語も多く、難しく感じますが、大まかな内容をつかんでみてください)

以上の文献をもとに、次の課題に取り組んでください。


- (1) 以上 3 つの文献を読む前に、「多文化共生」という言葉に対するイメージや、関連して自分が知っていることを箇条書きで5点以上まとめてみましょう。
- (2) 以上 3 つの文献を読んだ後に、(1)でのイメージが変化した場合は、どのように変化したのかを箇条書きで5点以上まとめてみましょう。イメージがあまり変わらなかった場合は、文献を通じて新しく知ったことを書き出してみてください。いずれの場合も、まとめる際には各文献を通じて重要だと思われるキーワードやキーセンテンスを探し、注目してみると良いでしょう。
- (3) 以上 3 つの文献の内容で、よくわからなかった箇所や、話し合っていたらと思った箇所があれば、メモしておいてください。

参加者による全体発表



事前課題を通して

- ①多文化共生に対するふっとしたイメージの変化
移民問題は受け入れる社会の問題(永吉 2020)
- ②共生概念について(小内 2007)
共生概念の中で同化の意味合いが大きくなっている
→共生概念の意味合いを吟味する必要がある
二種類の共生 ←システム共生(制度や機構のシステム)
生活共生(労働を含めた生活世界)



話し合いから

- 考えられる問題
 - ・多文化共生に興味を持っている人が少ない
 - ・多文化共生は理想や心がけ程度になっている(制度の必要性)



幅広い分野で考えるのではなく、
対象を当事者意識の持ちやすい教育 とした

私たちはなぜ多文化共生に興味を持ったのか?

→学校など、身近に外国ルーツの人いることがきっかけとして多かった

⇒多文化共生に興味を持ってもらうためには、身近に異文化とかかわる機会が必要である

しかし日本の中での普段の生活の中で、自ら外国人とかかわったり、異文化を感じる機会は少ない...



教育

学校の中では、国籍や文化に関係なく一つのコミュニティで生活する必要がある。

学校の中で多文化共生について考える、また外国人生徒のサポートを充実させることができれば、子どもたちやその保護者が多文化共生について深く考えるきっかけになりうるのではないだろうか。

日本に外国人が増える中で、学校内の外国人児童、生徒も増加している

集団生活を必要とする学校の中で学習や生活の支援をすることは必要不可欠である

教育現場では処理しきれない問題も

→学校外の活動による支援も充実させる

文化

○宗教上の配慮が必要

- ・礼拝のための別室を用意
- ・給食が食べられないため弁当の持参を認める

○日本の学校での独自の文化

- ・生徒の身だしなみチェック →人権侵害、セクハラ
- ・成績評価の仕方 →日本:テストの点数が重視される
海外:発言などの積極性が重視される
↳空気が読めないと思われてしまう

言語

- 日本語能力の差
 - 現在は主に日本語指導教室や取り出し授業等で外国人児童生徒の日本語や学校生活をサポートしている。(外国人児童生徒の母国語や日本語指導等について)文部科学省
- 進学への影響
 - 外国にルーツを持つ子どもの高校進学率 →50%前後 (Edwell Journalより 最終閲覧日2023/09/18)
- 進学率の背景
 - 貧困**→言語の壁により就労状況が不安定→子ども高校進学せず就職
 - 言語の壁**→必要な支援や情報にアクセスできない、
いじめによる教育機会からの離脱
- 外国人保護者が直面する問題
 - 来日した保護者は日本語力、日本文化の理解が不十分
 - 問題やストレスの種に**

学校外の取り組み(ボランティアなど)

- ・支援やイベントを通して触れ合う機会や学びの場を提供
- ・子ども同士だけでなく、大人同士の交流にもつながる
- このような活動を通して簡単に楽しく多文化共生を知ることができる

**学校では体験しにくい活動やケアしにくい問題をカバーしつつ
より多くの人が多文化共生に関わるきっかけに!**

結論

○地方行政への提言

解決策(学校外でのサポート) **多文化共生選課**を作る

○言語

オンラインで外国の先生や海外経験のある先生に話してもらい
→働く場所も子どもたちの **将来の選択肢を広げる**役に立つ

○交流

交流の場をもうけることで興味のある人はもちろん、興味のない人も徐々に巻き込む
話し合いの場をもうける(外国人都市会議など)
就学通知の際に、学校文化に関する冊子を配る

○その他、行政に求めること


ボランティアと個人を繋ぐ自治体の制度・有償ボランティア
先生の研修 国立大学との協力(地方にも等しく存在しているため) HANDSのような事業を各大学が行う

キャリアとのつながり

→これからの人生で、多文化共生に興味がなくなったり、外国の方との関わりが少なくなったりしても、**必要な時に必要な情報にアクセスができるようにする。**

今自分たちには何が出来るのか?

- ・実際にボランティア活動の場などを通して行政の方から話を聞いてみる(交流の場を広げるために留意する点や政策の話など)
- 今後の活動に生かす



参考文献

山野由洋子, 外国人保護者の子育て支援とのつながりおよび活用への支援方策 - 保護者へのインタビュー調査より -, ライフデザイン研究 18, 191-206

政策的取組を要する外国人の受入確保策検討に関する調査 - ムスリムを中心として - の結果 - (topics.go.jp) 最終閲覧日 2023/09/17

日本で暮らす外国人にルーツを持つ子どもが育んでいること - 教育支援の地域関係者、言葉の壁から不登校や進学困難に - (Edwell Journal) 最終閲覧日 2023/09/17

日本と諸外国の学校教育の違いとは? おなじみといわれる点も紹介 - (WakaSpa Guide(ワカースペースガイド)) (waka-spa.com) 最終閲覧日 2023/09/17

外国人児童生徒教育の充実方策について(方案)は外国人児童生徒の選抜制度と日本語指導について - 文部科学省(2023.9.17閲覧)

永吉有久子, 2020, 『移民と日本社会 - データで読み解く実態と将来像』, 中央公論新社

小内通, 2007, 『外国人居住地域の現実と共生の視点』『調査と社会論』研究報告書 : 23, pp.1-13.

参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 多文化共生を目指す上で、教育現場でどんなことができるかということについて考え、学びを深めることができた。私は来春から教師として教育現場に立つ。その際に、外国人児童生徒多く存在し、多くのトラブルや困難を抱えている場合がある。それらの要因は文化や言語の違いに起因する場合もあると学んだ。このことを踏まえ、日本人児童生徒と外国人児童生徒が共に文化を理解し合いながら強制を目指すためには、まずお互いを「知る」ことから始める必要があるのではないかと学びもあった。そのために学校現場で異文化や言語に触れる機会を総合的学習の時間や学級活動の時間に取り入れ、映像学習やそれぞれの文化についての話し合いの時間を設けることで「知る」機会を持つことができ、更には文化や人を尊重する姿勢が形成されるのではないかと考えた。更には、保護者や地域社会に、ICTや学校通信の媒体などで、こうした取り組みについて発信していくことで、興味を持つことや「知る」ことに繋がるのではないだろうか。
- 多文化共生について改めて理解を深めた。共生という言葉をどのように捉えるか、誰にとっての多文化共生か、誰による多文化共生か、共生と同化と統合という考えについて、考えるきっかけとなった。外国人児童生徒の問題については、自分たちにとっては当たり前の事柄が、外国人児童生徒とその保護者にとっては困難な事柄である場合があると改めて考え、問題解決の糸口は、より身近なところにあるのだとの気づきも得た。
- より多くの人から多文化共生に関心を持ってもらうために、地方行政へ向けて教育分野を中心とした提言を出した。このセミナーを受ける前までは、自身のキャリアについて具体的に考えたことすらなく、ただ漠然と英語やその他の様々な言語を使う仕事に就きたいと思っていた。しかし、提言やそれを考える過程を通して地方行政や教育に興味を持つようになった。なぜなら、多文化共生のためには、今の心がけ程度のことから法制度をより具体的に整備し、また、多文化共生に関心のない人も巻き込んでいかなければならず、その一つ的手段として教育が重要だということが分かったからだ。元々関心のあった分野ではあったが、ここまで焦点を絞って考えたのは初めてだったし、今回のセミナーだけでは答えを出し切れなかった部分も多くある。今までは漠然としていたキャリアに対する考えがより具体的になり方向性も少し定めることができるようになったと感じる。そして具体的に変わったキャリアを達成するためにもまず身近なことから挑戦していきたい。
- 多文化共生において、自分が異文化に実際触れてみるのが相手の文化の理解だけでなく自国の文化について考え直す機会になるのではないかと考えた。留学や海外で働きたいという大きな目標を立てることも大事だが、スモールスタートでも良いから行動することが今後必要だと感じた。交流会やボランティアを通じて多文化共生への意識を高めることが個人としてできることではないかと考えた。積極的に交流の場に参加していきたい。
- 事前学習を通して「多文化共生」とはそもそも何なのか、問題点・課題点を整理し、自分の理解深めることができた。そして、分科会では、多文化共生について、それを広める方法について議論を深め、教育の観点に絞って提言を出す過程で、更に、理解を深めることができた。
- セミナーを通して、「多文化共生とは何かという課題に軸を持ち、その実現に貢献できる人間になる」という目標に対して、思い描く理想像に大きな変化はないが、目標に対して、自分が身の回りでの小さな取り組みを周りへと共有できたため、恐れず行動したいと思った。また、常に日本・世界の情勢に関心を持ち、自分には何ができるか考えていきたいと思った。
- 多文化共生というテーマに関しては、そこに含まれる意味が複雑で誰のためのものかが違えば取られる政策も違うというのがこのテーマを考える上で難しいものだった。しかし、テーマを絞ってアクターや対象を明確にしたことで提言も考え出すことができた。国際学部に在籍しているためグローバルや多文化共生はとても身近なテーマではあったが、基礎的な知識の土台の上にさらに発展した学びを得ることができたと思う。



分科会 E



「違い」を越えた友だち

リーペレス・ファビオ (りーぺれす ふぁびお)

宇都宮大学 国際学部 助教

略歴：

2019年東北大学大学院文学研究科にて博士(文学)を取得。専門は文化人類学。特に移動する人や、ストレンジャー論や友人関係に取り組んでいます。幼少期から様々な国々を転々としながら育ち、将来はインディアナ・ジョーンズのように世界中の秘宝を奪ったり墓荒らししたりする学者になろうかと思っていました。2022年より現職。

🌐 講義の概要

1. 仕事の内容・研究のテーマ

宇都宮大学国際学部で研究と教育をしています。専門は文化人類学です。研究関心は、「どこにいてもストレンジなストレンジャー」の移動の経験と自己形成と他者関係をめぐるライフストーリーです。私が捉える「どこにいてもストレンジなストレンジャー」とは、幼い頃から連続的な移動を繰り返しながら育った人々のことです。たとえば、国籍の異なる両親の間に生まれ、幼少期の頃は親の仕事の都合で国際移住をしたり、青年期には留学をしたり、就職のため別の国に移住したり、移動の中に生きる人々がいます。このような人々の多くは、多くの社会の中で生活しその過程で複雑な文化を身に付けます。彼ら/彼女らが自らの移動の経験や、移住先で出会った人々との関わりにどのような意味付けをしているのかを調査し考えています。



2. キャリアパス

私も両親の国籍が異なり、幼い頃から多くの国々を移動しながら育った「どこにいてもストレンジなストレンジャー」です。幼い頃から色々なところで育ち複数の言語を話し、外見的特徴からも何人なのかからな思われていました。人の移動が広域化し複雑化した現在では、私のように連続的な移動を繰り返しながら生きている人々も増えています。そんな人々の生き方について知りたいと思い、東北大学大学院に進学し、学位を得て、今でも研究を続けています。2019年に学位取得後、東北大学大学院文学研究に就職し、2022年から現職についています。

大学では、文化人類学と民族誌学とスペイン語の授業を担当しています。研究調査は残念ながら、インディアナ・ジョーンズのように墓荒らしをしたり、秘宝を盗んだり、ナチスから追われたりすることはありません。主にライフストーリー収集を中心に、社会・文化の中に生きる人々について調査しています。

3. 分科会の内容

友人または友だちというつながりは、自律的な個人の間で交わされる関係、快楽や有用や善良を伴う関係だとも言われています。「友だち」と呼ばれる人とのつながりには、類似性と近接性によって親密性が備わると言われています。つまり、友だちとは出生や出自のほかに趣味や価値観などが似て、近くで共に生活する人のことを指します。ですが、生の多様性が明らかになり、多くの「違い」を持つ人々と共にダイバシティあふれる社会でも、「友だち」と呼ばれる人は自分とよく似た人に限られるのでしょうか？

私が専門とする文化人類学では、友人関係は親族関係と同様に重要な社会関係ですが、あまり着目されてこなかったテーマです。数少ない文化人類学による友人関係に関する研究を振り返って、多文化社会の中で「友人」とはどのようなつながりなのかを一緒に考えていきます。

この分科会では、「友人」とはどのような存在なのか、友人と呼ばれる人々の間のつながりについて考えたいと思います。特に、自分とは異なるジェンダー、セクシュアリティ、国籍、両親の国籍、外見的特徴、民族、エスニシティ、ことば、移動の遍歴などを持つ人々との友人関係は、どのようにつながりが形成されるのか？互いの持つ「違い」が障壁になるのか？共通の趣味や価値観を見出せるのか？あるいは見出す必要はないのか？何をつながりに互いを友人と捉えているのか？つながりを維持したいか？維持するためになにをするのか？つながりは断たれるのか？なぜ断たれるのか？そもそも友人とは何か？自分が生きる社会の中で、友人を持つことにどのような意味があるのか？一緒に探っていきましょう。

4. キーワードリスト

- 人の移動
- ストレンジャー
- 友人関係
- ライフストーリー



5. 参考資料等

参考資料は、以下の指定書に限らず、「異文化間交流」「多文化共生」「友人関係」をキーワードに様々な本や論文そして雑誌などを読み漁ってみてください。

- 高山陽子編 2022『フォビアがいっぱいー多文化共生社会を生きるために』春風社。
本書は、自分の関心に合わせて、いくつかの章をピックアップして読んでください。

6. 事前予習用リーディング課題

戸谷洋志 2023『友情を哲学するー七人の哲学者たちの友情観』光文社新書。

友人とは何か。この議題は古くから哲学で論じられてきました。本書を読むことで、友人の在り方がいかに論じられてきたのかを読み解き、自分の経験と繋ぎ合わせてみましょう。

川口幸大 2017『ようこそ文化人類学へー異文化をフィールドワークする君たちへ』昭和堂。

文化人類学の思考法を学ぶためまずは入門書から。本書のうち、第1章と第2章をてがかりに友人関係とは何かを考えましょう。

以上の文献をもとに、次の課題に取り組んでください。



- (1) 以上の文献を川口、戸谷、高山編の順に読み、相対的思考を持って、感想と疑問点をまとめてみましょう。
- (2) 文献を読んだ後に、「友人」とはどのようなつながりなのか、自分の経験も参照しながら、500～2000字程度でまとめてみましょう。

参加者による全体発表



Contents

- 異文化における交流で大切なこと
- 「友情」とは
- 「友人」のつながり方
 - 自己開示
 - 贈与
 - 可視化（あだな）
- まとめ

異文化における交流で大切なこと

乗り越え(crossing)：相手の持つ違いを活用する
 橋がけ(bridging)：双方の違いの類似点を発見して受入れる (Kromidas 2016)

⇒壁を乗り越えるための自己開示

グローバル人材
 ⇒違いの理解、受け入れ、認め合い








「友情」とは

アリストテレス 理想の友情とは、友達と「私」が同じ善美さを持つ
 →共に相手の魅力に惹かれ合っていること
参考：戸部洋典 2023『友情を教える―七人の哲学者たちの友情論』光文社



「友人関係は、個人間の選択と自由意志に基づく、自発的で感情的で私的なつながり」 (Carter 1999)

⇒友人関係は曖昧で不安定なもの

友達との親密化を試みるために必要な要素

- 自己開示
- 贈与
- 関係性の可視化

自己開示

自己開示：自分と相手の共通点を見出して、親近感を持つためにアクションをおこすこと

- 「itching(感傷をこぼす)」(Winkler-Reid 2015)
- 「making fun out of(冗談のネタにする)」(Winkler-Reid 2016)
- 「fucking(茶化し合う)」(リーベレス 2023)





贈与、物の交換 1

贈与：贈り物をして、送られたものを受け取り、お返しすること
(マルセル・モース 2009)

3つの義務= 贈与義務・受け取る義務・返礼の義務





贈与、物の交換 2

- お弁当
 - 異文化との出会い
 - ファビオ先生の事例...「日本的」な弁当と「外人的」な弁当 (リーベレス 2020)
- ユニフォーム、用具
 - ライムS店を賞賛・お土産 (思い出の共有)
 - ビジネスの場面では、これからの親睦を期待









贈与、物の交換 3

- 年賀状
 - 毎年贈りあうことで、友人関係を認識
- メッセージ (寄せ書き、卒業アルバム)
 - 知らない人とつながることが可能、友人関係を認識

情報 (プライベート関係、共有したいもの、アイデンティティ)
 お互いの情報交換によって、共通性を見つけ出すことができる

贈与、物の交換 4

つまり...

- 友人関係が始まるきっかけになりうる
- 友人関係があることを認識できる








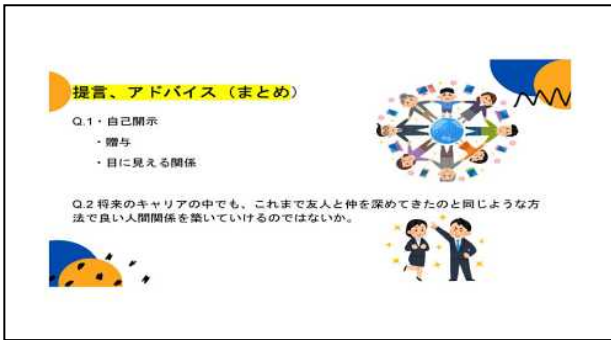
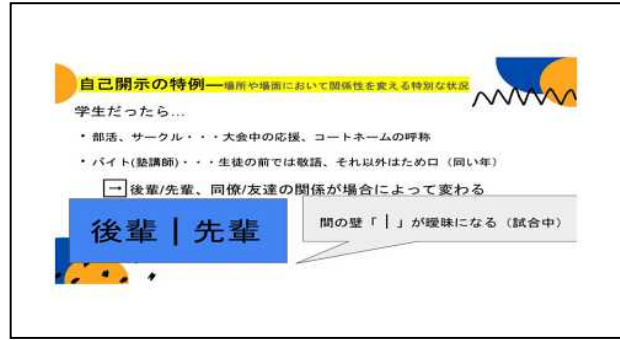
目に見える関係性：あだな

- 曖昧で不安定な友人関係
 - 可視化できそうなものはないか
- 身近な友達と呼称は？
 - タイの事例

☆自分たちで認識するだけでなく周囲の人にも当事者たちの特別な関係性を示す
 ☆あだ名で呼び合うことが友人関係の始まり？

2人の相互の感情は可視化できない

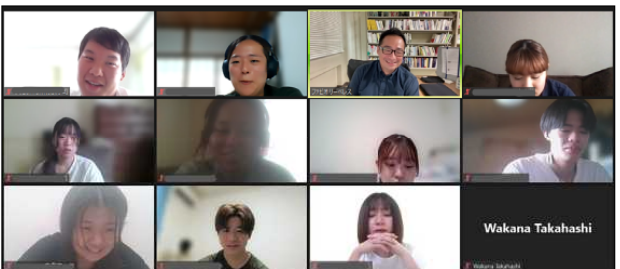


参加者のレポートより

(コメントは原文のまま記載しています。)

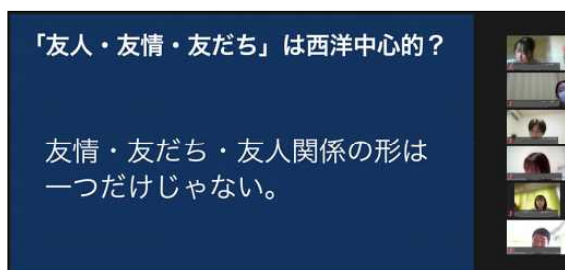
- 分科会では、友人の繋がりからみる人間関係の形成の方法を学んだ。友人関係とは目に見えず曖昧で不安定なものであり、友人になること関係を維持することは難しく単純なことではないと改めて感じた。
- まず分科会の内容に関しては友人関係という複雑な問いについて考えた。最初の講義において学んだ先人たちの友人関係が、議論を重ねるうちにすべてが当てはまる訳ではないということに気づけたのは大きかったと思う。ここから、議論を重ねることで今までの価値観が変化し新たな考えが生まれてくるということを学んだ。また、内容的にコミュニケーションについて考えることが多かったが、社会における人との関わり方と今の自分の関わり方と変わらないということを知り、社会に対しての不安は軽減できたと思う。しかし、交友関係で考えると今のように大学内だけでなく、企業同士、そこから派生してくる交わりが増えてくると思うので、コミュニケーションの方法については、一つだけでなく様々なツールも考慮して考えたいと思った。次にグループ活動についてである。分科会の内容が難しかっただけに、多種多様な意見を聞くことができた。それぞれが積極的に発言し協力し合ったため、円滑に議論が進んだ。一番の学びは相手に伝えるためのツールは口頭だけじゃないということである。各自で書き込んで意見を出し合う形式でやったが、それぞれ意見が出しやすかったと思う。

- 事前学習の課題教材を読んで、哲学的なアプローチ、文化人類学的なアプローチの方法を知り、「友人」がどう定義されるのかよく理解することができた。また、議論の中で、具体例から他の場合の友人関係について考えることができ、分科会としての友人の再定義をすることもできた。
- 自分のキャリアパスについては、明確に決定することはまだできていない。しかし、どんな職業に就くにしてもそこに自分以外の不特定多数の人がいるのは確かだし、自分ひとりで成し遂



げられるものではない。将来のキャリアを築いて行く上で、人間関係形成が大切であるということ再認識し、その構築のためには友人をつくるのと同じプロセスを適切に踏んでゆけば良いということ学んだ。また、相手が違う文化圏の人であろうと、根本は同じであるし、グローバル人材として求められること(寛容な考え方やコミュニケーション能力、俯瞰で物ごとを観察する力)を活用し、各分科会の講師の方がグローバルな場で活躍されている経験のお話などを手掛かりに自分なりに人間関係を築いて行こうと思えた。また、異なる文化背景や考え方を持つ人たちと衝突してしまったとしても、他の分科会の発表にもあったように、その場を譲ってしまうこと相手を尊重することは別のことであるという意識を持ってコミュニケーションをとって行こうと思う。

- 自分のキャリアについて考える良い機会になりました。特に分科会での講義や議論を通して、友人との関わりをヒントに良い人間関係の築き方とキャリアの関わりについて考えました。
- 分科会では、友達について学んだが、ファビオ先生が仰っていたように今回学んだことだけが友達の作り方や定義とは限らないため、今後のキャリアの中で自分なりに「友だち」のあり方について見つけていきたい。
- 今まで、友人という人間関係について深く考えたことがなかったのだが、今回のセミナー、分科会で学問的に考えることによって、今までの自分の言動を振り返り、客観視できたのが面白かった。人それぞれ、人との距離の縮め方は異なっているが、そこには、一定の共通点があり、そこに着目した講義だったので、そのような点においても興味深かった。また、年齢や学部等が異なる方たちと話をする機会はあまりないので、貴重な経験になった。



分科会 F



異文化理解コミュニケーションで 必要なこととは？

浅水 伸介（あさみず しんすけ）

カンボジア・ベトナム屋 代表

略歴：

大学院修了後、メーカーで開発に従事。平成 21 年、JICA 青年海外協力隊でカンボジアに赴任し、理数科教育プロジェクト及び農協振興プロジェクト、その後、ベトナムにて日越大学設立プロジェクト専門家。帰国後、主にクメール語の通訳・翻訳を行いつつ学校等での国際協力関連講座を担当している。

🌐 講義の概要

1. 仕事の内容・研究テーマ

現在、主にクメール（カンボジア）語の通訳・翻訳を行いつつ、学校などからの要請に応じて国際協力関連の講義などを受け持っている。日本にはクメール語の案内や資料がまだまだ乏しく、クメール語の通訳者が少ない。最近では、カンボジア人技能実習生の増加に伴い、通訳の要請が増加傾向にある。彼らは日々、言葉が分からないといった不安を感じながら生活している。私は通訳という立場で彼らをサポートしたいという思いがある。

また、国際協力の仕事に携わった経験を活かして、小学校から大学、一般を対象とした国際理解に関する講座を担当し、日本の日常生活ではあまり感じることができない世界の様々な価値観等を発見してもらう機会を提供している。



2. キャリアパス

私の場合、キャリアパスといっても様々な偶然が重なって現在の私がいるように思う。

元々、化学系の研究開発といった理系の仕事をしていましたが、現在は文系の仕事をしている。

もともと中学・高校時代からずっと化学が好きで、大学院修了後、化学系のメーカーに就職したことで、ブレずに自分の道を勝ち進んできたかのように見えた。しかし、研究・開発の仕事は、自分にとって向いていなかったと自覚、入社後直ぐに転職を考えるようになった。

実は、大学在学中に国際交流サークルに入って外国人留学生などと交流していくうちに、外国について興味を持ち始めていた。最初は旅行で外国を訪れる程度であったが、外国で仕事をしてみたいという気持ちの変化を生じた。就職した企業の海外拠点への勤務も視野に入れていたが、本当に自分がやりたいことは何だろうと考えた結果、国際協力の仕事に就きたいとの考えに至った。ところが、私の専門分野は前述の通り国際協力とは程遠い分野だったので、どのようなステップを踏んで国際協力の仕事につなげていくかを模索した結果、本キャリア教育セミナーの前身である国際キャリア合宿セミナーへ参加（2007 年）、その後、JICA が行っている海外協力隊に参加して理数科教師としてカンボジアへ派遣され、そこから国際協力の現場経験を積むことになった。

国際協力の仕事に携わってみて、国際〇〇学部とか語学系学部の出身というものが必ずしも専門分野として必要ではないことがわかった（逆に言うと、それらを大学で学んだからと言って、それだけで海外協力の分野の仕事ができるわけではない）。

海外協力隊を含めて、JICA での国際協力の仕事に約 11 年間従事したが、日本にいても何か外国とつながる仕事をしてみたい、今までとは違う形での国際協力のお仕事をしてみたいという思いから、カンボジア・ベトナム屋を起業し、現在に至る。

3. 分科会の内容

共感することについては親近感、そうでないものについては、違和感や時として憎悪を抱くことがある。それは同じ国や地域にいる同じ民族であっても起こりうることで、無意識の内に境界を作り、分断を生じ、時として排除する動きが多々ある。以下のキーワード、参考資料、予習用リーディング課題などを踏まえて、自身が感じたこと、気づいたこと、体験したこと等を挙げ、意見交換する機会を設ける。意見交換にあたり、どんな時に異文化を感じるか、その異文化を自分ほどのように解釈したか。異文化を異物として否定的に捉えたとしたら（否定的とまで言わなくても、ちょっとした違和感があったとしたら）、それをどのようにして理解、共感といった肯定化につなげることができるだろうか、議論していく。

4. キーワードリスト

- 異文化
- 多文化
- 外国人コミュニティー

5. 参考資料等

身近に異文化を感じることができるものがないだろうか自分自身で探してみよう。例えば、外国料理のレストランで外国人が従事しているところはないだろうか。或いは、外国食材店の商品を見るだけでも異文化を感じることができるだろう。もし、機会があったら、来店しているお客さんや店員さんとお話してみるのも良いだろう。

6. 事前予習用リーディング課題

- 超えてみようよ！境界線（かもがわ出版、村山哲也著）
- タイトルの中に「異文化コミュニケーション」を含む書籍 1冊
上記の意見交換で役立つので、是非、読んでおきたい。

参加者による全体発表

<p style="text-align: center;">異文化理解コミュニケーションで 必要なこととは？</p> <p>分科会F</p> <p>講師：浅水伸介 先生 メンバー：泉田佳乃 岩上彩葉 加藤愛梨 亀井あかり 岸瑞歩 栗原章剛 佐藤彩加 佐藤俊晃 柴沼明音 鈴木理莉</p>	<p style="text-align: right;">担当者：泉田/柴沼</p> <p>目次</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 異文化間摩擦を減らすために 2 異文化を理解することとは 3 コミュニケーションにおいて大切なこと 4 「尊重」と「合わせる」の違い 5 まとめ 6 キャリアプラン
<p style="text-align: right;">担当者：泉田/柴沼</p> <p>異文化を感じたことはありますか？</p> <p>日常生活において...</p> <p>(例) 礼儀作法、言葉、表現 敬意の示し方、食文化〈宗教〉 など</p> <p style="text-align: center;">➡ 異文化間摩擦</p>	<p style="text-align: right;">担当者：泉田/柴沼</p> <p>異文化間摩擦を減らすために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何が必要？ 相手の文化を理解する 相手に配慮をしたコミュニケーション <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">そもそも文化理解とは何か、なぜ理解する必要があるのか 文化の違いに直面した時どうすればよいのか</p>

担当者: 佐藤七/岩上

学んだこと① 異文化を知って、その文化を理解するとはどういうことなのか

中国の文化は非常に異なる
日本の慣習は異なる

コミュニケーション
理解

十分な量いただいたという意味を示す

尊重

担当者: 佐藤七/岩上

自分と相手の文化の違いを認識して、相手の文化の背景・理由に関心を持つとともに尊重すること

【異文化を理解することが大切な理由】

相手の文化を理解し相手を思いやったコミュニケーションをとることで、異なる文化を持つ相手とも相互理解を図るため

担当者: 桑原/佐藤あ

学んだこと② 自分が相手を理解しようとしているのに、相手が自分を理解してくれない場合、どう対処すべきか？

共通点・共感
興味を持ってもらえないような話
長い時間一緒に過ごす

より良いコミュニケーション

担当者: 桑原/佐藤あ

学んだこと② 文化の違いによって、相手も自分も傷つかないようにするためにはどうすればよいか？

例:

- 日本: 雑料理はすすって食べる
- 海外: 雑料理は静かに食べる

文化間の摩擦が生じる

トラブルにつながる

心掛
相手の文化と自文化の両方の理解が必要

担当者: 鈴木/亀井

学んだこと③ 相手の文化を理解するために、まずは自文化について知らなければならないのはなぜか。

自文化を理解

- 自文化、習慣、考え方が確定する過程、を形成する基準(自分の常識)を知る。

どうやってそれらを知るのか。

- 自分と相手を比較して違いを明確にする。
- 多様な人との関わりから自文化を浮き彫りにする。
- 自分の置かれてきた環境と紐付けて自分の常識について考える。

担当者: 鈴木/亀井

自文化を理解することで、

- 相手の文化を受け入れやすくなる。
- 理由:相手の文化にも意味があることを想像できるため。
- なぜ受け入れることができないのか、相手に説明できる。
- 理解することはできなくてもひとつの文化として認識できる。

担当者: 鈴木/亀井

学んだこと③ 他国の文化に接した時、相手を尊重するのは大切なことだが、それは自分のなかの大切なものを抑えて相手に合わせるということにはならないか？

相手を尊重する — 違うこと — 相手に合わせる

[例]

- 批判をしないで相手の話を聞く
- 興味を持って知ろうとする
- 思いやりを持って寄り添う

担当者: 加藤/岸

まとめ/分科会を経て学んだこと

文化が異なるのは自然なこと

文化間の摩擦には相手を知ることが効果的

“尊重”と“相手に合わせる”のは違うこと

担当者: 加藤/岸

まとめ/分科会を経て学んだこと

異文化理解コミュニケーション

互いの理解や経験を通して自文化を再認識することが出来る

+

新たな視点・要素を取り入れることが出来る機会であるということ

グローバル社会である現代であるからこそキャリア形成の上でより重要である

●アクションプラン

～今回の学びをキャリアにどう活かすか～

- どんな環境でも一旦その文化を受け入れる。
- 自分の常識を押し付けず、まずは相手の話を聞き、尊重することを心がけたい。
- 様々なバックグラウンドを持つ人との違いや自分の中で作られる境界線をむしろ前向きにとらえ、楽しむ。
- 相手の文化を尊重し理解するために、さまざまな文化に自分の肌で触れたい。

「自分らしく生きる」を目標に双方の価値観・理解を活かして第3の新しい視点・価値観を双方の見解を尊重し幸せな社会形成に携わりたい。

5. パネルトーク

グローバル時代におけるキャリア形成について

司会：高橋 若菜 宇都宮大学 国際学部 教授

各パネリストが、体験を踏まえて、キャリア形成に関して「大切なキーワード」を3つ挙げ、その理由を説明した。その後、参加者によるパネリストへの質問、グループ別ディスカッション時間を設けられ、意見が発表された。



パネリスト：郡司 成江（ぐんじ まさえ）
ビューティーアトリエグループ総美有限会社
代表取締役社長

- ① 100年時代
- ② これからのニーズ
- ③ 逆算思考

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 人生100年時代と言われている現代において、また、変化の速い時代を生き抜くために、逆算思考が不可欠であると感じた。キャリア形成のため、直ちに日々の行動に取り込むことができる考え方だ。
- 逆算思考のお話から、マルチステージのライフスタイルに対応していくために行動し、知識やスキルを身につけていくことの重要性や習慣作りの重要性を学ぶことができた。
- 自分が動かなければ未来が変わることはないというメッセージを強く感じた。SNSなど常に変化する現代に対応するには、常にそれらの変化を見越した行動が必要になると感じた。



パネリスト：宮原 麻季（みやはら まき）
認定NPO法人シャプラニール＝市民による海外協力の会
事業推進グループ チーフ

- ① 現場
- ② 一旦受け入れる
- ③ 興味

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- それぞれ特有の普遍的価値、文化が存在。国際支援の現場において、一旦受け入れることの重要性を学んだ。自分の思いこみや文化の違いに惑わされず一旦相手を否定せず受け入れる姿勢が重要だと学んだ。
- 現場のリアルを知るとはとても重要ではあるが、それだけを信じすぎると、他者が支援をする利点を失うこともなりかねない。外部の人として話を聞き理念や考えを押し付けることなく取り組むことが大切だと感じた。
- 現場：自分自身の目で見て確かめることが大切であると感じた。先生のネパールで経験した、今まで持っていたイメージや知識への違いに驚いたという経験は、誰も一度はしたことがあるのではないだろうか。知識を得ることは重要だが、それを過信しすぎるとはリスクもあると思う。先生も仰っていたように、学ぶことと自分の肌で感じることを、2つのバランスが大事であると考えた。



パネリスト：毛塚 幹人（けづか みきと）
都市経営アドバイザー
（那須塩原市・さくら市市政アドバイザー等）

- ① 仮説思考
- ② 行動
- ③ 強みの掛け算

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 仮説を立て小さなステップでも良いので始めてみる大切という言葉に背中を押された。
- 強みの掛け算：仮説・行動のステップを繰り返すと今まで考えてきたことや習慣が自分の強みや成長へと繋がっていく。
- 自治体の中で誰のために何が必要なのかを考え実際にトライ＆エラーを繰り返し、積み重ね、より良いものを求めていくという言葉が印象的だった。



<p>パネリスト： 申 惠媛（しん ひょうおん） 宇都宮大学国際学部 助教</p>	<p>① 多文化共生 ② 地域社会 ③ 当事者と研究者</p>	
<p>参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 私たちが生きているこの社会の中で、エスニック・アイデンティティを持つということ、様々な人たちが共に生きて行くために必要なこととは何かという問いを得た。 ■ 先生ご自身の経験から、社会学は「内部観察」としての性格を持つ点、当事者/研究者としての姿勢間の距離の取り方についてのお話が印象的だった。 		
<p>パネリスト：リーペレス・ファビオ（りーぺれす ふぁびお） 宇都宮大学 国際学部 助教</p>	<p>① 異文化交流 ② 友人関係 ③ 親密性と疎遠性</p>	
<p>参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 他者との友人関係を作る時、無意識的にもその間には様々な作用がある。交流だけに留まらない形。 ■ 連続的な移動を繰り返して生きる人々が増えて来ている点、単純な枠に人々を納めてみるのが難しくなっているという点、様々な異なる背景を持つ人との関わり方について考えるきっかけを得た。 ■ 先生の経験を踏まえた、友人関係の捉え方、研究についてのお話から、文化人類学的な視点のお話に興味を沸いた。 		
<p>パネリスト： 浅水 伸介（あさみず しんすけ） カンボジア・ベトナム屋 代表</p>	<p>① 異文化/多文化 ② 境界(線) ③ コミュニティーとの関わり</p>	
<p>参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 理系から国際協力の分野へ飛び込む勇氣に感動し、行動することの大切さを学んだ。 ■ 興味から始まって実際に NGO の活動に参加する行動力。自分たちが良いと思うものが必ずしも他の人に通じるとは限らない。 ■ 異文化を持つコミュニティーとどのように関わるかという過程で、違和感を持つことや不思議と感じることは重要。同時に、自分の中の常識に疑問を持つこと。 ■ 「差を楽しむ。」英語を使って何かすること。異文化交流すること。海外に行く。環境を変えることをためらう人にとって前向きなメッセージになったと思う。 		

🌐 参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 全体として共通していることは、「自分への理解を深め将来に向けて計画すること」、「他人との関わり方を身につけること」であると学んだ。
- 全ての先生のお話から、「失敗してはいけない」という気持ちではなく、「失敗してもいいから行動してみる」という気持ちでトライして、自分の力や強みを増やしていくことが非常に重要であると学んだ。
- 分科会講師の先生方のキャリアについてのお話から、これからの自分の将来にコネクしていくためのものを得ることができ、非常に有意義な時間だった。セミナーから得た学びは将来に必ず生きてくると思うので、自分の財産として大切に、今後の学びに生かしていきたいと思う。
- 小さなスタートが未来につながること、特に、「習慣が未来を創る」という言葉が心に残った。小さなことの積み重ねは別にハードルが高いという訳ではない。しかし、スタートが切れない自分がいるの

は始めようとしていることが大きすぎるからだとも思った。もっと、できそうなこと、続けられそうなことから始めて、それを習慣化し、自分のものにながら、未来を形作っていきたいと思う。

- パネルトークを通して、講師の先生方のこれまでの経験、それから学んだことや、考えたことについて、重要なお話を聞くことができた。各講師の先生方が挙げた3つのキーワードは、様々でありながら、自分の経験に基づいたキーワードであることは共通していると感じた。加えて、先生方に共通していることは、「行動している」ということだ。流れるように生きるのではなく、自分の興味関心はどこにあるのかを分析し実際に前に踏み出していることが印象的だった。
- 実際に現代社会においてグローバル人材として活躍している講師の方々のお話を聞くことができたのは、自分の将来のキャリアを考えるうえでもとても役に立つものであったと思う。
- パネルトークでは、各分科会の講師の方のお話を聞くことが出来て非常に有意義な時間を過ごすことが出来た。各先生方の今まで積んでこられてきたキャリアについてお聞きすることが出来たと共に、自分とは違った考え方をもちだったり、今までに自分が聞いたことがなかった内容であったり、あるいは異なる視点だったりで、非常に興味深く感じた。



International Career Seminar

1. 概要

🎯 目的

— 世界で通じる即戦力の英語力を —
 国際分野の専門知識やグローバルな課題を英語で学ぶことで、実務に関わる実践的な英語能力を身につけます。また、第一線で活躍する講師より、各テーマや仕事の背景及び実状を学び、課題を話しあいながら解決策を考えます。

🎯 開催日程

2023年9月23日(土)、9月30日(土)、10月1日(日)
 事前指導：2023年7月26日(木) 18:00-19:30

🎯 実施形態

Zoomによるオンライン授業



開講式

アイスブレイク



全体講義

パネルトーク

分科会



中間発表

最終発表

閉講式

2. 開催日程

1日目（9月23日 土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
9:00	受付	13:00	パネルトーク
9:30	Registration	15:00	Panel Discussion by the Lecturers
9:30	開講式・オリエンテーション	15:10	趣旨説明
10:40	Opening Ceremony and Orientation	15:30	分科会・プレゼン方法の説明等 Introduction to Methods
10:50	全体講義・ワークショップ	15:50	分科会
12:00	Opening Lecture and Workshop	17:50	Work Group Session
12:00	昼食		
13:00	Lunch		

2日目（9月30日 土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30	分科会	15:30	分科会まとめ・中間発表準備
12:00	Work Group Session	16:30	Wrap-up Session and Presentation Rehearsal
12:00	昼食	16:30	中間発表
13:00	Lunch	17:30	Presentation Rehearsal
13:00	分科会	17:30	発表準備
15:30	Work Group Session	18:30	Presentation Preparation

3日目（10月1日 日曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30	発表準備	12:20	昼食
10:00	Presentation Preparation	13:30	Lunch
10:00	全体発表 (発表 10分、質疑応答 5分、講評 5分)	13:30	ふりかえり・閉講式
12:20	Final Presentation	15:00	Reflection/ Closing Ceremony

3. 全体講義



Time for us to Move On!? -Hints to Take International Action

Kazuhiko YOSHIDA, Ph.D.

Director, International Career Education Program
Professor, School of International Studies,
Utsunomiya University

Profile:

Kazuhiko YOSHIDA, descendant of Emishi and Yamato from Northern Honshu, Japan, is the chairperson of the International Career Education Committee and a professor teaching general linguistics and multilingual communication at School of International Studies, Utsunomiya University. He is also a non-professional bass player. Music and dance (just like languages) always bring him joy and interesting communication issues to consider. In the mid-80s of the last century he was just a 25-year-old hopeless mediocre Japanese monolingual punk. Having hit rock bottom with communication problems in everyday life he felt isolated from everyone else in the world. Inspired by an adventure novel saying “So, to devour landscapes, that’s the thing I should do now,” he decided to move to a place where nobody knew him. That was Montpellier, France in which people of 140 different nationalities live. Luckily, he started his social life and his study of languages and linguistics in such an ideal multicultural and multilingual environment. While being enrolled in the graduate school, he was sent as a visiting lecturer to Pakistan for 2 years then to Thailand for 3 years. He has been working for Utsunomiya University since 2003 after receiving a Ph.D. in linguistics, and supporting JICA volunteer teachers overseas since 2014. He has been learning and using a dozen languages which are indispensable for communication with people around him.

Information

This opening lecture allows participants to take their time and think about how to start communication in a non-native language, provides an opportunity to rehearse in their mind building relationship with the work group lecturer and group mates, working collaboratively for the common objective and motivates them to take their international action.



1. Current Work and Research Topics

At the university, he gives lectures and seminars in general linguistics, multilingual communication, Japanese as a foreign language and foreign language education in which students from different countries of diverse social, cultural and linguistic backgrounds meet, work together, change perspectives, teach and learn from each other and cultivate their communication skills. In linguistics, he is much interested in relationships between language and human cognition and conducts contrastive research between different languages on information structure both in sentences and in discourse. In educational studies, he is carrying out surveys of successful foreign language learners and roles of language instructors. Also, he is working hard on philosophy or methodological issues of language science.

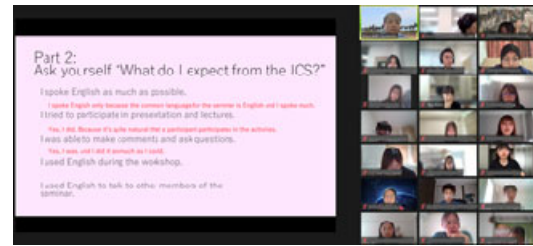
2. Main Topics for the Opening Lecture and Workshop

The lecture discusses cases of multilingual communication and multicultural collaborative activities in international communities, based on the lecturer’s own experience. Through the discussions, students will notice tips by themselves

to apply for their trials and efforts in the work group session and in their real life. Also, the lecture gives an instruction on how to start to use the Workbook and explains key concepts in the book.

Keywords:

- Imagination
- Living a multilingual life
- Living in a community



List of topics:

- What is information gap?
- Playing games in social contexts
- Adding another means of communication than the mother tongue
- Finding your role and playing it
- Changing perspectives
- Getting back to basics Etc.

3. Reference

Nothing will be specially required, so long as you are able and ready to talk about everyday topics coherently with people who happen to be next to you in the morning session on the day 1. If you are not really self-confident, the following books (or other books of similar topics) will be helpful.

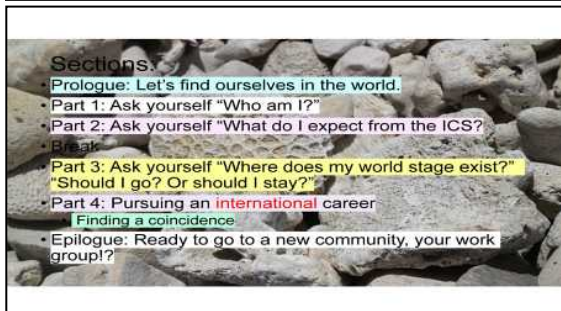
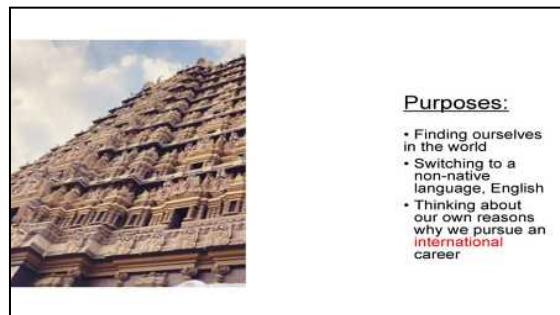
中井俊樹 (編集)(2009)『大学生のための教室英語表現 300』アルク

塚本亮 (2021)『ネイティブなら 12 歳までに覚える 80 パターンで英語が止まらない!』高橋書店

If you find it difficult to motivate yourself to communicate in English these rather small but inspiring books are highly recommended:

塩田勉(2001)『おじさん、語学する』集英社新書

竹内理(2007)『「達人」の英語学習法』草思社





Why English?

- ◆ Why is it selected?
- ◆ Why does our society force us to study it?
- ◆ Why more and more classes given in Eng?
- ◆ How could we be happy?

◆ Why do we have to have such a seminar?

A possible answer will be....

Because English functions most efficiently as a link between people speak different languages.

Hints from Sri Lanka

Background:
Sinhala is spoken by Sinhalese people who constitute 70%
Tamil is spoken by about 5 millions, which is about 15% of the population
Other languages exist in the country.

Hints from Sri Lanka

1. English is the only option for university lectures, because it is understood regardless of languages students speak natively.
(Dept. of Agriculture Extension. University of Peradeniya)

Hints from Sri Lanka

2. We publish 2 textbooks for the classes of cross-cultural understanding with Japanese people. The 2nd book is written in 3 languages, Sinhala, Tamil and English. But the 1st book is in Sinhala and English only. However, English version is appreciated.
(Japanese Language Section, University of Kelaniya)

Evidence 1

18.
(1) The Official Language of Sri Lanka shall be Sinhala.
(2) Tamil shall also be an official language.
(3) English shall be the link language.
(4) Parliament shall by law provide for the implementation of the provisions of this Chapter.
(the Constitution of Sri Lanka)



Evidence 2

What the lecturer is wondering....
 To think about living in harmony in a multicultural society, such as Japan in near future ...
 Why Japanese people do not select English as the first choice for communication with people speaking different languages?

Part 1:
 Ask yourself "Who am I?"

Preparation 1: Find by yourself 3 or more of your characteristics and try to express those ideas in English.

Part 1:
 Ask yourself "Who am I?"

05:00

Part 1:
 Ask yourself "Who am I?"

Practice: You are divided into pairs automatically. You will have 3 short sessions with different partner. Each session lasts 5 minutes. Introduce yourself and ask questions to each other so that you can get to know your partner's personality.
 In the 2nd and 3rd sessions please introduce yourself and the former partners too, like "I met a girl before you. Her name is Marie. She likes.... The second partner was a boy from Brazil..."

Part 2:
 Ask yourself "What do I expect from the ICS?"

- Engage with those who wish to work on the world stage. Ask yourself "What type of people do I wish to work with?" Or "What is my world stage? Where does it exist?"
- Think about your roles in local and global society. Ask yourself again "Who am I?" "What am I good at or poor at?" Keep wondering "What part of work suits me?" "What efforts of mine do my group mates appreciate or smile at?" Do it during the work group session which will start this afternoon!



Evidence 3

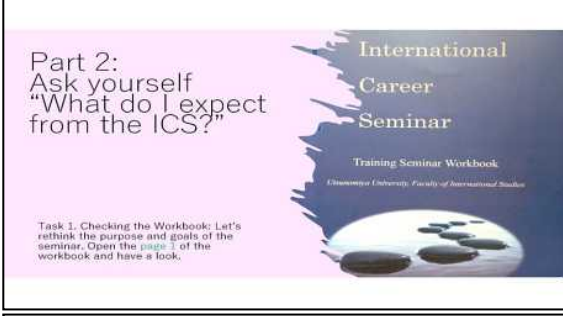
What the lecturer is wondering....
 Why are Japanese people so enthusiastic with teaching Japanese to non-native people of Japanese language?
 (Why are Japanese people so indifferent about learning and speaking other languages?)

Part 1:
 Ask yourself "Who am I?"

Hints:
 Give yourself a funny or impressive nickname.
 My name is ... (nickname or pseudonym).
 (Explain why you call yourself like that.)
 Tell your what you can do or skills.
 I speak....., I play..... well, I can,
 Say your current interest/enthusiasm. Say your preference.
 I am into ... now, I like/dislike ...

Part 1:
 Ask yourself "Who am I?"

Preparation 2: Rehearse what you are going to say in your mind.

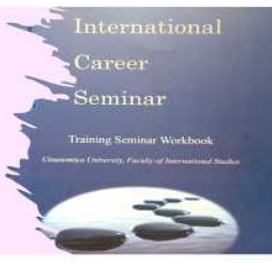


Part 2:
 Ask yourself "What do I expect from the ICS?"

3. Consider how to work in society with motivation.
4. Find motivation to actively pursue your career Ask yourself "What motivates me to do something new? Or what demotivates me?"

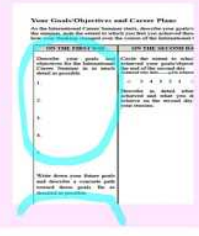
Part 2:
Ask yourself
"What do I expect
from the ICS?"

Task 2. Checking the
Workbook: Open the **page 3**,
have a look at the entire table,
and then fill in the column "ON
THE FIRST DAY" right now.



Part 2:
Ask yourself
"What do I expect
from the ICS?"

Workbook page 3:
As the International Career
Seminar starts, describe your
goals/objectives and career
plans. On the second day....



10 minutes' break

Part 2:
Ask yourself "What do I expect from the ICS?"

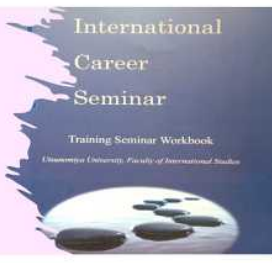
Workbook page 3:
As the International Career Seminar starts,
describe your goals/objectives and career plans
in 10 minutes.

After 10 minutes you will be divided into
groups of 4 people. You are expected to
exchange ideas with each other.



Part 2:
Ask yourself
"What do I expect
from the ICS?"

Task 3. Checking the
Workbook: Open the **page 22**.
Imagine "how will I evaluate
myself after the final day?"



Part 2:
Ask yourself "What do I expect from the ICS?"

I spoke English as much as possible.
I spoke English only because the common language for the seminar is English and I spoke much.
I tried to participate in presentation and lectures.
Yes, I did. Because it's quite natural that a participant participates in the activities.
I was able to make comments and ask questions.
Yes, I was. And I did it as much as I could.
I used English during the workshop.
Yes, I did, of course.
I used English to talk to other members of the seminar.
Yes, I did, of course.

Part 2:
Ask yourself "What do I expect from the ICS?"

I was able to exchange ideas with others.
Yes, I was, and I did it. Because otherwise it would be too boring.
I will be able to apply what I learned at the Career Seminar to my future.
!?
How useful was the international career seminar?
!?

Part 3:
Ask yourself "Where does my
world stage exist?" "Should I go?
Or should I stay?"

Question 1: Ask yourself "What is my motivation
or stimulant? Do I really need that? Where
should I live and work?" Really time to move on?

Part 3:
Ask yourself "Where does my world stage
exist?" "Should I go? Or should I stay?"


Something that makes you go:

Devouring landscapes, that's what I need to do. Like one who would never be satisfied with land, or life, or woman, for whom more things are needed. It's not a matter of understanding. It's not a matter of self-analysis. No, it's to become a motor, a hot metal monster that pulls its weight towards an unknown direction...

J.-M.-G. Le Clezio: le livre de futes (The Book of Flights : an Adventure Story)

Part 3:
Ask yourself "Where does my world stage
exist?" "Should I go? Or should I stay?"

Something that makes you stay:
Living here with an irreplaceable person



Part 4:
Pursuing an **international** career

It is time to think about what a career is. What does the word mean, the word which is part of the title of our seminar.

Part 4:
Pursuing an **international** career

An example not to imitate 1:
Graduation from a university ⇒ salesperson
⇒ air conditioning technician ⇒ foreign student in France
⇒ radio station assistant/security guard/student
⇒ graduate student/visiting lecturer abroad
⇒ graduate student/Web and database programmer
⇒ professor
⇒ non-commercial musician earning the living with music

Part 4:
Pursuing an **international** career

Possible answers:
What is career? Career is NOT changing jobs or collecting skills or experiences etc. BUT **the whole thing of how we live.**
Does it necessarily need to be **international**? I cannot generalize it by saying yes. But **it's more fun for me.**

An episode:
Finding a coincidence

An impressive story:

Xuanzang was a piece of the desert, nothing but a piece of the desert which slid forward on the path of the wind, thin, lying in the song of underground women, towards the west, towards the west, towards water...

le livre de fuites (The Book of Flights : an Adventure Story)
By J.-M.-G. le Clézio

An impressive story:

7 months after my arrival in France.
Marco: Do you happen to know J.-M.-G. le Clézio?
Valérie: Yes, of course!
Marco: How can it be "of course"? Every time I ask French people if they know him, they say "No." I never heard someone says that they know le Clézio.
Valérie: I was living in Mexico. My father worked as a cultural attaché for the consulate general of France in Mérida. And all my family lived there. When le Clézio came to live in Mexico to collect information for his books to write, my father took care of him.

An impressive story:

Valérie: When he arrived at the airport, he brought nothing but a small bag on the shoulder with a set of spare underwear inside. Because I was a little girl, he looked very tall. One day my family and he went out for boating. On the shore my mother was scared and didn't want to get on the boat. He said, "I will be staying with the madam." My father, feeling uneasy to let the cool guy stay with his wife, pulled her arm to make her get on the boat, and finally we all enjoyed boating...
Marco: Oh! I read his book and made up my mind to come here to study abroad...

Part 4:
Pursuing an **international** career

05:00

Imagine freely what your career path will be. Try to say in English what you have imagined.
After the please exchange what you have imagined in the breakout session.

Final question:
Is it time to take international action?
Ask yourself "What shall I do next?"
We are moving on to the workgroup session, ...

Marco

Students' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- try to do my best in the following sessions.
- From Dr. Yoshida's lecture, the following question occurred to me. To be a global human resource having leadership, what kind of abilities and are required? Ability to think the things informative, to communicate, to solve problems? I want to find the answer for this question for my future career developing, having interests in the world problems and studying deeply on those problems.
 - Making clear goals: it leads to foster our own abilities and growing. It is also useful to compare the way of thinking before and after the lesson. Challenging: It is important opportunities to try and learn new things. Understanding what I can do and cannot do. Building relationship with others: There are a lot of differences from others. Mutual understanding is crucial.
 - The opening lecture was exceptionally well-delivered and provided a solid foundation for the rest of the seminar. The speaker demonstrated a deep understanding of the subject matter and effectively engaged to me.
 - I think that it is essential to take cultural differences into consideration when we communicate with foreign people. Differences should not be regarded as any obstacles. We have to mutually understand the differences. This leads us to a good communication.
 - The opening lecture was fantastic and professor was very kind and helpful. On the other hand, the breakout sessions were my favorite because I got to speak and mingle with students with different backgrounds and education style.

4. 分科会・講師及び講義概要

Work Group A	Advising Foreign Exporters about the Japanese Market
Lecturer	Ritter DIAZ Representative Director of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean(JAPOLAC)/ Former Ambassador of Panama to Japan
Work Group B	Innovation Management in Disaster Risk Reduction – Process and Skills Required for Future Leaders
Lecturer	Takeshi KOMINO General Secretary of CWS Japan CWS Japan
Work Group C	The Art and Science of Diplomacy in International Cooperation
Lecturer	Sugit ARJON, Ph.D. Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University Former Visiting Researcher, the Institute of International Relations and Area Studies (IIRAS), Ritsumeikan University
Work Group D	Gender and Multicultural Societies
Lecturer	Ilju KIM, Ph.D. Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University
Work Group E	Dreams, Skills, Jobs & Well-being
Lecturer	Bernadett KISS, Ph.D. Lecturer, Lund University, Sweden
Work Group F	Don't be Afraid to Communicate in a Second Language!
Lecturer	Takayuki KIMURA, Ph.D. Assistant Professor, School of International Studies Utsunomiya University

分科会 A



Advising Foreign Exporters about the Japanese Market

Ritter DIAZ

Representative Director of the Japan Association for
Promotion of Latin America and the Caribbean
(JAPOLAC)/
Former Ambassador of Panama to Japan

Profile:

Dr. Ritter Diaz served for almost 20 years at the Embassy of Panama in Japan as a Commercial Counsellor (1999-2014) and Ambassador (2014-2019). After exiting the diplomatic service in 2019, he became an international consultant between Japan and Latin America. He has also worked for the largest bank of Panama, Banco General as well as Panasonic Latin America. He received a BA in Political Science from the University of Wisconsin-Eau Claire, a Master Degree in International Political Economy from Tsukuba University and an Honorary Doctorate from Chiba University. The complete profile can be viewed at his blog: <https://sunao.cloud/resume/>

Information

1. Current Work and Research Topics

As an International Business Consultant, my primary focus is on fostering business relations between Japan and Latin America and the Caribbean (LAC). I provide guidance to companies regarding the business protocols of Japan and the countries within the LAC region, covering areas such as export/import, real estate, and financial services, tourism, among others.

In my role as the Representative Director of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean, I am actively involved in promoting academic exchanges between Japanese universities and those in LAC. I strive to encourage Japanese students to explore and gain a deeper understanding of the LAC region, so that they are ready to travel and enrich their international experiences.

Additionally, I advise universities on establishing cooperative models that bridge academia and business, ensuring students are endowed with the right skills to enter and perform well in the job market upon completing their studies.

Another aspect of my work involves facilitating business relationships between small and medium-sized enterprises from Japan and LAC countries. Collaborating with bilingual business professionals from both regions, we endeavor to offer guidance to Japanese and LAC businessmen on effectively operating within each other's markets.

I regularly write informative articles on various issues ranging from COVID-19 to US elections to the geopolitics of semiconductors. These articles can be accessed at: <https://sunao.cloud>



2. Career Path

My career began with a role as delivery boy distributing paper for printing companies in Panama City. Although seemingly simple, this job played a crucial role in honing my communication skills and connecting with individuals from diverse backgrounds. Simultaneously, I pursued my studies in law and political science at the University of Panama, attending classes in the evenings while working during the day.

During my university journey, I was honored with a Fulbright scholarship that granted me the opportunity to complete my degree in Political Science at the University of Wisconsin-Eau Claire in the United States. Following graduation, I

embarked on a career as a legal assistant for Panama's largest private bank. Subsequently, I assumed the position of Head of Credit and Collection at Panasonic Latin America, where I gained invaluable experience in contract drafting and review. This tenure at Panasonic also provided me with essential operational and managerial skills, equipping me for the realm of international business.

Driven by my aspirations, I made the decision to resign from Panasonic and pursue a master's degree in international political economy at the University of Tsukuba in Japan. Before completing my master's program, I was appointed as a Commercial Attaché at the Embassy of Panama in Japan, marking the beginning of my diplomatic service that spanned nearly two decades. Through hard work and determination, I climbed the ranks within the Embassy, eventually assuming the position of Ambassador of Panama to Japan, an appointment I received from the President of Panama.

After a fruitful diplomatic career, I entered a new chapter of my life as an International Business Consultant, facilitating connections between Japan and countries of Latin America and the Caribbean.

3. Main Topics for Group Work Session

This workgroup session aims to provide essential information on assisting foreign exporters in introducing their products to Japan. It is specifically tailored for individuals interested in pursuing careers within the international division of a trading company.

The session will cover topics such as Japanese consumer behavior and import practices, drawing on real-life experiences and lectures delivered to chambers of commerce and business associations in the Latin America and Caribbean (LAC) region. Given the significance of practical skills in navigating the challenging labor landscape, the session emphasizes the importance of equipping students with real-life functional knowledge.

Additionally, an overview of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean (JAPOLAC) will be provided, highlighting its role in fostering business exchanges between Japan and LAC countries across six key areas which are important for human development such as education, health, business facilitation, agriculture, environment and artificial intelligence.

By the end of the workshop, participants will be able to create a practical template that assists foreign exporters in effectively presenting their company and product information to potential business partners in Japan.

The session will be conducted in a lecture format, with an emphasis on fostering an interactive and open environment for meaningful discussions and exchanges of ideas.

4. Keywords

- FOCUS: Give full attention and total mental energy to any endeavor you do, avoiding distractions or unrelated elements.
- DEPTH: Go deeper in your search, digging as much information as possible to make the right decision.
- PERSEVERANCE: Don't give up despite the stormy weather and headwinds.

4. References

Talking Points: Topic: Advising on Exports to Japanese Market. This is a **mandatory reading** for the workshop as this document will help student to follow up my lecture during the workshop.

5. Reading

The following articles are complementary readings for students, providing valuable insights on various topics, based on my experience:

1. "Panama's development as an international center for trade and culture in Latin America and the Caribbean-Human resources are the key"- An interview with Ambassador Ritter Diaz of the Republic of Panama. Published in The Mariners' Digest, Vol. 41, April 2016. This article explores Panama's development as a prominent trade and cultural hub in the Latin American and Caribbean region.
2. "My Experience as a Cultural Translator Between Japan and Panama" - A speech delivered to the members of the Federation for Maritime Promotion at the Japan Shipowners' Association headquarters on January 29,

2020. The speech highlights personal experiences and insights into the importance of cultural norms in facilitating effective international communication. It can be accessed at:

<https://sunao.cloud/category/intercultural-communication/>

3. "Line 3 of Metro: A Flagship Project for Panama and Japan". This article sheds light on the significance of Line 3 of the Panama Metro, which represents the largest transport infrastructure project in Latin America financed by the Japanese International Cooperation Agency (JICA). The project introduces Japanese monorail technology in the Latin American region for the first time. The article was posted on November 9, 2020 and posted at:

<https://sunao.cloud/2020/11/line-3-of-metro-a-flagship-project-for-panama-and-japan-linea-3-del-metro-un-proyecto-emblematico-para-panama-y-japon/>

Final Presentation by Participants





- Vermicelli noodles (rice flour)
- Laksa paste : RBD palm oil (contains antioxidant E319), peanuts (5%), sesame seeds (2%), mustard seeds (2.5%).
- Seasoning: Curry powder (contains fish), artificial chicken flavor (contains gluten & soybean), salt, monosodium glutamate (E621), chilli powder, and sugar.
- Coconut cream powder, contains sodium caseinate

Selling points

tasty	convenient	healthy
		
not too spicy unique flavor	easy to prepare	shrimp, soy beans, ginger



THANK YOU

Group A①

Coconut & Chocolate



International Career Seminar 2023
Group A-2

Almond Joy

Purpose

- To introduce a famous American chocolate in the Japanese market.
- To learn about basic information necessary to promote a product in Japan.


Almond Joy

Almond Joy is a candy bar manufactured by the Hershey Company. It is including coconut, sugar and lactose.

Chocolate containing coconut is rare in Japan.

Coconut benefits

1. Antibacterial effect
2. Diet effect
3. Improved cognitive function
4. Improvement of swelling



About Hershey's

Basic Information

- Establishment: 1894
- Location: in Pennsylvania, U.S.A
- Founder: Milton Hershey

Company's Theme

- Turning a small event into a wonderful memory

fastidiousness

- Use simple raw materials
- Ex) 100% farm milk/ California almonds only/ Certified Cocoa

Export

- More than 70 countries worldwide




Mr. Milton Hershey



Selling Points ①

The Most popular Candy Bars in the U.S. #9	⇒	Hard to find that in Japan
Not too sweet	⇒	Same as Meiji milk chocolate
High standard	⇒	Certified by relevant cocoa organization



Selling Points ②

Why do we have to buy the almond joy?	⇒	<ul style="list-style-type: none"> • Japanese companies don't sell coconut chocolate like Almond Joy • Japan's Chocolate Consumption is No. 1 in Asia
Why coconut chocolate? Not just chocolate??	⇒	<ul style="list-style-type: none"> • Coconut flakes are a good source of fiber
Can we contribute to our society?	⇒	<ul style="list-style-type: none"> • Yes, we can contribute to our society

Action plan

- Variety bag from Hershey's

How about importing these ones to Japan?

- ➡ To try Almond Joy
- ➡ Help promoting Almond Joy in Japan
- ➡ We should sell this production in general supermarket and in the same range as Japanese chocolate snacks



Conclusion

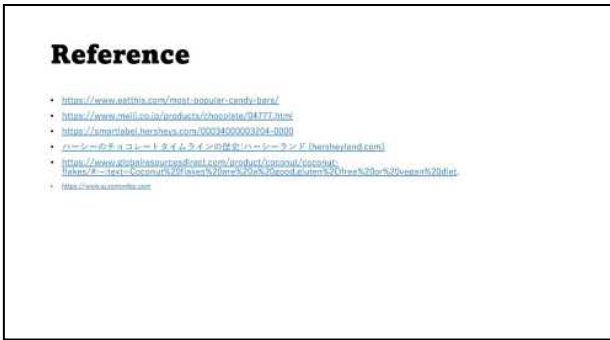
How about import Almond joy into Japan and sell it?

Strengths in selling Almond joy's

- Chocolate consumption is highest in Asia.
- No similar products in Japan.
- Coconuts are healthy.
- High level of public trust Hershey's.

Action plan

- Sell this as one of the chocolate in a variety pack.
- Sell in general supermarkets.
- From there, this gradually gains popularity at Japanese people.



Participants' Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- In our group, we learned about international business. I have never had the opportunity to learn about this topic, so it was very inspiring for me to think about the process of incorporating some foreign products. For instance, we have to consider consumers' habits and their trends. This class gave us a very practical topic and it was really fun and valuable for me to think about this procedure.
- I have not learned international business so deeply, so this was my first time to think about international business practically. We discussed how to promote Laksa from Malaysia. Having the member from Malaysia and the Japanese members who have been to Malaysia, we could exchange the information about the product and we could make a very attractive presentation.
- Throughout the seminar, I learned a lot of things. Firstly, I learned I should have confidence and should not be afraid. Dr. Diaz said this so many times in our session, so I got a little confidence through this seminar. Secondly, I learned the timing to speak out in the discussion. In making our presentation materials, I listen to the comments having different opinions from other members. In the middle of the group work, I decided to say my opinion and this worked well. Finally, we could make our presentation in time.
- In our group session, we could learn a lot about the relationship between Japan and Panama. Throughout the work group session, I learned that it is very important to speak and communicate in English. I would like to speak English more actively from now on.
- From Dr. Diaz's session, we learned international business in a practical way. Before taking this class, I have never thought about the process to sell one product. We have to take into consideration such things as why and where we are selling it, how much we should price it and how we could act to preserve our environment in the process of producing it.
- Through this class, I learned that I have to pay attention to a market if I want to work in the fields of marketing and sales. For example, when we go to a grocery store, we'd better try to see the products from a newly acquired perspective. This infers that what we are doing today leads to our future career. This was a big insight in seeking my future career.



分科会 B



Innovation Management in Disaster Risk Reduction – Process and Skills Required for Future Leaders

Takeshi KOMINO

General Secretary of CWS Japan

Profile:

After my career in working in Afghanistan, Pakistan, Myanmar, Thailand, I started to be involved in NGO activities in Japan from east Japan Earthquake and Tsunami in 2011. I currently serve as General Secretary of CWS Japan, and my responsibilities include: oversight and management of CWS Japan projects in Japan and liaison and oversight for Japan-funded projects elsewhere in Asia; leadership in fundraising and programming for emergency, disaster risk reduction, climate change adaptation programs in Asia; serve as resource person for CWS Global in disaster risk reduction as part of Technical Unit, and emergency response in the event of a major, sudden onset disasters; and representational role in key networks in Japan and in Asia region.

- My current representational roles include:
 - Deputy Chairperson, Executive Committee member, leader in innovation hub, Asian Disaster Reduction and Response Network (ADRRN): 2014-current.
 - Chairperson, Japan Quality and Accountability Network (JQAN): 2015-current.
 - Joint secretariat, Japan CSO Coalition for DRR (JCC-DRR): 2014-current.
 - Co-founder and a member, NGO2030: 2017-current.
 - Co-founder and a member, More Impact: 2016-current.

Information

1. Current Work and Research Topics

Our work involves emergency response for life-saving needs of disaster-hit areas both within and outside of Japan, and spreading the know-how on disaster risk reduction, which I believe it is relevant for everyone in this era. While disaster risks are rising rapidly due to climate change impact, the resources we have at hand is not growing as per the rising risk levels, and therefore, we need to produce more risk reduction impact with less resources. In order to do this, innovation lens is required. It involves working with many stakeholders, starting from communities across the Asian region, local and international NGOs, local and central governments, private companies, universities and researchers, as well as international organizations. It is sort of like, producer for resilience, and I take great pride in the impact of what we collectively achieve.



2. Career Path

Please see below video for my career path:

<https://www.youtube.com/watch?v=kkc4HH7Y3Y0>

2020年10月2日開催 NGO 職員のキャリアぶっちゃけ対談 vol.1 小美野剛(JPF 代表理事)、渡辺 早希(WELgee リソース部門統括)

3. Main Topics for the Workshop

This course explores a process of innovation management in disaster risk reduction field, and see critical skills required in problem identification, search, and solution ideation. After conceptual lecture, the participants will engage in practical work. We will identify a problem that we think is not solved as of yet, then will analyze it further to find potential solution which will be presented by the students at the end of the program. The flow of the course will be as follows:

1. The course will provide an overview of innovation management in disaster risk reduction and why it is relevant in our society
2. We will identify and explore specific problems that still are not solved yet that leads to vulnerabilities to disasters
3. We will explore a solution to the identified problem

4. Keywords

- Disaster risk reduction
- Humanitarian Innovation
- Resilience

5. References

- Humanitarian Innovation Guide
<https://higuide.elrha.org/>
- 30 Innovations in Disaster Risk Reduction
<https://reliefweb.int/report/world/30-innovations-disaster-risk-reduction>

6. Required Reading and Assignment

- Please review below videos on innovation management:
 - a. What is Social Innovation and How Do You Actually Do It
https://www.youtube.com/watch?v=7G20_sPzR4g
 - b. Working Session: Scaling up, Scaling out, Scaling deep: Innovations in Disaster Risk Reduction
<https://www.youtube.com/watch?v=DFEXtwdVNmE>
 - c. Introduction to Innovation and Problem Canvas Training
<https://vimeo.com/668125314/5264deda0e?share=copy>
- Please identify one recent disaster event that you know, and find out at least 3 reasons that led to significant disaster damage (e.g. you could explore issues such as why certain number of people lost their lives, why there was so much economic loss, why so many people were left behind, etc.)
- We will ask each participant to do brief presentation at the beginning of the session – one way of getting to know each other!

Final Presentation by Participants



01 Introduction

A brief introduction to some current disasters the world faces.

Earthquake in Morocco

- 8th September 2023
- Magnitude 8.8
- More than 2,000 people died

Particularly big damage happened in mountain areas

- Lack of infrastructure development and prepare for an earthquake
- Because of the road blockages and difficult geographic conditions, challenging to conduct search and rescue interventions

Flood in Malaysia

- Happened on December 2022
- Recorded 14 deaths and 70,000 people were evacuated
- Occured in 7 to 8 areas

Why did the disaster caused so big damage?

- The government's late response
- The building conditions
- Lack of information

02 Disaster Risk Reduction

Disaster risk formula

$$\text{Risk} = \frac{\text{Hazard} \times \text{Vulnerability}}{\text{Capacity}}$$

Hazard → Natural phenomenon that we cannot control
 Vulnerability → Physical difficulties, diseases, less information
 Capacity → languages, evacuation centers, staffs, stocks

Increasing capacity and decreasing vulnerability

What to do in earthquakes?

- Drop, cover and hold on
 - DROP to the ground; take COVER by getting under a sturdy table or other piece of furniture; and HOLD ON until the shaking stops
 - Don't panic and stay calm
- If you are inside
 - Stay away from anything that could fall
 - Do not use a doorway except if you know how strongly supported
 - Do not use the elevators
 - Stay in the building until the shaking stops!

- If you are outside
 - Stay there until the shaking stops
 - Move away from buildings, streetlights and utility wires
- If you are trapped under debris during or after an earthquake
 - Do not move around or kick up dust
 - Cover your mouth with a handkerchief or clothing
 - Use a whistle if available
 - Shout only as a last resort

- Pick up your disaster go-to-bag and ready to evacuate if needed
 - Phone charger and battery pack
 - Radio
 - First aid kit
 - Emergency plan
 - Seasonal clothing
 - Food
 - Water
 - Flashlight
 - Whistle
 - Coins
 - Personal care

Five-Level Warning System

Evacuation Drill


- The reason why we do this is to be able to evacuate safely in the event of an actual disaster, and to be familiar with evacuation methods in the event of a disaster.
- Another reason is because some student/adult from abroad doesn't know what to do, when the disaster occurs.
- That's why schools have a evacuation drill, and there's sometimes an evacuation drill event for foreigners.

Evacuation drill contents

- Learn the road or way to evacuate, which is the nearest evacuation center, the number of helpline center
- Learn which sign leads to an area or the shelter
- Learn what to do during disasters

Five-Level Warning System


- The Japan Meteorological Agency earlier this year rolled out a new five-level disaster warning scale to be used for floods and landslides. It is designed both to simplify the existing system and to reduce casualties by speeding up evacuations.
- For the first time, the warning system includes clear instructions tied to the numbers. For example, level 4 means all residents must evacuate, while the elderly and physically challenged must evacuate at level 3
- Under the previous system, the JMA and local governments issued their own evacuation instructions. Now, weather alerts from different organizations have been combined to give people a clearer understanding of the situation.



Do's and Don't during Disaster

- Earthquakes**
 - DROP, COVER & HOLD.** Stay away from windows, bookcases, bookshelves, heavy mirrors, hanging plants, fans and the other heavy objects. Stay under "cover" all the shaking stops.
 - After tremors subside exit your home or school building and move to open fields. Do not push others.
- Flood**
 - Do not walk through flowing water
 - Do not drive through a flooded area.
- Fire**
 - Exit from the school to an open area.
 - Contain the fire if possible. If not, get outdoors immediately.
- Landslides**
 - Stay alert and awake. Many debris-flow fatalities occur when people are sleeping. Listen to a Weather Radio or portable, battery-powered radio or television for warnings of intense rainfall. Be aware that intense, short bursts of rain may be particularly dangerous, especially after longer periods of heavy rainfall and damp weather.

Evacuation shelter/ area sign examples



03 Innovation

The crucial part in disaster management

What do you know about innovation?

Why is it required as a solution to the disaster management?



Innovation

- ★ Examples: Earthbag construction in Japan/ Tsunami warning buoy systems
- ★ Creating new and positive ideas
- ★ Solve problems of a certain group
- ★ Introduce novel and creative solutions
- ★ Adaptation and invention



Problem Analysis

Situation: Lack of time for assignment submissions

Identify the 5 Whys

Causes


- Not enough time? Busy?
- Forgot?
- Difficult?
- Not willing to study? procrastination?

Root cause is identified, analyse:

- Consequences
- What is known?
- Impact goals
- Solutions

Disaster: COVID-19 Pandemic

Start with asking: Why?



Did you identify the root cause?

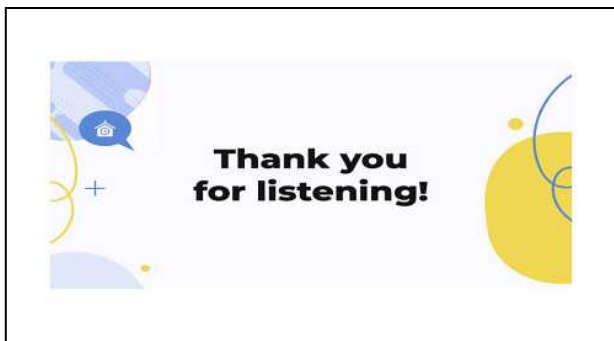
Innovative solutions for COVID-19

- Contact Tracing Apps
- Telemedicine
- Vaccines
- Better Medicines
- Communication through Social Media
- Working and Learning from Home



Conclusions

- Knowing how to stay safe in emergencies is vital for us and our loved ones.
- Learning these skills can make us more valuable employees.
- These skills remain important for addressing major global issues, like climate change.
- Helping our communities and backing innovation also helps us grow as better leaders.



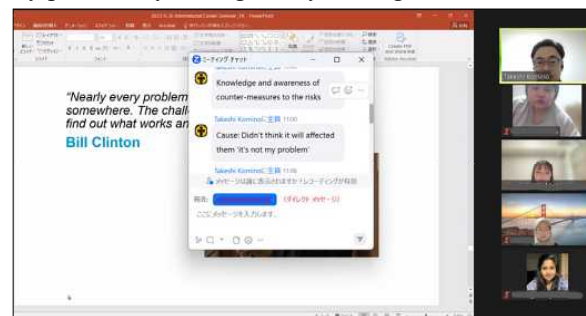
Participants' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- In the work group session, we learned about the risk reduction and disasters. The most impressive thing was how to think when we have to solve some problems. That is a problem analysis of thinking 5 whys. I will adopt this method and want to find what I want to do.
- Actually, I do not have any clear career plan. However, I swear to do just one thing throughout this seminar.

That is to keep trying to communicate with the people who have different cultural backgrounds. There are many people who have various cultural backgrounds here in Utsunomiya University and I will be able to find differences between the way of thinking, cultures, languages and so on in communicating with them.

- I learned the following things during the seminar. Firstly, I learned how to think about the risk reduction. To deal with this matter, increasing capacity and decreasing vulnerability are crucial. Secondly, to solve a problem, it is more important to focus on the problem itself rather than to think about the solution of it immediately. That is analysis should be the key to solve the problem. What I learned throughout the seminar is very important nevertheless I will be in charge of disaster risk reduction actor or not. I will try to prepare for any sudden disaster and will also share the knowledge that I learned at the session with the people around me.
- The presentation is very clear and informative with a lot of pictures coming along throughout the presentation, giving us a clearer picture or what was being presented. The lecturer's speaking speed is also moderate, making it easy for me to catch what the lecturer said and the intonation is very good making the presentation not a boring one. This is very impressive for me and will be a good model for my future presentation.
- In our group, we mainly learned disasters, risks, innovation and problem-solving process. It was so difficult for me to understand and think about these things before. That is because these topics need professional knowledges and consist of complex connections. However, Komino-sensei explained them very clearly and easy-understanding with plain words. Thanks to his lecture, we could discuss about the topic deeply and made a good presentation.
- My action plans to develop my future career are as follows; 1. Learn and study many things at Utsunomiya University, 2. Associate with many people, 3. Communicate positively, 4. Try and don't be afraid of my future, 5. Get to know myself and have confidence.
- I got a comprehensive understanding of fundamental principles and strategies involved in managing disasters effectively. I will use the skills and the lessons that I learned in the session. That covered crucial aspects of disaster management, providing valuable insights and practical knowledge.
- I will identify my strength, values and weakness. I will try to understand what motivates me and what I am passionate about in my career.
- In the presentation on the seminar with the disaster management, the lecturer emphasized the crucial role that cutting-edge technologies and creative approaches play in mitigating and respond to natural and man-made disasters. And the presentation highlighted those points.
- Disaster management is a critical aspect of ensuring the safety and well-being of communities in the face of unforeseen events. It encompasses a wide range of strategies and practices aimed at minimizing the impact of disasters and facilitating a coordinated response.
- I am very satisfied with my work group. Komino-sensei was supporting and sharing so many information with us. And he has great ability of explaining.
- Amazing! The discussion was very productive and went on very proactively among all my colleagues.



分科会 C



The Art and Science of Diplomacy in International Cooperation

Sugit ARJON, Ph.D.

Assistant Professor, School of International Studies
Utsunomiya University

Profile:

Sugit Arjon teaches theory of global governance and global civil society at Utsunomiya University. Arjon specializes in democratization, state violence, security, political dynasty, and civil-military relations in the Southeast Asia region and specifically in Indonesia. His doctoral research focuses on the political dynamics in the post-conflict territory. Before working in academia, he has professional experience in high-level policymaking with the Minister of Education and Culture of Indonesia and the Executive Office of the President of the Republic of Indonesia.

Information

1. Current Work and Research Topics

My class this semester introduces students to the structures, practices, norms and actors of global governance. The course examines the origins, development and challenges of global governance. Global governance is also a study filled with bilateral and multilateral agreements, apparent contradictions, unstable dynamics, and unresolved questions. Thus, the class also examines critical and specific problems such as the world's economic, political, cultural, and security dimensions.

Next semester, I will have another class which studies how social movements generate political change through several mediums, such as organization, communication and mobilization. The course focuses on an introduction to civil society, social activities and ideologies. This class focuses on why specific social movements emerged and how they impact security, national ideology, policies, culture, and identity.

My current research focuses on the political dynamics and sustainable development in post-conflict regions in Southeast Asia. My research focuses on two main sections; what are the political dynamics typically found in post-conflict areas, and how can sustainable development be achieved in those fragile areas? Many security scholars focusing on security studies tend to evaluate the impact of peace initiatives only by observing a few years after the conflict. Such a short-term perspective is not always helpful if we want to understand the deeper impact beyond superficial institutional changes. The majority of politics/security scholars observed the war in a region, but their attention shifted to other conflict areas when peace agreements were signed. Thus, on many occasions, post-conflict regions have not been studied in-depth until today, and essential questions—such as why peace has been sustained there and what lessons can be learnt—are often largely neglected in the scholarship. To fill this academic gap, it would be essential for us to analyze the political development in post-conflict regions. My research focuses on post-conflict Southeast Asian regions such as Aceh, Indonesia, North Maluku, Indonesia, Southern Thailand, Mindanao, Philippines, and East Timor.

2. Career Path

Before working as an Assistant Professor in Global Governance at the School of International Studies, Utsunomiya University, I was a visiting researcher at the Institute of International Relations, and Area Studies (IIRAS) at Ritsumeikan University, working on Conflict and Peacebuilding in Southeast Asia. At the same time, I worked as a Tutor at the Faculty of Global Liberal Arts, at Ritsumeikan University. I was also a research assistant at the Asia-Japan Institute (AJI), which focuses on Human Security in Southeast Asia in the Era of the ASEAN Community.

Before fully committing to academia, I had a hands-on experience in public policy when I worked at the Minister of Education and Culture office and the Executive Office of the President of Indonesia.

My responsibilities in the Minister of Education and Culture office included but were not limited to monitoring the implementation of the 2013 national curriculum, organizing workshops and discussions to review the performance of the 2013 national curriculum, assisting in organizing national training for curriculum instructors, conducting desk research on educational policy comparison of other countries, and develop a road map for the implementation of curriculum diversification.

In the Executive Office of the President, I experienced a firsthand process of evidence-based and data-driven public policy is essential in a national scope. Although it often competes with politically driven decision-making. My office managed and was responsible for ensuring the implementation of strategic initiatives, both international and national, including priority activities which are of concern to the President. Some of the strategic initiatives that I worked on were the Post-2015 Development Agenda (Sustainable Development Goals / SDGs), Open Government Partnership (OGP) and Open Government Indonesia (OGI), and other multilateral negotiations related to progress in achieving national priority programs, and other strategic initiatives.

I was also a teacher for elementary school students in a remote area of Indonesia. I also did an internship at the Indonesian Embassy in Canberra under the Political Attaché's supervision.

3. Outline of work group session

This session aims to deepen students' understanding of effective diplomacy in international cooperation, including the importance, essential skills and strategies. Through case studies and other practical examples, students will discuss how these skills are crucial to their development. In the process, students will understand career opportunities in diplomacy career paths.

4. Keywords

- Cooperation
- Diplomacy
- Leadership
- Communication
- Negotiation

5. References

- Tsutomu, S., 2008, Japan's Creative Industries: Culture as a Source of Soft Power in the Industrial Sector. In: Yasushi Watanabe / David L. McConnel (eds.): Soft power superpowers: Cultural and national assets of Japan and the United States, New York, pp.128-153.
- Bjola, C., & Manor, I., 2022, The Rise of Hybrid Diplomacy: from Digital Adaptation to Digital Adoption, International Affairs, Vol. 98, No. 2, pp.471-491.

6. Required Assignment

- Please identify diplomacy practices in your life.
- What are the differences between diplomacy today and in the past? What are some examples of diplomacy from now and then?
- What kind of career do you think in the field of diplomacy?
- What type of skills are needed in the field of diplomacy?


- <https://foreignpolicy.com/2022/08/20/food-diplomacy-countries-identity-culture-marketing-gastrodiplomacy-gastronomism/>
- <https://www.lowyinstitute.org/the-interpreter/future-female-women-diplomacy-still-under-represented>

Final Presentation by Participants

DIplomACY


Group C Members

- Piyumali Rathnayaka
- Saya Miyoshi
- Yuno Mizobuchi
- Miyu Suzuki
- Sherena Ayu Safiq Binti Mohd Razip
- Yuri Yoshiike
- Haruka Tobita
- Sanae Nakasawa
- Bun Sreyroth
- Miu Sato
- Benjaporn Wantanasuksan
- Natsumi Furusawa



Outline

- Introduction: What is "Diplomacy"?:
- Content1: Benefits of Modern Diplomacy
- Content2: Challenges of Modern Diplomacy
- Current situation ~Panda Diplomacy~
- Conclusion: Career and Diplomacy



What is the Diplomacy?



The conduct of relations between states and other entities with standing in world politics by official agents and by peaceful means" (Bull 1997, 156)

- Negotiation between political entities which acknowledge each other's independence" (Watson 1984, 33).

What is the Diplomacy?



Diplomacy is a practice or a skill that used to build up relationship between nations and other entities with standing in world politics by working with other countries to solve the problems peacefully by negotiation and making agreements.

Types of Diplomacy

- Traditional diplomacy
- Modern Diplomacy

Traditional diplomacy



Traditional diplomacy is creating relationship between nations and other parties by using formal and rigid methods. It involves exchanging official letters, and negotiating important agreements behind closed doors.

Modern Diplomacy



Practice of managing relationships and negotiations between countries in today's world that involves digital communication, international organizations and addressing global challenges.


Types of Diplomacy

Traditional diplomacy	Modern diplomacy
↓	↓
used Hard power	used Soft power

Types of Diplomacy

- **Hard Power**
It's a traditional diplomacy and use force through the threat or use of military or economic weapons
Mostly, the government has power. It's military forces. In the past, the Cuban Missile Crisis, the Suez Crisis, and the Korean War occurred.
- **Soft Power**
It's a diplomacy used nowadays. Government doesn't really work in soft power.
Despite of this, various organizations, such as university, NGO, and news media use it. In Japan, before 2002, J-Rock and J-Drama gave impact to the world through media.


Cuban Missile Crisis→ Countries didn't directly fight, but Soviet Union made a missile base in Cuba, and showed world a power



Definition of Gastrodiplomacy

"the exporting its national culinary heritage as part of a public diplomacy effort"

"the sharing a country's cultural heritage through food"



Example

Taiwan

- Campaign→ All in the taste: savor the flavors. Sent their local chefs to compete in international competition.

Thailand

- Global Thai Program→ supply ingredients.
- Campaign→ Thailand: kitchen of the world. Ranked forth in ethnic cuisine.

Japa

- Japanese government has promoted.
- Washoku → Intangible cultural heritage in 2013.



Challenges of modern diplomacy

Diplomacy in the 21st Century

- The spread of misinformation in the media and the internet.
- Cybersecurity threats.
- Inaccurate portrayal of cultures in films and media.
- Information warfare.




Examples:

- The Asian hate that ensued during the COVID-19 pandemic due to misinformation in the media.
- Several classified military documents were leaked during the war between Ukraine and Russia
- Shows such as Breaking Bad and Narcos have portrayed Mexican people in a negative light.
- Positive content in media will raise high expectations for the public.
- In the Ukraine war, some people supported the country without using military power



Panda diplomacy in China

In 1941, China sent Panda to U.S. for the first time to get the popularity of U.S. nation. From this time, it use Panda as diplomatic way. China and Japan concluded the Japan-China Joint Communique in 1972, and China sent its first Panda to Japan. After that, Panda become a symbol of friendly relations between them.



Career in Diplomacy

A career in diplomacy is all about engaging in foreign policies to promote peace, cooperation, trade, and commerce among nations.

A career in diplomacy or foreign policy-related job is in this respect very much like a political career. A diplomacy career is undoubtedly a good option for those interested in diplomacy and foreign affairs.

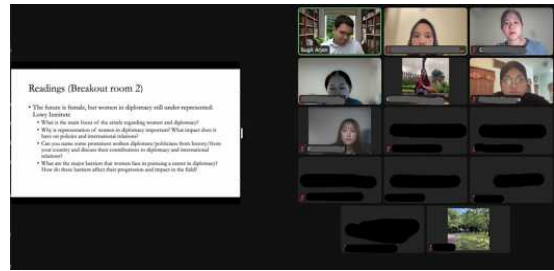



THANK YOU

Participants' Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

■ I learned about diplomacy from the lecture. There are two types of diplomacy: traditional diplomacy and modern diplomacy, which differ in terms of the role of government and what kind of power is needed. I first learned about gastro diplomacy in the lecture and I was interested to learn that cultural factors such as foods and eating habits are important for raising a county's profile, building good will with other countries and increasing a country's power. Also, I was struck by the fact that the term of gastro diplomacy has come into use with the spread of globalization, but foods have always played an important role in spreading cultures. Foods, sports and the arts can be enjoyed across language boundaries and we, general public, can get involved. In this regard, the lecturer made diplomacy more familiar to me.

- Traditional diplomacy requires military and economic power, which is disadvantage for small countries. On the other hand, modern diplomacy allows various actors to be involved, not just governments, and all the countries are equal. That was very impressive for me. I had an image of diplomacy as only governments and a few people can get involved in, so the lecturer made me think that modern diplomacy seems more familiar to me. Also, the discussion on career was impressive for me. Previously, I had an image that careers and jobs are the same things. However, having the discussion throughout the seminar, I learned that careers are long-term over the flow of one person’s life and jobs are aspects of one’s career in this regard.
- The topic of diplomacy has deep connection to my future goal and I choose this group. I was very satisfied that the topic and the content was far beyond my expectation. I was able to learn crucial concepts in diplomacy and successfully delivered our presentation.
- I learned a lot of things. First, I learned diplomacy from Professor Arjon. I was not interested in diplomacy in the beginning because I thought only diplomats were in charge of the section in diplomacy. However, I understand that not only diplomats but also other people are related to diplomacy. Second, throughout the session, I thought that I should have my own opinion clearly. I am not able to think of an idea so easily, I will try to think the things in a logical manner in daily life and I will try speak out my opinion in discussion. Third, I should have confidence with myself in speaking English.
- I want to be a flight attendant in the future. So, one of my aims at the seminar was to communicate with the people from various countries and to know their ideas and thoughts throughout the discussion. On the last day, my future dream has not changed. Furthermore, from the lessons and words by the lecturers, I could recognize my dream to be a flight attendant stronger than before, and I would like to try to adopt them to my future career.
- In Group C, we learned a lot about diplomacy and how to work on one project with many people successfully. I also realized that it is important to give it a try. Before the seminar, I hesitated to say my opinion. However, now I don’t hesitate to say my opinions. I found it comfortable to suggest something and that would be a good step for my future career.
- The lecturer was very good at explaining all the questions I may have and my group mates are knowledgeable.
- I really appreciated in having me participate in group C. The lecture is very kind, He knows that the participants didn’t speak English well. He tried to speak slowly and actually he always encouraged us to speaking out.



分科会 D



Gender and Multicultural Societies

Ilju KIM, Ph.D.

Assistant Professor, School of International Studies,
Utsunomiya University

Profile:

Ilju Kim is assistant professor at the School of International Studies at Utsunomiya University. Her research interests include migration, citizenship, gender, and immigrant labor market participation. She has written journal articles and book chapters on marriage immigrants' civic engagement, citizenship practices, and labor market participation in South Korea. Her current project compares the citizenship acquisition of marriage migrants in Japan and South Korea.



Information

1. Current Work and Research Topics

I am currently working on two projects: First, I am conducting a comparative analysis of marriage migrants' citizenship practices in Japan and South Korea. Considering the highly gendered nature of both countries' contemporary "developmental mission" – addressing population decline – I am examining how reproductive exigencies shape the incorporation of marriage migrants in both countries. Second, I am investigating migratory trajectories and skill development of Korean IT professionals in Japan.



2. Career Path

As a mass communication major, I began my career as a reporter at a daily newspaper company in South Korea. Working in this role required me to study and report on a wide range of social issues within short timeframes. However, I desired a deeper understanding of migration and its transformative impact on Korean society. This motivated me to pursue graduate studies, where I focused on the topic of migration and explored how migrants claim their membership in the host country. Embarking on my career as a researcher in Japan has expanded my perspectives and provided an opportunity to initiate a comparative research project on citizenship practices of marriage migrants.

3. Main Topics for the Group Work Session

In this session, we will explore Women, Gender, Sexuality Studies and its approach to understanding society from the standpoint of marginalized people's lived experiences. We will then explore the problems that participants aspire to solve and collectively decide on one or two specific problems to focus on. Using the analytical framework that we have learned – micro, meso, macro, and intersectionality – participants will analyze the problems and propose potential solutions. The group work will offer participants opportunities to examine their day-to-day challenges from various perspectives and consider active engagement in problem-solving.

4. Keywords

- The personal is political
- What is your problem?

- Micro, Meso, Macro
- Intersectionality

5. References

Kang, Miliann, Donovan Lessard, Laura Heston, and Sonny Nordmarken. 2017. Introduction to Women, Gender, Sexuality Studies. University of Massachusetts Amherst Libraries.

<http://openbooks.library.umass.edu/introwgss/>

6. Preparation for Participation

Theorizing lived experiences:

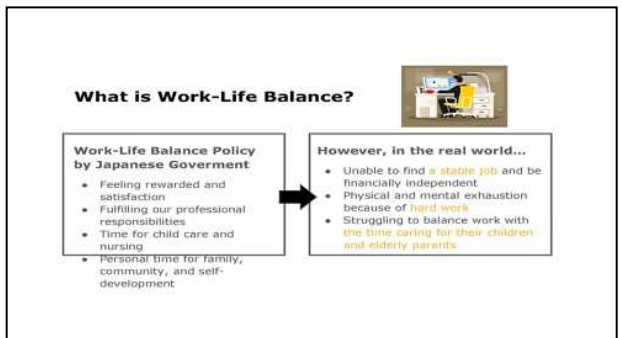
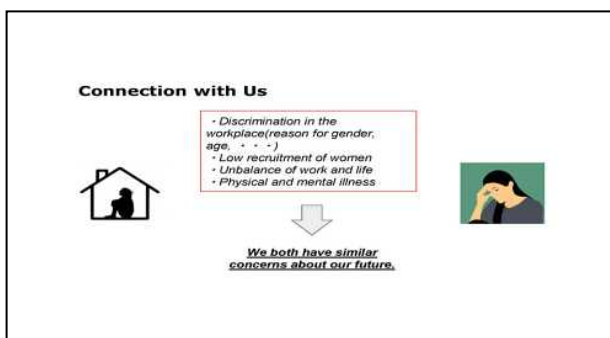
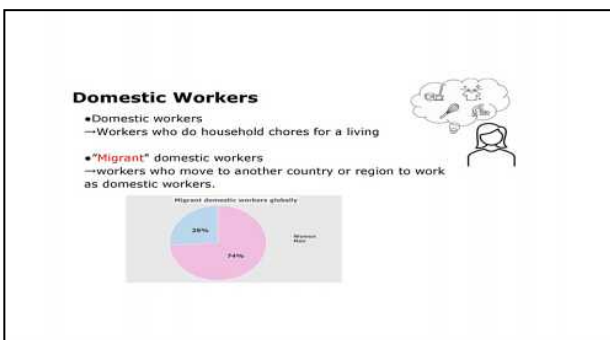
<http://openbooks.library.umass.edu/introwgss/chapter/chapter-test-unde-r-main-body/>

Critical introduction to the field:

<http://openbooks.library.umass.edu/introwgss/chapter/chapter-1/>



Final Presentation by Participants



Work Life Balance: Why Is It Important?

- 1) Burnout and karoshi (過労死, "overwork related deaths")
 - 750000 people die annually due to working long hours
- 1) Prioritizing of work life balance over salary and benefits
 - more than 60% of job seekers in the US and the UK prioritize work life balance




Gender Stereotype & why is it important?

- Gender Stereotype means general views and preconceptions about the characteristics that men and women should have or the roles that men and women should play.
- There are some Gender Stereotypes
 - ex) Men should work outside but women should do housework
 - Men are strong but women are weak

Why is it important ?


It's harmful because it involves generalisation and unfair because it overlooks the unique qualities and skill of individuals.



Action Plans

- **Work-life balance**
 - Establish complete labor laws (limits of overtime work, Flexible work time for both men and women (remote work, paternity leave) Clarify work-life boundaries
- **Break down gender stereotype**
 - Educate and raise awareness (media campaign) Review recruitment processes Encourage open discussions

In conclusion

<p>Keywords</p> <p>In the lecture, we learned ... Migrant Domestic Workers</p> <p>In our future career, we have some concerns ... To solve these problems ...</p> <p>2. Work-life Balance 3. Gender Stereotypes are important keywords.</p>		<p>Actions</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Make reasonable decisions by making appropriate laws 2. Removing gender stereotypes by educating and promoting gender equal housework <p>Knowing yourself and understand gender issues through lectures or some activities?</p>
--	---	---

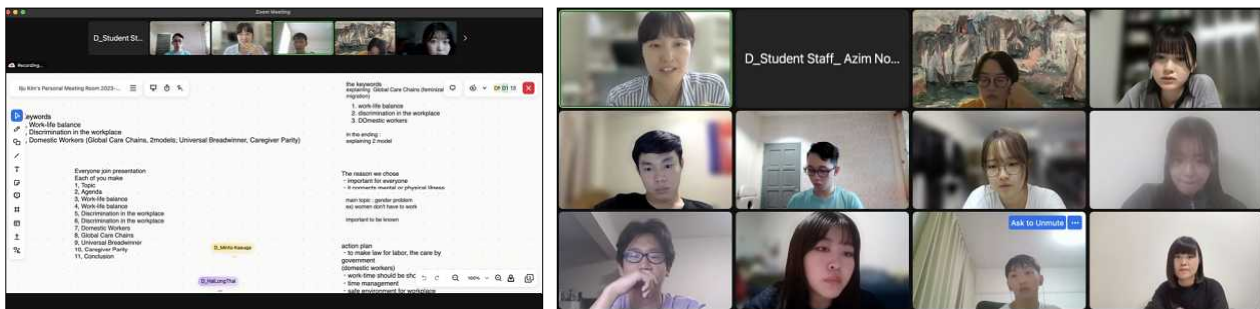
Q & A session

Participants' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- Our group came up with an action plan to keep the work-life balance and achieve gender equality. For example, flexible work hours for both men and women, education and raising people awareness on this issue. I think that this can be accomplished even in our workplace. And I would like to challenge what I can do for this.
- Our group discussed on the issue of gender and multicultural societies. Specifically, I learned about domestic workers. I have never heard of this word before. The more I learned about this topic, the more I realized this is relevant to all of us. I have to keep in mind what I newly learned, and have to apply it to my future and studies.
- It was a very good opportunity to think about gender and I understand that I have to put this into practice at my future workplace. Throughout the sessions, awareness of this issue has changed. I decided to take actions to achieve work-life balance and I want to connect what I learned to my future career.
- In our exploration of what we have learned, we delved into prevailing issues connecting gender, with a particular focus on domestic workers, highlighting the existing challenges and obstacles that hinder gender equality. Our overarching objective, as we embark on our journey towards equitable futures in our careers, entails the pursuit of two pivotal keywords: "work-life balance" and "gender stereotypes." These concepts serve as cornerstones in our mission to foster a more inclusive and equal professional landscape. Conclusively, we have devised a comprehensive action plan that outlines strategies and steps we intend to take in order to address these crucial issues and make meaningful strides towards gender equality. Though our collective efforts and dedication, we aim to contribute to a brighter, more equitable future.
- Throughout the lectures, I have learned a lot of things about gender sexuality migration like domestic workers and global care chains. And I realized that achieving gender equality is very essential so that we would be able to work and live in a comfortable environment. By joining the teamwork and discussion, I understand communication skills are quite important and leadership as well.
- My future goal is to work in a world stage like international institutions. To make the path to my future goal concrete, I have to develop a world perspective and understanding of multiculturalism. Throughout the seminar, my future goal has not changed. However, I learned lots of gender equality issues and I am sure that it can benefit to my future path.

- Throughout the discussion for three days, I achieved to develop communication skills by talking and working with the group members. On the other hand, I have not still figured out what I want to do in the future. I will try seeking what I am interested in and what I want to do for my future career.
- We discussed about the condition of migrant domestic workers. That was my first time to know about it and the theme was a little bit difficult for me to understand. However, throughout the work group sessions, I come to understand the issues and realized that all of us have to think about the problems. Regarding my action plan for my future career, I am really interested in the fields where I can use my language skills. I would like to work hard to improve my language skills.
- From the perspectives that I learned in the lecture, achieving gender quality completely in the workplace is difficult in Japan. There are some stereotypes about gender issues. We should learn more about the gender issues related to the workplace. Regarding my future career, my future goal is still uncertain. However, this seminar gave me an important insight. That is “focusing on the root/cause.” In this regard, I will look back my attitude towards my future career and want to find what I really want to do.
- The lecturer was so kind & describe things in a very clear way. Classmates also very cooperative & willing to learn new things.
- I was able to work together with everyone in the group, sharing ideas for our presentation, and be more confident when speaking in front of others.



分科会 E



Dreams, Skills, Jobs & Well-being

Bernadett Kiss

Lecturer, Lund University, Sweden

Profile:

My career has followed a winding trail across a variety of landscapes, countries, disciplines and professions. While the destination has not always been clear, certain interests and values have carved my path and given me plenty of life experience. In the past 20 years, I have worked in different multicultural environments with a variety of actors in the field of communication, human resources and environmental project management and research. Today I am mostly engaged in capacity building, and, who knows what tomorrow brings.

Finding your 'life call' is not always straightforward, you might require support along the way. In this session, we explore personal strengths, reflect on individual preferences, relate them to career dreams and see how these contribute to inner and outer well-being and sustainability.

Information

1. Current Work and Research Topics

I am a lecturer and researcher in environmental management and policy at the International Institute for Industrial Environmental Economics at Lund University (Sweden). As a researcher, I am interested in sustainable urban development, and more specifically how we can sustain a healthy and happy planet through having more and better-quality nature in cities. Green roofs, street trees, parks, rain gardens and city lagoons help to mitigate and adapt to climate change, enhance biodiversity and improve environmental quality, while contributing to our economic and social well-being. In the face of increasing environmental, economic and social pressures, cities in collaboration with a variety of urban actors, businesses, academia, NGOs and citizens are important players in transitioning toward urban sustainability. As a lecturer, I am devoted to exploring together with my students how we can engage in making our daily life more sustainable.



2. Career Path

I have a strong interest in environmental and social issues and the forces inducing different types of changes in these fields. What helped me to develop this interest has been my life experience – and my adaptive and reflective nature throughout. My teenage years' curiosity yielded two very different degrees: Master of Arts in Scandinavian studies and Bachelor of Science in business management. My longing for independence in my early 20s introduced me to different jobs in the business sector. I have worked for both local and international private companies in Hungary, as an office-, communication- and human resource-manager. Later, as a human resource manager of the European Parliament in Brussels (Belgium), I was part of facilitating the accession process and the acclimatization of hundreds of new employees into the life of the European institutions. In my late 20s, I started to be interested in environmental issues, but I could not find a job without an environmental degree. Did I want to go back to school? Not really, but my growing environmental sensitivity, determination, persistence, and drive for a better world guided me back to a new

field of studies and to a new country. By the age of 29, there I was, with another Master's degree, this time in environmental management and policy from Lund University (Sweden).

I am seemingly devoted to life-long learning. I believe that learning about the outer and inner environment are equally important. Identifying your preferences, knowing and using your skills, being attentive to your environment and open to opportunities are key qualities on this journey. In my professional life, I consciously created opportunities to study and work with my interest, i.e. processes of change. The strong will to deepen this interest brought me an interdisciplinary doctoral degree in environmental engineering and social sciences at the International Institute for Industrial Environmental Economics (Lund, Sweden) and plenty of international experience both in my professional and private life. As a project manager, by organizing different events and facilitating stakeholder dialogues, I work for a stronger collaboration and commitment towards sustainable urban and regional development. As a researcher, I analyze different aspects of sustainable urban development, including technology- and nature-based innovations, governance dynamics and learning processes. As a lecturer, besides sustainable cities, I have been engaged with students in developing their writing skills, research methodology and thesis works. As a facilitator, I am working together with professionals to develop transformational skills and opportunities to becoming change agents in their organizations. I am doing all these with a deep engagement in both the preset goals and the people involved.

3. Main Topics for the Group Work Session

In this session, we will together explore our 'nature' through discussing our dreams, identifying skills we have and we need to attain to get closer to our dreams and investigating personal traits and preferences to see what career perspectives all these can offer. This workshop will be based on established career-coaching practices, including skill mapping, competence profile development and road planning. Participants will have the opportunity to get to know themselves better through these practices, which will be complemented with guided brainstorming, focused group discussions, individual presentations, and peer feedback sessions. "You will only get out what you put in" – my hope is that these hours spent working on yourself will bring you closer to your 'true nature' and thus provide you with a better understanding of what you can offer to society, what society can offer to you and how it all relates to sustainability.

4. Keywords

What are the key ideals and **dreams** that guide your life?

What are you deeply **afraid** of?

What does **sustainability** mean to you?



5. Reference Material

- Myers-Briggs Type Indicator: <https://www.myersbriggs.org/my-mbti-personality-type/mbti-basics/>
- Character strength survey: <https://www.viacharacter.org/>

6. Optional Reading Materials

- Csikszentmihalyi, M. (2002) Flow. The classic work on how to achieve happiness. London: Rider.
 - Chapter: Happiness revisited (pages 1-22) of Csikszentmihalyi (2002)
 - Chapter: Work as Flow (pages 143-163) of Csikszentmihalyi (2002)

7. Reading Assignment

As a preparation for the session, I would like you

- to do a Myers-Briggs personality test:
 - <https://www.16personalities.com/free-personality-test>
- to do a character strength test: <https://www.viacharacter.org/>
- to engage with the working material and assignments (13-page word document)
- to watch at least one of these films:
 - Nic Mark's talk on the happy planet index:

- https://www.ted.com/talks/nic_marks_the_happy_planet_index#t-993961
- Dan Gilbert’s talk on happiness:
https://www.ted.com/talks/dan_gilbert_the_surprising_science_of_happiness
- Carol Dweck’s talk on the power of believing that you can improve:
https://www.ted.com/talks/carol_dweck_the_power_of_believing_that_you_can_improve
- a short explanation on flow: https://www.youtube.com/watch?v=8h6IMYRoCZw

Final Presentation by Participants

How to Achieve Well-Being in Life

By Group E: Dreams, Skills, Jobs and Well-Being
Lecturer: Bernadett Kiss

-Tamaki -Taiyo -Taishi -Nana -Sumika -Radhiyah
-Eriko -Kiara -Mitsuki -Suzuna -Erandi

Lack of Well-Being

- Stress and trouble concentrating
- Anxiety
- Affects job performance
- Disability to participate in social activities (https://whatworkwellbeing.org)


Depression and anxiety cause 12 billion days of work to be missed worldwide every year and cost 1 trillion dollars in lost productivity annually. (https://www.graygroupintl.com/blog)



Importance of Well-Being

Having a strong and well-adapted sense of wellbeing can help us overcome difficulties and help us achieve our goals in life.
Research has shown that a greater sense of wellbeing relates to increased physical benefits, increased productivity and creativeness in both employment and personal lives.

Points		
Well-being	Getting to know yourself	Mindset



About Well-being

Definition

- It refers to a state of overall health, happiness and contentment in various aspects of life, including physical, mental, emotional and social well being.

Our Opinion

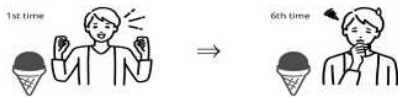
- It means a good state of your own life in all aspects.
- Mental health and physical health influence each other in well being. If one of them is missing, we will lose it.

3 Types of Well-being

1. The Pleasant Life
2. The Life of Engagement
3. The Meaningful Life


1. The Pleasant Life

- Positive emotion and pleasure
- ex) eating ice cream → rapid habituation can happen




2. The Life of Engagement

- Flow experience : concentrating so much that you forget time
- ex) drawing a picture



3. The Meaningful Life

- Identifying your strengths
- Using them to achieve higher purpose
- ex) leadership
- I use leadership when I was a leader of a school association, the Advisor for International Students



Knowing what well-being is for you and how to achieve it –is not enough!

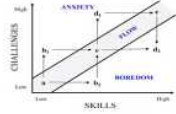


PRACTICE makes perfect!

Getting to know yourself

1 Finding 'flow experience'

- Feeling of time stopping
- Skills and challenges align
 - too challenging
 - ex) Presentation in Malay language
 - too easy skills
 - ex) Presentation in Japanese
- Helps find suitable jobs



2 Recognizing strength and weakness

WAY 1

In our group, an assignment from Mrs. Berni, and there we coded skills that we think we have from various examples of skills.


Way2

Thinking about our career or academic paths

Administrative skills			
Planning	Organizing	Identifying	Coaching
Acting	Interpersonal	Supporting	Building
Detail	Emotional	Relief	

Practical skills			
Learning	Creating	Assessing	Overcoming
Editing	Researching	Writing	Learning
Research	Presenting	Reporting	

3 Taking personality tests



- Insights into personality types
- Career suggestions
- Don't rely too heavily
- Tools for self-discovery
- Everyone is unique
- Starting point, not final answer


1 Mindset

Why it is important

- develop growth mindset,
- feel happy
- reduce stress



2 Mindset



Situation: I made mistakes at work

Fixed mindset: Oh no, this proves I am not good at this. I might change my job.

Growth mindset: I have a good opportunity to grow. I learnt from my mistakes.

3 Mindset

Fixed mindset : tend to think about **natural ability**



Growth mindset : **I can do it!**



Action plan to achieve well being in the studies

Well being	Getting to know yourself	Growth mindset
set clear goals	Ask from your close friends and family	get to know your present status of mind
create a study schedule	take a personality test	set realistic goals about growth
get balance diet, enough sleep and adequate breaks	keep a daily records on your feelings, experiences and dreams.	do not give up on failures.
connect with your friends	Reading books, watching films	learn new concepts, skills, activities
learn what you actually want to learn	self assessment of your strengths and weaknesses	use the word "yet"

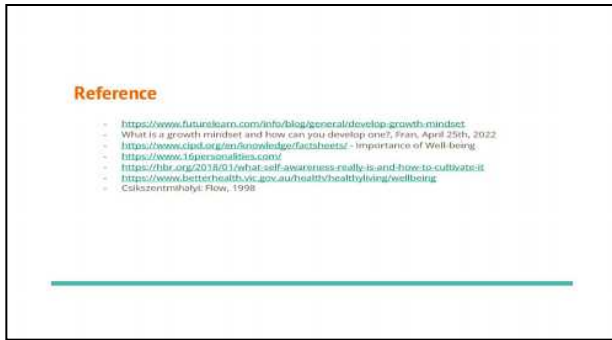
Conclusion

Well-being - physical mental and emotional satisfaction for a person. Try to find a job that you make happy.

Get to know yourself - become independent and become a expert any work field.

Growth mindset - learn new things and enhance skills for your future career.



Participants' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

■ In our group, we talked about how to achieve well-being in our daily lives. We chose this topic because we realize how negative the effects of the lack of well-being in our lives can be. For example, a lack of well-being can lead to stress, anxiety and even depression. Therefore, we want to highlight the importance of well-being in our lives. First of all, what

is actually well-being? It refers to a state of overall health, happiness, and contentment in various aspects of life, including physical, mental, emotional, and social well-being. In our opinion, well-being means a good state of your own life in all aspects. Mental health and physical health influence each other in well-being. If one of them is missing, we will lose it. We also presented about the 3 types of well-being which are the pleasant life, the life of engagement and the meaningful life. Next, we also talked about the importance and the ways to get to know ourselves better. Some of the ways to get to know ourselves better are by finding “flow experience,” recognizing our strength and weakness and lastly by doing a personality test. The last is regarding growing mindset. Growth mindset is important for us to reduce stress and motivates us to keep going. As a conclusion, - Well-being: physical, mental, and emotional situation for a person to find a job that is in our niche area and we are happy with it, - Get to know yourself: Become independent and use our strength within our field, - Growth mind: Learn things and enhance skills for our future career.

- Firstly, I learned that English is an essential tool in our daily life to achieve an international scale of dreams and goals. English is an important tool used to convey our opinions and messages, plus having conversations with more foreign people. Next, I learned why well-being is important for us, and having to know ourselves better means we are exploiting our potential and we will be able to tackle any difficulties later. Next is having a growth mindset which helps us to keep our spirits up and never to give up. Other than the other insights, I learned from the other work group are to have the skills to negotiate and speak up on our opinions. Other than this is to always be prepared for anything we might not expect in our lives. Next, I learned about diplomacy and its type. Lastly is to be brave in speaking a new language. I believe these skills are necessary for us to share our future careers. I shall use these skills learned from the seminar in my daily life. I hope that by doing so, I shall shape my personality into becoming a more resilient person and shall never be afraid to take risks. I believe that these are important for me to achieve my future career. And, of course, I believe that practice makes perfect.
- I was in charge of the session of recognizing our strength and weakness. And I understand how important for us to know them for our future career. I will try to find my strength and weakness to be well-prepared for my future career. As to my future goals, I want to be a researcher at a Japanese cosmetic company. Throughout the seminar, I come to have one specific dream as a cosmetic researcher. That is to promote Japanese cosmetic technology in a world-wide scale.
- Regarding my action plan for my future career, firstly I will do personality tests. I worked on the tests as assignments before the seminar. I will do the tests to know my strength, weakness and so on so that we will be able to know ourselves and analyze ourselves. That will help us to find out suitable jobs.
- I learned the importance of practicing. The lecturer Dr. Kiss repeatedly said that knowing is not enough, practice makes perfect. I have just input information about well-being and have not taken any actions for now. I will take actions and try to do the things what I am interested in and I want to do or have to do from now on. Now I belong to the student association acting on international issues and education. I would like to keep these activities with the members. And then, next year, I want to study abroad. I want to improve my English skills and broaden my horizon. I am also planning to take courses for a teacher’s license at university.
- We did our best at the final presentation. We could give a clear explanation on the topic presenting our own experiences. In discussing with the group members, Dr. Kiss gave us many advices repeatedly to improve our presentation. Having enthusiastic discussion throughout the sessions, finally, we could make a really good presentation. This was a very satisfactory experience for me.
- Knowing is not enough. Practice makes perfect. Even if we have many knowledges, we cannot make any perfect result without practice.
- My action plan to develop my future career is to find occupations suitable for me. Through the seminar, I could learn myself more deeply than before. I would like to find jobs that I want to do and suitable for me. Identifying my characteristic and strength was fun. I believe that English is my strength and I would like to practice speaking English more.
- I learned so many new things and manage to discover my strengths and weakness, which is very important for me to use in the future in order to achieve my career path.

分科会 F



Don't be Afraid to Communicate in a Second Language!

Takayuki KIMURA, Ph.D.

Assistant Professor, School of International Studies,
Utsunomiya University

Profile:

Takayuki Kimura is an Assistant Professor of Linguistics and Second Language Research at Utsunomiya University. He conducts research on the acquisition of second languages, with a particular focus on the grammatical properties that pose challenges to learners. He has presented his findings at more than twenty international conferences to date and is currently engaged in research collaborations with faculty members from universities in the United Kingdom, China, and the United States.

Information

1. Career Path and Research Topics

I currently teach introductory courses in linguistics, applied linguistics (such as first/second language acquisition), and academic English writing at Utsunomiya University. Before joining Utsunomiya University as an Assistant Professor, I served as a post-doctoral researcher at the University of Tokyo. Additionally, I have taught linguistics and English writing courses at Chuo University and Komazawa Women's University.

My research has primarily centered around two key questions: i) how do learners develop their grammatical knowledge in a second language? and ii) which properties pose challenges in second language acquisition? Through my investigations, I have uncovered that certain grammatical properties in a second language prove to be exceedingly difficult for even advanced learners to acquire. Additionally, I have made notable discoveries indicating that second language learners are capable of developing their grammatical knowledge in a second language, even in the absence of explicit instruction on the relevant properties.

In my recent projects, I have been primarily focusing on studying the sensitivity of Japanese, Chinese, and Thai learners of English to verbal inflection errors, such as the 3rd person singular "-s" and past tense "-ed" through reading-time experiments. Additionally, I am collaborating with a professor and graduate students from the University of Tokyo, analyzing production data obtained from a Japanese child who studied English in the United States under natural exposure conditions. Moreover, I have embarked on a collaborative project called "Semi-Artificial Language Acquisition" with professors from the University of Cambridge and Chuo University. Through these diverse projects, my aim is to gain insights into the nature of second language development and explore its limits.

2. Main Topics for the Group Work Session

The purpose of this session is to help you overcome psychological barriers to communicating in a second language. We will accomplish this through discussions on second language learning. It is important to recognize that many people around the world speak English as a second language, just like us. Consequently, they also face challenges in learning English. Throughout this session, students will explore both the positive and negative aspects of second language learning. By participating in discussions and activities, students will have the opportunity to reflect on the topic based on the lecture and their own experiences, engaging in English communication. Our aim is for participants



to develop increased confidence and comfort in actively communicating in a second language by the end of this workshop.

3. Keywords

- Second Language
- Communication
- Language Learning

4. References

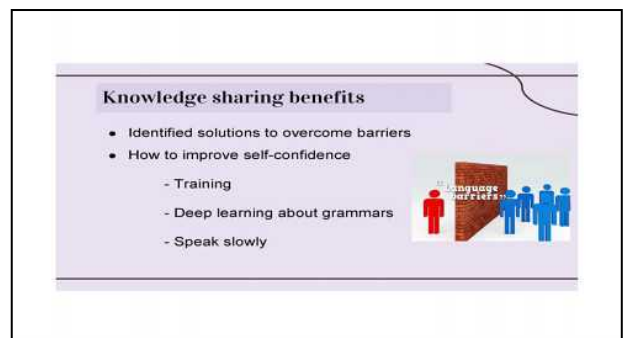
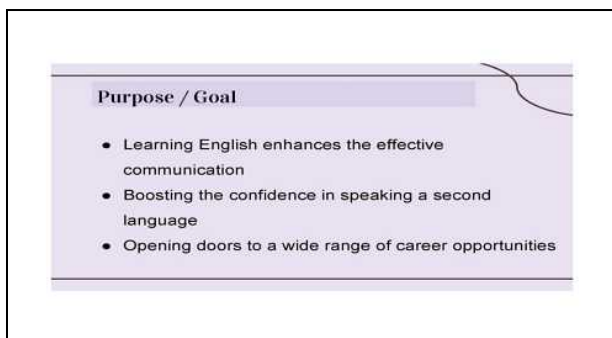
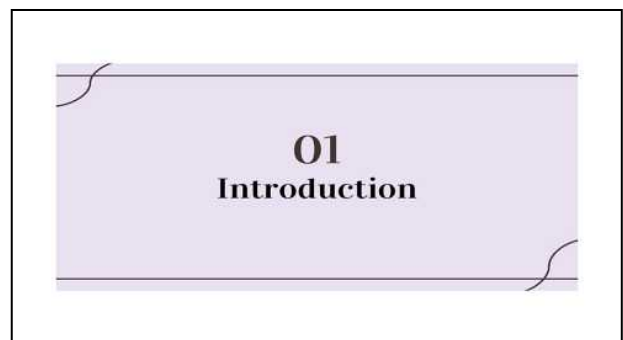
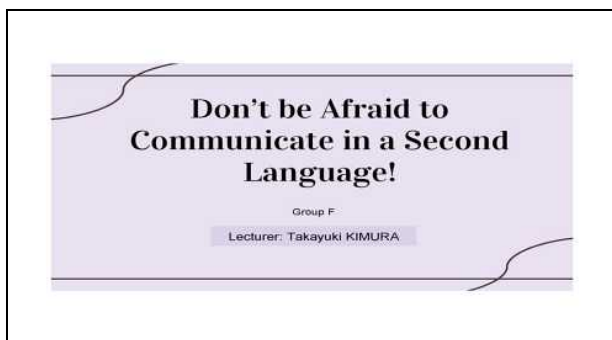
若林茂則（編）. 2004. 『英語習得の常識・非常識』. 大修館書店.
Lightbown, P. & Spada, N. 2013. *How Languages are Learned*. Oxford University Press.

5. Reading Assignment for the Participants

- website
<https://www.sk.com.br/sk-krash-english.html>
- video
<https://www.youtube.com/watch?v=G2XBikHW954>
- articles (in Japanese)
https://atomi.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=3605&item_no=1&attribute_id=21&file_no=1
<https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/3799/GIK004102.pdf>




Final Presentation by Participants



Why do we think it's important?


- Understanding the way to express your opinion in English is important in a globalizing world.



02 Background

What we learned from the lecture

- Fact
 - Many English speakers use English as an L2. L2: second language
 - You are not the only person who is afraid of speaking an L2!!
- What is difficult for L2 learners
 - 3rd person singular present tense (e.g., Tom plays tennis.)
 - Past tense -ed (e.g., Tom played tennis.)
 - Word order (e.g., SVO, SVOC)
 - Acquisition of sounds, and so on (e.g., /r/ and /l/)



Intermediate- and advanced-level English learners who speak French or Chinese as their first language frequently omit *-s* and *-ed*.

	3ps (-s)	regular past (-ed)
English (native)	100%	100%
French (learner)	60%	50%
Chinese (learner)	30.9%	48%

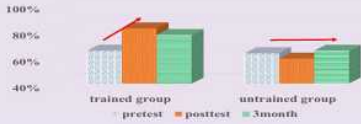
(adopted from White, 2008)

03 Main Idea

Suggestion and Action Plans

- 01 Learning Basics of English
- 02 Training
- 03 Making more opportunities to output English

The effect of training
Listening accuracy for /l/ and /r/ sounds



(adopted from Flege et al., 1995)

Let's go into the environment to use English!

- Part-time-job
- Communities using English
- Volunteers using English



04 Conclusion Final Remark

CONCLUSION

Be Confident + Practice

↓

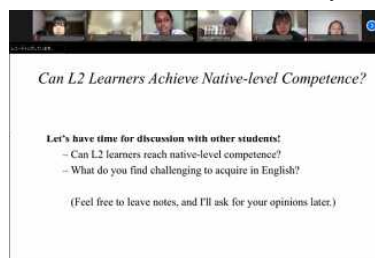
"Opening doors to a wide range of career opportunities"



Participants' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- My closest goal is studying in Germany to study environmental issues and to study English and Germany next year. To prepare for my future career, I will communicate with foreign people in English and in German there. I will also take classes that I am interested in and what I am curious about. After studying abroad, I hope I will have good command of English and German like my mother tongue. I believe that this experience will broaden options of my future career.
- I learned a lot of things in this seminar. In my group, there were a lot of foreign students. To be honest, I was anxious in communicating with them as their intonation and pronunciation of English was not so familiar with that I've already known. However, managing to have communication with them, we could gradually exchange ideas and thoughts with them. I came to be confident with my English. Furthermore, we could learn their cultures, their education system, way of thinking and so on. And vice versa. We could gain the mutual understanding throughout the sessions.
- As to my action plan, I have not decided it clearly yet. However, in communicating with the group members, I realized that the amount of my English vocabularies is not enough. I am afraid of speaking English. That is because I cannot understand partly what they are talking due to lack of vocabulary. Now I will work hard to gain as many vocabularies as I can.
- I learned having confidence is very important for L2 learners. Of course, it is difficult for me to use English fluently. However, I learned that even if my English is poor, having confidence helps me with communicating in English. In addition, I learned not only Japanese but also other countries' people have difficulties in speaking English. Though I feel hard to improve my English skills, that is general for L2 learners. This fact boosts me. My action plan is not to hesitate to communicate in English and to seek opportunities to output English. Fortunately, I have some chances to talk with foreign people in English in my part time job. This will be a good opportunity for me to get rid of my fear of using English and of making mistakes in English.
- I learned about the importance of communicating with people actively. I also learned that I don't have to be afraid of communication in a second language. Before having this seminar, I did not want to speak out my opinion in front of many people as I did not have confidence with my command of English grammar, pronunciation and so on. However, I could learn that the most important thing in communication is to try and strong will in communicating in a second language without hesitation.
- Before joining this seminar, I was worried about my English skills. However, at the end of the seminar, I am more confident to speak English and now I have a positive feeling to study English. Now I can jump into English-speaking environment! Thank you for all engaged with this program.
- I learned a lot about L2 learning from Prof. Kimura. I major in international studies and luckily, we have a lot of opportunities to take classes in English and we can communicate with various foreign students here at Utsunomiya University. Now, I would like to communicate with them in English and in German. In the group sessions, I could realize that many of L2 learners have difficulties in communication. I will try to have confidence with my language skill and would like to enjoy in communicating in a second language.






5. パネルトーク




THEME: Career Development in the Age of Globalization



Panel discussion aims to provide an opportunity for the participants who pursue international careers in the future, to discuss the specific problems and the solutions and to present the achievements through the panelists' career paths and experiences. Panelists were asked to present "3 important keywords" related to the theme and explain the reasons why they were important and gave some career advice to the participants.

MC: **Ana SUEYOSHI** Associate Professor, School of International Studies, Utsunomiya University

<p>PANELIST: Ritter DIAZ Representative Director of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean JAPOLAC)/ Former Ambassador of Panama to Japan</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. FOCUS 2. DEPTH 3. PRESEVERANCE
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ I learned that we need to continue to develop and refine our skills throughout our lives. Focus on the things what we have to do; our tasks, goals and objectives. Try to deepen our knowledge, dig much information to make right decisions. Have perseverance; don't be afraid of our failures. Failures mean the opportunities for our future growth and learning. 	
<p>PANELIST: Takeshi KOMINO General Secretary of CWS Japan</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. Ownership 2. Empathy 3. Partnership
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Life is a journey without any preplanned map. The skills of ownership, empathy and partnership will guide us the journey of our career. ■ All the problems are our problems. Feeling ownership leads to a potential solution in the field of humanitarian aids. ■ Empathy leads to having a vision and coming up with a solution. ■ Emphasizing partnership is a critical skill in building relationship. 	
<p>PANELIST: Sugit ARJON Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. Communication 2. Negotiation 3. Network
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Communication skills are very important for us to grow up and build our future career. Public speaking skills are important, make you confident, and empower you to present your ideas clearly in the international field. ■ Negotiation skills will lead you to solve conflicts. ■ Communication skills + Negotiation skills = Net-working skills. That will grow our professional network. ■ I learned that the negotiation skills are important in a place like NGO, where people having different backgrounds come together. Communication skills and negotiation skills were essential for building up good relationships and working with other people, so I want to develop these skills by speaking in public and to build my confidence. 	

<p>PANELIST: Ilju KIM Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. Boundaryless Careers 2. Careers as Stories 3. Kaleidoscope Careers
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ In Japan, we still experience gender discrimination when it comes to career decision. I came to think what we can do to create a society where people do not have any discrimination from the keyword “boundaryless careers.” ■ “I want you to be a protagonist who writes your own career stories or not being afraid of crossing barriers, borders and boundaries. I want you to be flexible enough to change your focuses depending on situations.” This final message was very encouraging for me to think about my future career. 	
<p>PANELIST: Bernadett KISS Lecturer, Lund University, Sweden</p>	<ol style="list-style-type: none"> 4. SUSTAINABILITY 5. TRANSFORMATION 6. REFLEXIVITY
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Sustainability – to ensure that the future generations get the best from past generations. ■ Transformation – to develop, and in order to do that, the skills are needed. ■ Reflexibility – to change or develop something is to reflex on what we had done. 	
<p>PANELIST: Takayuki KIMURA Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. English as a Second Language 2. Confidence 3. Motivation
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ To be able to speak English as a second language is the first step to move into an international career world. However, it might be difficult to people whose native languages are Japanese, Korean or Russian, due to the lacking of some words and the different pronunciation between their native language and English. Therefore, confidence and motivation are the components that someone needs to excel in using English as a second language. 	

🌐 Participants' Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- The panel discussion was a highlight of the seminar, offering diverse perspectives and in-depth insights on the topic at hand. The selection of panelists was commendable, representing a range of expertise and experience.
- This is the session I like the most overall throughout this seminar. All the talks from professors were indeed eye-opening.
- I learned new things that I didn't know before. It will help me think about my career.
- It was a good opportunity to get information about many kinds of topics from the lectures.
- It was great to be able to gain knowledge about each lecturer's specialty.
- Through panel talks, I was able to listen to lecturers from various fields and learn more about career building.
- Such a great work. It was brought together a diverse group of experts who shared their wisdom & experiences. Thank you to everyone!
- Hearing and learning new things from experienced teachers are an extremely valuable moment for me and I appreciate it very much.

1. 修了者名簿

国際キャリア教育

	氏名	大学等	学年
1	相原 光	宇都宮大学国際学部	1
2	五十嵐 桃子	宇都宮大学国際学部	1
3	泉田 佳乃	宇都宮大学国際学部	2
4	伊藤 綾音	宇都宮大学国際学部	2
5	伊藤 大翔	宇都宮大学国際学部	1
6	伊藤 翼	宇都宮大学国際学部	2
7	伊藤 美咲	宇都宮大学国際学部	2
8	岩上 彩葉	宇都宮大学国際学部	1
9	氏家 沙絵	宇都宮大学国際学部	1
10	大島 優人	宇都宮大学共同教育学部	4
11	大濱 颯吾	宇都宮大学国際学部	3
12	尾崎 美空	宇都宮大学国際学部	2
13	小野澤 彩乃	宇都宮大学国際学部	2
14	小尾 胡桃	宇都宮大学国際学部	1
15	柏 琴葉	宇都宮大学国際学部	1
16	柏木 嘉美	宇都宮大学国際学部	3
17	加藤 愛梨	宇都宮大学国際学部	1
18	狩野 日那	宇都宮大学国際学部	1
19	亀井 あかり	宇都宮大学国際学部	1
20	辛島 莉々子	宇都宮大学国際学部	1
21	河村 京香	宇都宮大学国際学部	2
22	岸 瑞歩	宇都宮大学国際学部	2
23	葛野 美明	宇都宮大学国際学部	3
24	工藤 侑華子	宇都宮大学国際学部	1
25	栗原 章剛	宇都宮大学国際学部	1
26	佐藤 彩加	宇都宮大学国際学部	1
27	佐藤 泰地	宇都宮大学国際学部	2
28	佐藤 俊晃	宇都宮大学国際学部	1
29	佐藤 百夏	宇都宮大学国際学部	1
30	柴田 のぞみ	宇都宮大学国際学部	1
31	柴沼 明音	宇都宮大学国際学部	2
32	清水 桜花	宇都宮大学国際学部	1
33	清水 淳司	宇都宮大学国際学部	2
34	鈴木 桜花	宇都宮大学国際学部	2
35	鈴木 瑠莉	宇都宮大学国際学部	3

	氏名	大学等	学年
36	瀬川 ひかり	宇都宮大学国際学部	2
37	瀬崎 真奈	宇都宮大学国際学部	2
38	舘野 紗弥	宇都宮大学国際学部	1
39	田平 奈津美	宇都宮大学国際学部	3
40	千田 梨緒奈	宇都宮大学国際学部	2
41	堤 大愛	宇都宮大学国際学部	3
42	手塚 麻結	宇都宮大学国際学部	2
43	永沼 千波	宇都宮大学国際学部	1
44	梨田 里羽	宇都宮大学国際学部	3
45	成田 彩華	宇都宮大学国際学部	2
46	野口 来望	宇都宮大学国際学部	1
47	羽生 芽以	宇都宮大学国際学部	1
48	濱本 萌	宇都宮大学国際学部	3
49	原 美月	宇都宮大学国際学部	2
50	日野 琉唯南	宇都宮大学国際学部	2
51	福田 鮎夢	宇都宮大学国際学部	4
52	古谷 綱己	宇都宮大学国際学部	1
53	本間 そら	宇都宮大学国際学部	3
54	益子 佳大	宇都宮大学国際学部	1
55	松田 航輔	宇都宮大学国際学部	2
56	守岡 菜ずな	宇都宮大学国際学部	2
57	脇島 栄斗	宇都宮大学国際学部	1
58	綿引 和葉	宇都宮大学国際学部	2
59	蓮井 菜乃花	茨城県立水戸第二高等学校	3

修了者内訳		合計 59 名
宇都宮大学		58 名
高校生		1 名

International Career Seminar

	氏名	大学等	学年
1	AINUL RADHIAH BINTI YUSOF	宇都宮大学国際学部	1
2	岡田 瑠樹	宇都宮大学農学部	2
3	岡元 沙羅	宇都宮大学国際学部	2
4	尾崎 絵理子	宇都宮大学国際学部	3
5	小野 萌華	宇都宮大学国際学部	1
6	春日 明大	宇都宮大学国際学部	2
7	川本 芽生	宇都宮大学国際学部	1
8	菊地 皐良	宇都宮大学国際学部	2
9	岸 瑞歩	宇都宮大学国際学部	2
10	黒川 碧	宇都宮大学国際学部	1
11	見目 莉里佳	宇都宮大学農学部	2
12	國分 華奈	宇都宮大学国際学部	4
13	後藤 捺美	宇都宮大学国際学部	2
14	小向 ふうか	宇都宮大学国際学部	2
15	佐藤 望羽	宇都宮大学国際学部	2
16	志賀 英恵	宇都宮大学国際学部	2
17	清水 淳司	宇都宮大学国際学部	2
18	徐 英姿	宇都宮大学国際学部	2
19	JOY MD SABBIR HASAN	宇都宮大学国際学部	研究生
20	末澤 登湧	宇都宮大学国際学部	4
21	鈴木 望夢	宇都宮大学国際学部	2
22	鈴木 瑠莉	宇都宮大学国際学部	3
23	田口 太陽	宇都宮大学国際学部	2
24	立花 ひまる	宇都宮大学国際学部	2
25	弦巻 百華	宇都宮大学国際学部	2
26	鄭 奕涵	宇都宮大学国際学部	2
27	飛田 遥	宇都宮大学国際学部	2
28	戸松 優晟	宇都宮大学国際学部	1
29	苔米地 美空	宇都宮大学国際学部	2
30	中澤 早苗	宇都宮大学国際学部	2
31	長塚 陽菜乃	宇都宮大学国際学部	1
32	布川 太志	宇都宮大学工学部	1
33	HANIN NABILA BINTI ALI BADRON	宇都宮大学国際学部	3
34	濱本 萌	宇都宮大学国際学部	3
35	原 美月	宇都宮大学国際学部	2
36	馮 徳民	宇都宮大学国際学部	3
37	福田 鮎夢	宇都宮大学国際学部	4
38	古澤 菜摘	宇都宮大学国際学部	3
39	前川 奈々	宇都宮大学国際学部	4
40	溝渕 悠乃	宇都宮大学国際学部	3

	氏名	大学等	学年
41	三好 紗矢	宇都宮大学国際学部	1
42	宗方 すずな	宇都宮大学国際学部	3
43	山本 愛果	宇都宮大学国際学部	2
44	山本 純歌	宇都宮大学国際学部	2
45	横井 春香	宇都宮大学国際学部	2
46	吉池 百合	宇都宮大学国際学部	2
47	王 繹傑	宇都宮大学国際学部	3
48	海老原 聖哉フィロ	茨城県立石岡第二高等学校	
49	BENJAPORN WANTANASUKSAN	タマサート大学(タイ)	
50	BUN SREYROTH	王立プノンペン大学(カンボジア)	
51	HAI LONGTHAI	王立プノンペン大学(カンボジア)	
52	HONG SEAKMEY	王立プノンペン大学(カンボジア)	
53	HASHINI MADUWANTHI	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
54	GANGULI RAJAKARUNA	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
55	PIYUMALI RATHNAYAKA	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
56	BIMASHA UPALIRATHNA	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
57	ERANDI WARAWATHTHA	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
58	THARUSHIKA BANDARA	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
59	SITI HAJAR BINTI MOHD TAUFIK	サラワク大学(マレーシア)	
60	MELISSA KHONG XIA YI	サラワク大学(マレーシア)	
61	SHERENA AYU SAFIQA BINTI MOHD RAZIP	サラワク大学(マレーシア)	
62	DARREN MANGGIE ANAK DONNY	サラワク大学(マレーシア)	
63	SARAH ANNE JAYARAJAN	サラワク大学(マレーシア)	
64	SHARIFAH NATASHA BINTI MOHAMED	サラワク大学(マレーシア)	

修了者内訳	合計 64名
宇都宮大学	47名
高校生	1名
タマサート大学(タイ)	1名
王立プノンペン大学(カンボジア)	3名
ペラデニヤ大学(スリランカ)	6名
サラワク大学(マレーシア)	6名

2. 参加者全体コメント

国際キャリア教育

参加の感想（コメントは原文のまま記載しています。）

- 異文化を理解すると同時に、自文化も理解しなければならないということに新たな気づきを得た。自文化を理解することで、他文化との違いや共通点について明確に示すことができると学んだので、まずは自分自身が当たり前と思っている価値観や行動をもう一度よく振り返り理解を深めたいと思った。
- 様々な考えを持つ参加者と意見を交わし、自分自身のキャリア形成の糧となる学びを得ることができた。事前学習に取り組んだ後3日間のセミナーに参加したことで、より深く自分自身と向き合いながら将来のキャリアについて考える時間を持つことができ、良い機会となった。
- 国際関係学を学びたいという思いで国際学部に入り勉学に励んできたが、未だ将来の夢が定まらず不安に思っていた。早く決めなければという焦りの中でこのセミナーに参加した。分科会講師の先生のお話から、自分がどうして夢を決めることができないのかが分かった。加えて、自分をもっと幸福にすることを考えてみてはという講師の先生のお話にはっとさせられた。今回のセミナーに、進路に迷っていた大学2年の今に参加することができて本当に良かったと思う。後悔のない未来を築くことができるよう、今回の学びを忘れずに歩んで行きたい。
- 記者になるという将来の夢のために、自分の大学での道筋を見直してみようという思いでセミナーに参加したが、予想していたよりも大きな成果が得られたと思う。ただ、夢を叶えるだけではなく、人生において大切な思考の方法について多くの学びを得た。
- 先生方の仕事や人生における考えについて、プロジェクトや研究に関連してのお話から知ることができた。時々の小さな行動や思いのすべてが人生を形作っているのだと感じた。また、グループワークの中で、自分自身が気づいていなかった長所について気づくことができた。
- 講義を聴くだけでなく、参加者と意見交換する場面が多くあり、新しい気づきや学びの多い3日間だった。国際的に活躍していくには、どんなことが必要なのか、今からできることは何かについてじっくりと考えることができる貴重な機会となった。
- グローバルに活躍するために、日ごろから社会問題について興味を持ちニュースや論文から見聞きして「知る」ことが必要である。それと同時に、英語をはじめとする言語の習得にも力を入れ、実践的に活躍する準備をする。また、内面的には、「主体的」に活動していくこと、そして、一つのものごとを多方面から捉えそれぞれの立場から考える習慣を身につけることが必要であると考えた。様々な問題を知り、今の自分にできる小さなことから取り組み、活躍の場を広げていきたい。
- 講師の先生方の講義から、国際的な社会問題の現状や概要、更に課題に対して向き合い解決法を探るためにはどのようなアプローチ法が重要となってくるかまで学ぶことができた。実際に社会に対するアプローチ方法を考え、多くの人とディスカッションを重ねることで、国際的な広い範囲での社会問題についての知識やどのように向かいあうべきかを考えることができた。
- 各分科会発表での提言を聞き、私は行動力が欠けているように感じた。自分が将来の自分のために何をしなければならぬのか、大まかには把握しているものの、具体的には何から始めれば良いのかわかっていなかったように思う。しかし、今回のプログラムを通して、「小さな行動でも長い目で見ると習慣化し大きなものを得る」ことや、自分の思考を「何に向けるか」を重要視するだけで少しずつ理想とする自分に近づいていくのだと学ぶことができた。したがって、今後は「スモールスタート」を大切に自分の行動力の向上につなげていきたいと思った。
- 国際協力の仕事において、社会問題の解決に向けた取り組みの中では、原因や背景、解決策を考える際にそれらの構成要素について「他に関連することは何か」というように更に派生させていくことが重要であることを学んだ。この考え方を応用することで、潜んでいた問題等が明確になるだけでなく問題の一部に限らず全体を包括した解決策を考えることができる。自分が将来的に異なる文化背景を持つ人と交流する際も何かしらのトラブルに直面する可能性がある。その際、その場の解決策に留まらずトラブルの根本的な部分を明確にする考え方をすることにより、相手とより良いコミュニケーションが可能に

なると考えた。

- 私は以前から国際学部の専門性について悩んでいた。外国で活躍するにあたり我々は語学力や外国の知識といったアドバンテージしか持っておらず他の農業や工業の知識・技術を持った人の方が必要とされるのではないかと思っていた。しかし、このセミナーを通して、学生同士で意見を交わし、先生方の講義を聞き、前向きに考えられるようになった。今回学んだような他者と協働する能力や、異文化理解について学んでいる自分たちだからこそ、海外に進出した際に、様々なアクターを繋ぐ役割を果たしたり、それぞれの文化や社会背景を尊重したうえで課題にアプローチしたり、現地の人々と関わることができると実感している。
- 自分があまりにも自分自身の未来に対して無責任であったか気づくことができた。「何とかなるだろう」という思考で物ごとに対処してきたが、セミナーに参加し、様々な経験をお持ちの講師の方々のお話を聞き、様々な背景を持った参加者たちと真剣に課題について議論を重ねる中で、そのような思考がいかにも陳腐で幼稚なものであるかに気づかされた。今後は、自分の興味関心に対して、受動的ではなく能動的にあるよう努め、将来のビジョンを築いていきたい。
- 課題を解決するために、多角的にアプローチを考えていくプロセスを踏むということは、どんな仕事でも大切だと学んだ。将来のキャリア形成に向けても、この考え方を基にし、熟考を重ね物事を計画実行していきたい。
- 国際学部の学生として、多文化共生、グローバルなどの用語や、そのことを学ぶ機会が多いが、一度に様々な視点から考えることができたのは非常に良い機会だった。学内の先生だけでなく、世界で活躍されている講師の先生方のキャリアについての教えから、可能性が広いことを改めて実感することができ、有意義な時間であった。
- 将来の目標として多くの人と国境を越えて関わり、それらの人と日本を繋ぐことのできるような(間接的、直接的問わず)職に就きたいと考えていた。セミナーを経て、この目標に加え、より多くの人に幸せを感じてもらえるようになりたいと思った。

International Career Seminar

Participants' Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- I learned how to communicate in English with people from other countries. I was worried about my English skill and felt nervous before. I could feel confidence with my communication skill a little as my English worked well throughout the seminar. In this regard, this seminar gave us a valuable experience.
- Through the activities to speak English, I was able to learn the mindset for learning and speaking English. I used to think that it is very embarrassing to speak as I am not good at it. However, I realized that the most important thing is to try exchanging ideas and thoughts with others. I need to get used to feeling relaxed and speaking English as well.
- I was planning to work in Japan in the future, so I did not think I need to work hard in learning English. However, I realized that English will broaden my career horizon. I would like to continue creating opportunities to use English more regularly.
- I had a wonderful time in this seminar. Especially, I could discuss in English with members having different genders, nationalities, ideas and thoughts. I felt this was real international communication and I felt happy with every single moment of it.
- All the lectures' comments were encouraging me for my future career. Now, I am planning to gain more qualifications for my future career through the seminar. ICS was a great and unforgettable opportunity for me to interact with people from various countries and broaden my horizon.
- I have not decided any concrete goals for my future career yet. However, I hope that by learning and experiencing various things at Utsunomiya University, I can broaden my horizon and expand my options for my future career. During the sessions, I experienced some difficulty in communicating in English when talking with participants from other countries. So, I would like to work hard to improve my English skills.
- What I learned during the seminar is, firstly, the importance of trying to communicate with others. Speaking English was not so hard for me. However, sometimes, even if I spoke with accurate grammar, there were cases where I could not convey what I wanted to express. Then, I found that rather than using proper English, I should try to understand others and communicate with them. That would be significant. Secondly, I would like to apply the lessons and learning from the sessions to my future career.
- My action plans are as follows: 1. Analyze myself more deeply. 2. Make an effort to communicate with other people. I strongly recognized that communication and networking with others are crucial not only for my future career but also for my daily life. Thus, I should keep in mind to have many relationships with others through communication.
- As the lecturers said throughout the seminar, it reminded me that it is very important to challenge, to take chances, and to think about what we can do and what we want to do. I understand that communication skill is not the only aim of this seminar. It is crucial for us to convey our own opinions, to listen to others' opinions, and to think deeply through communication. I want to keep these things in mind for my future career.
- My future goal is to work in Africa. I am planning to work at a Japanese company using English at first, as I see that my future goal is not easy to accomplish. Throughout the seminar, my future goal has not changed. However, I realized that communicating and sharing ideas with others in English is fun for me and I would like to visit as many countries as I can during my college days, and I would like to find my first job after graduation.
- I learned a lot throughout the seminar. First of all, public speaking skill is important for us. By trying to speak in front of people, we can become more confident in ourselves. I also learned that we don't have to be afraid of speaking English. We just have to keep going and take action. That is the most important thing for us to communicate with others.
- Regarding my career development action plan, first of all, I have to analyze myself, figure out my strengths and weaknesses. Then, I have to try to connect my strengths to my future career. I think that building self-confidence is also very important in developing my career. As the lecturer said, I would like to trust myself and step forward for my future career.
- There are three things that I learned in this seminar. The first one is how to encourage others to use English. My group had a lot of Japanese students, so it was very difficult to convey ideas in English to each other, and some students did not want to use English. I encouraged them to convey their own ideas in English. The second one is how to summarize others' opinions. I was in charge of facilitating our group works and throughout the group discussion, I learned the way of making conclusions. Thirdly, I learned about myself to achieve my future goal.
- I learned many things during the seminar, especially the importance of having my own ideas and expressing them in my own words. I am not good at it, as I often tend to seek consensus rather than put my own opinions forward. It is not a bad thing, however, when we work with others, it is not always needed. Now, I will not be afraid of expressing my own ideas.
- Regarding the action plan for my future career, firstly, I have to overcome my weaknesses. For example, I want to

become accustomed to having my own idea and speaking it out. Secondly, I need to know what kind of job suits me. To discover this, I will take some personality tests and aptitude tests. Thirdly, I will try to find the job that suits me. I want to complete this within this year to prepare for my job hunting.

- The seminar was held using Zoom. That enabled me to join the seminar easily. I joined Zoom from my room, and we could communicate with members overseas. I want the following seminars to be held in this way. We could interact with members having different backgrounds from various countries, and we had an opportunity to encounter various ways of thinking. In addition, we could use some new apps and internet tools. That was great for me. I want many people to join the following seminar. Thank you very much.
- I am satisfied with all the content in the seminar, and I felt how diverse the topics were. We were able to create new networks with other people to learn more about what the other groups' topics were.
- On the first day, I wrote down that I wanted to be a better version of myself. This idea still remains, but now I am able to see my career path more clearly. I want to be an ambassador; therefore, I shall polish my communication skills and try to be more confident, plus practice listening to others' opinions, too.
- I learned some important things from the presenters' introductions. I noticed that a career is a journey. Our career paths will not be limited to one direction.
- This seminar gave me a good opportunity to think about my future career. Throughout the work group sessions, we had plenty of time to speak English. This helped me to develop my speaking skills. Getting out of my comfort zone – this was a very encouraging message for me. I will keep this message in mind for my future.
- On the first day of the seminar, I was just worried about my future goal. That was because I thought I had to find one definite future job right now. However, throughout the seminar, I came to think that I don't have to worry about my future goal. I have to think about myself, and I just have to seek what I am interested in and what I am curious about step by step. In this sense, I could feel that my future goal is widely spreading and infinite. My future goal is to work at international institutions or companies. Now, I am curious about fields like child interaction, nature psychology, and so on. To clarify a specific field for my future career, I would like to participate in internships at NGOs and some companies. I also want to study abroad to improve my English skills.
- I'm satisfied with this seminar as it more or less helps me achieve my career goals and gives me exposure to what to prepare for before entering the career world.
- I really appreciate the hard work from all professors and Utsunomiya University staff. I hope to see the seminar happen every year, as it will provide more opportunities for students to learn and to build their knowledge, confidence, and understanding.
- This program opened my eyes to the potential career opportunities I can apply for. Furthermore, it allowed me to communicate with other non-native English speakers from various cultural backgrounds, as well as with different accents and pronunciations of English. This helped me understand English more broadly.
- Actually, this program was a great opportunity for me. I learned a lot from everyone. I was able to improve my English speaking as well as public speaking skills. All the members were so kind, and they communicated openly. Also, all the professors and student staff members gave us valuable guidance. Thank you so much for the three days. Finally, I would like to say that ICS was such a great opportunity for all the students from different countries.

国際キャリア実習

1. 令和5年度夏期「国際キャリア実習」実施要項

1. 趣旨・目的

- ① 趣旨： 本実習は、グローバルマインドを養う「グローバル人材」の育成のために行われる国際学部の「国際キャリア教育プログラム」の一環として行われるものです。「国際キャリア教育プログラム」では「国際ビジネス」、「国際協力・国際貢献」、「多文化共生と日本」、「異文化理解・コミュニケーション」の4つのテーマを掲げていますが、本実習では、特に「国際協力・国際貢献」や「異文化理解・コミュニケーション」の分野で活躍することを目指して、海外のNGOや公的機関でインターンとして実習経験を積み、実務能力を高めます。
- ② 目的： 本実習は、「国際キャリア教育プログラム」の次の3つの目的を達成させるために、現場体験、実習経験を積み、実務能力、企画力とコミュニケーション力を高めます。さらに、自分の関心分野や専門性をより明確にします。
 - 「働くとは何か」について考える。
(Grasp the image of "working in society with motivation.")
 - 自分と地域社会や世界とのつながりを考える。
(Provide opportunities to think about your roles in local and global societies.)
 - 主体的に関わりたい問題や分野を見つけ、今後の学びの動機を考える。
(Find motivation to actively pursue your career.)

2. 実施時期・期間、募集人数

- ① 時期： 2023(令和5)年8月～9月
- ② 期間： 約2～6週間
- ③ 実習時間： 80時間以上(実習先による)
- ④ 実習日： 原則、土日を除く実質10日間(1日8時間)。なお、実習先の活動状況により、土日も勤務する場合がある。
- ⑤ 募集人数： 若干名

3. 実習先団体

- ① 実習先団体は、南アジア、東南アジアおよびアフリカで国際協力活動を実施している政府機関やNGO。詳細は、「別紙」の受入団体一覧を参照のこと。
- ② 実習先団体に追加・変更・中止が生じた場合は、国際学部「国際キャリア教育プログラム」のHP(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/activity/index.html>)等で通知する。
- ③ 実習内容は、場合によっては、変更されることがあるので、事前に実習先に確認すること。
- ④ 実習先団体のやむを得ない事情、または実習国の政治・治安情勢の悪化や大規模な自然災害の勃発、感染症の発生等により、実習国の変更、または実習を中止し、緊急に帰国する事がある。

4. 応募および参加の条件

- ① 応募の時点で次の全ての条件を満たしていること。
 - 国際学部の2年生から4年生(実施期間に休学中の者は除く)であること。

- 心身ともに健康である者。(本学所定の健康診断を受診していること。受診していない場合は、病院等で受診(有料)し、応募時に健康診断書(有料)を必ず提出すること)
 - 法定の予防接種(三種混合・結核・ポリオ・風疹・麻疹・日本脳炎など)を受けていること(不明な場合は「母子手帳」を持参して保健管理センター等で確認すること)。
 - 本学指定の「学生教育研究災害傷害保険(学研災)」、「学研災付帯賠償責任保険(学研賠)」及び、「学研災付帯課外留学保険(付帯海学)」に加入していること。
 - 実習先団体が求める語学力を有していること。
 - 参加動機および実習目的が明確であること。
 - 本「実習」への参加について、保護者または家族から事前了解が確実に得られていること。
 - 本「実習」実施国への渡航が可能であること(外務省の「海外危険情報」および「感染症危険情報」が「レベル1」以下であること)。
- ② 実習前までに次の全ての条件を満たしていること。
- 保健管理センターで健康に関する面談を受けていること。
 - 国際学部及び全学で実施するオリエンテーションや事前研修(ビジネス・マナーおよび危機管理)に参加していること。
 - 本学指定の「学研災付帯海外留学保険」に加入し、「アイラック安心サポートデスク」の安全確認アプリ『Pro Finder』をダウンロードしていること。
 - 「国際学部同窓会」の会員であること。(本「実習」は、国際学部同窓会から助成金を受けているため、非会員の場合は渡航前に入会すること。但し、同窓会からの助成を希望しない場合はこの限りではない。申請時にその旨申し出ること。)
 - 接種していない法定予防接種がある場合、および実習受入団体が指定する予防接種があれば、出発までに接種(有料)していること。
 - 外務省の「海外危険情報」および「感染症危険情報」が「レベル1」以下であること(これらの「情報」が「レベル2」以上となった場合、実習は「中止」となる)。
- ③ 帰国後に次の全ての条件をみたすこと
- 必要書類(報告書や領収書など)を期日までに提出すること。
 - 報告会での発表(プレゼンテーション)
 - 国際学部同窓会への報告(必要に応じて)

5. 参加費

- ① 自己負担の原則
- 「本「実習」への参加および現地での実習にかかる諸経費は、全額自己負担を原則とする。ただし、国際学部が渡航費の一部を助成金として支援する場合がある(詳細は次項を参照)
- ② 諸経費の内訳(例)：
- 渡航費(往復航空券代、国内交通費、海外旅行傷害保険料、旅券・査証等の取得経費)
 - 国内事前研修費(交通費・宿泊費など ※受入団体による)
 - 現地滞在費(宿泊費・食費・交通費など ※受入団体による)
 - 予防接種代(※実習国による)
 - 実習参加費(※受入団体による)
 - 実習にかかる諸経費(地方視察時の国内交通費など ※受入団体による)
- ③ 留意点
- 参加費の大半を占めると思われる渡航費の中でも、往復航空券代は、利用する航空会社や航空券の種別、購入時期によって大きく変動する。

- 現地滞在費についても、受入団体の事情によって、宿泊先（一般のホテル、受入先団体の宿泊施設、現地スタッフ宅でのホームステイなど）が異なるため、宿泊費や食費も大きく変動する。
- 受入団体によっては、現地でのインターンシップ参加にあたって、参加費の支払いや日本国内での事前研修が求められる場合がある。
- 日本国内または渡航先のコロナ禍の状況、あるいは、現地の治安状況や自然災害などの影響によって、実習が急きょ中止になる場合や、実習中の状況の変化により、実習を中止して、大学から緊急帰国が要請される場合がある。

6. 国際学部からの渡航費補助への申請

- ① 渡航費補助について
 - 渡航費補助の支給額は、本「実習」の海外インターンシップに参加するための往復航空賃、空港税、空港施設使用料、旅客保安サービス料、燃油付加運賃及び発券手数料に相当する額の8割を上限として決定する。ただし、予算の都合上、10万円を上限とする場合もある。
 - 往復航空賃は、日本国内の最寄りの国際空港から、実習先の最寄りの国際空港間の最も経済的かつ常識的な経路によるエコノミー・クラスの割引または格安航空券代とする。
 - 渡航費補助は、実習を終了し帰国した後、航空券代等の内訳が明記された領収書（原本）の提出後から、1～2ヶ月後に大学から各自の個人口座に振り込まれる。
- ② 申請の手続き
 - 「国際キャリア実習」の応募書類の提出をもって、渡航費補助の申請に代える。
 - 最終審査に合格した時点で、渡航費補助の支給資格が得られる。
- ③ 支給の要件
渡航費補助の支給を受けるには、次の要件をすべて満たすこと
 - 必要な書類等の期限内の提出や事務手続の迅速な履行
 - 担当教員や受入先団体との事務連絡は迅速に行うこと（特にメールへの返信）
 - ただし緊急時を除き、連絡は電子メールで行うこと（LINEなどのSNSは使用しない）
 - 事前研修の参加（詳細は後日案内）
 - 保健管理センターでの面談（母子手帳持参）
 - 実習先到着時、実習開始1週間後、帰国時には担当教員に連絡すること
 - 「実習日報」および「報告書」の提出（帰国後2週間以内）
- ④ 「とちぎグローバル人材育成プログラム」について
「大学コンソーシアムとちぎ」が実施する「とちぎグローバル人材育成プログラム」（基礎コース）に応募し、支援金の支給が決定した場合には、国際学部からの渡航費補助を受給することはできない。

7. 単位認定

- ① 現地での80時間以上の実習を終了し、単位認定に必要な書類（報告書、実習日報等）を全て提出した学生は、担当教員の成績評価に応じて「国際キャリア実習」の2単位が認定される。
- ② 単位認定に必要な実習時間数（80時間以上）を満たすように実習計画を立てること。
- ③ すでに「国際キャリア実習」を履修済みの学生は、再履修となり過去の成績は抹消される。

8. 応募方法

以下の応募書類を提出期限までに国際学部事務室に提出すること。

- 参加申込書
- 自己紹介・応募動機書（実習希望先団体に資料として提出する場合がある。）
- 健康診断書（今年度実施の本学の健康診断を受診している場合は不要。受診していない場合は、最寄りの病院等で健康診断を受診〔有料〕の上、診断結果を提出すること。）

9. 参加者の選考および決定

① 選考方法

参加者は、書類審査と面接より選考する。なお、応募者が多数で、審査結果が拮抗する場合は、以下の優先基準を適用する。

- 上級生を優先する。
- 「国際キャリア教育セミナー」および「International Career Seminar」の履修済者を優先する。
- その他のグローバル人材育成プログラム「Learning+1」の履修済者を優先する。
- 過去に「国際キャリア実習」または「国際インターンシップ」に参加したことのある者が再度応募する場合、選考結果が同順位の場合、初めての応募者を優先する。

② 一次審査について

- 一次審査（面接）実施日：応募書類提出後に随時実施（日時は個別に応募者に連絡）
- 審査の結果は、応募者本人に、一次審査後の一週間以内に電話又は e-mail で連絡する。
- 実習希望先団体との面接が不要な者は、最終審査の面接を免除する。

③ 実習希望先団体との面接について

- 一次審査合格者のうち、実習希望先団体との面接等が必要な者は、所定の期日までに、実習希望先団体との面接等を受けるものとする（面接等にかかる経費は自己負担とする）。所定の期日までに実習希望先団体の面接等を受けなかった場合は、最終審査対象者としての資格を失う。

④ 最終審査について

- 実習希望先団体との面接を終了した者について、最終審査の面接を実施する。
- 面接免除者も含めた最終審査の結果は、後日、応募者本人に書面で通知する。

10. その他の注意事項

- 参加決定後の自己都合による実習先の変更は、原則として認めない。
- 派遣先での実習前後の個人旅行は認めない。
- 海外渡航時や現地実習時には、危機管理や健康管理に十分留意して、事件や事故との遭遇を極力回避し、感染症を予防する努力を怠らないこと。
- 自己責任において、実習先に作業用パソコンを持参することが望ましい。
- 実習国の治安状況や健康管理に関する情報は、信頼のおける以下のサイトなどを参照しておくこと。
外務省「海外安全ホームページ」<http://www.anzen.mofa.go.jp/>
外務省「海外安全劇場」<http://www.anzen.mofa.go.jp/video/index.html>
厚生労働省検疫所「FORTH：海外で健康に過ごすために」<http://www.forth.go.jp/index.html>

2. 令和5年度夏期受入団体および実習概要一覧

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
1	セワランカ スリランカ最大の現地 NGO の一つ。宇大国際学部実施 JICA 草の根技術協力事業「プランテーション農園の小学校への課外活動支援」プロジェクト (UU-TEA Project) の現地パートナー組織。	スリランカ ハットン	スリランカ ハットン	プロジェクト対象学校でのモニタリングと広報補佐及び日本文化紹介
2	ラ・ウニオン学校 ペルーリマ市にある日系人が設立した小中学校。カリキュラムの中に日本語教育が含まれている。日系人社会の中心となる日秘文化協会と協力し、日本の行事を行う。	ペルー リマ	ペルー リマ	日本語文化部で、日本語教室、文化クラスのアシスタント

3. これまでの受入団体および実習概要一覧

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
1	JICA スリランカ事務所 独立行政法人国際協力機構スリランカ事務所。総合的な政府開発援助 (ODA) の実施機関。	東京都 千代田区	スリランカ コロンボおよび スリランカ国内 事業地	広報を中心とした事務所事務作業補助 (場合によっては地方プロジェクト出張同行)
2	NGO サルボダヤ運動本部 農村村民の自立を目指し、有機農業の振興、母子保健衛生、マイクロクレジット等の活動を先駆的展開するアジア地域でも最も成果を挙げている NGO。	スリランカ モラトゥワ	スリランカ モラトゥワ	本部国際部事務作業補助
3	特定非営利活動法人 ラオスのこども ラオスの子供達の教育環境の向上を願い、日本および現地ラオスで活動を行っている国際協力 NGO (特定非営利活動法人)。	東京都 大田区	ラオス	ラオスのスタッフのアシスタント (セミナー・教材準備、図書室で子どもと遊ぶ)
4	クラタ・ペッパー (KURATA PEPPER Co. Ltd.) 古い歴史があり、ヨーロッパでは最高品質として有名であるカンボジアの胡椒が、内戦により農園は壊滅。その「世界一美味しい胡椒」を復活させようと、産地農家を回り、地元の人々と共に、胡椒農園を広げた胡椒農園経営・胡椒卸販売の民間企業。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	事務作業補助、選別作業、畑研修 ※農業研修は、本人が望めば男性でも女性でも OK。

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
5	特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパン 紛争や災害、貧困などの脅威にさらされている人びとに対して支援活動を行う NGO。	広島県 神石高原町	スリランカ東部州 トリンコマレー県	内戦帰還民地域での復興支援活動補助
6	特定非営利活動法人 かものはしプロジェクト 子どもの人身売買問題の解決に取り組むことから始まった認定 NPO 法人。カンボジアの貧困層の女性を雇用しものづくりを行うコミュニティファクトリーを経営し、現在はライフスキルのトレーニングを主軸ミッションとした活動を行う。	東京 渋谷区	カンボジア シュムリアップ	コミュニティファクトリー（工房）の来客対応、ショップのお手伝い
7	特定非営利活動法人 アーシャニアアジアの農民と歩む会 インドの貧しい農村において、農村の基盤となる「農」を通じて、アジアの農民の自立と持続可能な暮らしを実現し、共に生きるための事業を推進する NPO 法人。	栃木県 那須塩原市	インド・ウッタ ルプラデッシュ (UP) 州アラ ハバード市およ び近郊	農村開発事業(有機農業・教育支援・保健衛生など)の見学・作業体験、人材育成事業(ハンディクラフト縫製・食品加工など)の見学・作業体験、有機農業組合活動(朝市での販売・日本米やキノコの販促など)の見学・作業体験、広報、総務の事務補助等
8	パンニャサストラ大学の日本語・ビジネス研修センター プノンペンにある私立大学の日本語・ビジネス研修センターで、宇都宮大学大学院国際学研究科博士課程を修了したサ・ソチア博士がセンター長。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	日本語教育、日本・カンボジアの文化交流活動のなどのサポート
9	アンコールクッキー株式会社 アンコール・ワット型の手作りクッキーの店。カンボジア人の手による本物のカンボジア土産を作ることを目指して開業して以来、今やカンボジアの定番土産。	カンボジア シュムリアップ	カンボジア シュムリアップ	店舗での接客・販売、商品の企画開発、広報・マーケティング等
10	株式会社パデコ 日本の開発コンサルタント企業として、国際協力機構より業務委託を受け「カンボジア国教員養成大学設立のための基盤構築プロジェクト（第1年次）」（2017年1月～2019年5月）を実施。	東京都 港区	カンボジア プノンペン	小中学校教員養成課程のカリキュラム・教材開発支援プロジェクトの職場体験。調達、広報の手伝い等。
11	公益財団法人国際開発救援財団 発展途上国の子どもたちのために、国際協力、援助事業、緊急援助事業、広報啓発事業を行う公益財団法人。	東京 千代田区	カンボジア プノンペン	小児外科支援、給食支援、農村開発、などのサポートを行う。

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
12	高野山 宿坊櫻池院 高野山にある宿坊寺院の一つで、1100年代に白河天皇代4皇子覚法親王により作られた。	和歌山県 伊都郡	和歌山県 伊都郡	宿坊での接客、部屋の準備、食事の準備等。
13	島キャン (受入れ先ホテル、奄美島) 離島で職業体験をしながら島おこしインターンを行う。	東京都 新宿区	奄美	離島の地域活性化を目的としたホテルでの研修。
14	(株) アースアンドヒューマンコーポレーション JICA 事業を受託するコンサルタント会社。	東京都 町田市	エチオピア アディスアベバ	日本人専門家の補佐的作業
15	特定非営利活動法人 フリッジ エーシア ジャパン 子ども、青年、大人 (父親・母親・お年寄り) といった各世代の人々が共に関わり合いながら主体的に地域の活動に参加し、「地域の伝統・環境の保全」と「地域経済の発展」との両立を実現させる社会の構築実現に向けて取り組んでいる認定 NPO 法人。	東京都 渋谷区	ベトナム フエ	バイオ農家支援、子どもへの環境教育支援
16	カンボジア日本人材開発センター (CJCC) カンボジアにおいて、JICA、日本企業などと協力して、人材育成事業、日本語教育、文化交流事業などを行う。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	文化交流部門でイベントやスタディツアー受け入れなどのサポート
17	台湾原住民族棒球運動発展協会 野球運動を通じた「台湾原住民族」の文化の継承、国民と世界の人々へ「台湾原住民族」の才能の多面性の伝達、並びに、エスニックグループ融合を目標に、主にスポーツを通して「台湾原住民族」の文化の発展・継承及び交流推進を行う組織。	台湾 台北市	台湾 台北市	各種研究会・イベントの参加、及び、聞き取り調査等を行い、台湾文化の歴史認識・理解と、その文化の継承の方法やスポーツと文化の関連性について学ぶ。
18	合同会社シェトラトレーディング (オンライン実習および実地実習) コンゴ民主共和国(DRC) コーヒーの輸入・販売を行う民間企業。	茨城県 取手市	茨城県取手市 および栃木県 宇都宮市	コンゴ民主共和国から輸入のコーヒー豆製品の販路開拓、現地コーヒー農園との連携。

4. 実習生からの報告

実習生 まるやま こうへい
丸山 浩平

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 3年(実習参加時)

実習先： スリランカ セワランカ財団

実習期間： 令和4年4月25日～3月24日

実習目的

スリランカ中央州・ヌワラエリヤ県ハットン・ディコヤ地域紅茶プランテーション農園コミュニティにおける児童および生徒の発育状況を調査する。また、彼らの両親の職業を聞き取る。加えて、農園コミュニティ居住地域を訪れ、フィールド調査を実施する。これらの調査を通じて、当該地域が抱える課題やポジティブな事象を観察し、発展途上地域における現実を知る。



紅茶農園の子どもたち



コミュニティの子どもたちと

実習の成果

【子どもの発育状況および両親の職業調査】 3農園内にて実施し、合計700名近くの児童の身長と体重の測定結果を記録。最終的にこれだけの数の子どもに対して調査ができたこと自体は評価したい。身長については比較的順調な発育が観察できた一方で、それに対して体重が明らかに軽かった。私自身より10センチ近く高い身長でも、私より5キロ以上軽い生徒がいたことには驚かされた。同児童・生徒に両親の職業を聞き取った。往来から離れた農園では未だ農園労働に従事する保護者が多かったものの、母親が中東で出稼ぎしている家庭も多く見受けられた。

【コミュニティ生活環境調査】 3農園内にて実施。1農園内に複数居住地域が存在し、うち4つに訪問した。住宅では家族の人数に対して面積が足りない家庭もあれば、増築して大型犬を飼っている家庭もあった。この他、Child Development Centre と呼ばれる、小学校入学前の児童を預かる施設にも訪問した。職員数や提供する食事、子どもが運動するための敷地など、あらゆる場面で不足が見受けられた。のちにも述べるが、一概に農園や住宅と言っても、それぞれに異なる課題を抱えていることを確認できた点は評価したい。

学んだこと

各農園間および各家庭間でも生活環境や生活の質にギャップがあった。前者について、紅茶プランテーション農園と一括りにすることは簡単だが、その立地などで抱える課題やその深刻度などに違いが生じるようであった。例えば往来からより離れた農園では学校の規模が小さい一方で、地域住民とのつながりが密接であるなどの特徴が見受けられた。この他にも、複数の居住地を持つ農園において居住地間で、屋根などといった住宅設備の質に程度の差が見られた。後者について、同じ農園・居住地でも家庭を構成する人々の職業によって収入に差があり、それは住宅の規模など目に見える形で表れていた。

日本に限りはあくまで資料による情報のみで、「ヌワラエリヤの紅茶プランテーション農園」という括りでしか見られていなかったものが、今回現地の様子を直接観察したことで、上記のようなミクロの視点からの事象を知ることができた。

将来への影響

もとより将来のキャリアにおいて国際協力や途上国支援に関わることをイメージしていた中で今回の実習は、まさに現場を経験する機会となった。そこで必要とされること、それらが今の自分および将来の自分にどれだけできるのかなど、自分に引き付けて測る事ができた。もちろんキャリアのイメージの方向性が変わることはなく、反省点に挙げるように、測った結果感じた自分の不足をこれから如何にして改善・修正していくかに意識を向けたい。また、今回フィールド調査で貧困に苦しむ人々の存在に触れ、彼らのために何かできることはないかといったような将来に向けたモチベーションを得た。

実習生 なかむら はるき 中村 晴季

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 4年(実習参加時)
実習先： スリランカ セワランカ財団
実習期間： 令和5年8月13日～9月2日

実習目的

私は今回の実習で、「ローカル NGO の実際の活動から国際協力について理解を深める」ことをテーマとした。今まで授業の中で、途上国を中心とした様々な国々で脆弱層に向けた開発や支援を、報告書やホームページで目にしてきた。しかし、その多くは、JICA や INGO、UN などのプロジェクトの資本元である大きな組織によって作成されたものであり、大まかな活動内容やその活動の意義、事前調査の情報や成果のデータなどは記載されていても一つ一つの細かい活動の内容などは記載されていなかった。そのことから、国際協力の支援が実際どのように脆弱層の元に届くのか、全くイメージが持てずにいた。また、国際協力における脆弱層に対しても実際に、その生活を見たことがないことから、国際協力そのものに実感が湧かないというのが、一つの課題であった。そのため私は、セワランカがどのような活動を行なってきた、これからどのような活動を行なっていく予定であるのかを学ぶこと、脆弱層とされるスリランカの農園内での暮らしについて知ること、の二つを今回の実習の目標として設定した。



小学校での文化交流



コミュニティ水源に関する聞き取り調査

実習の成果

今回の実習を通して現地ローカル NGO の実際の活動内容と、周辺化された人々の生活の実態に対する理解を大きく深めることができた。私は実習の中で、目標を達成するために、現場を目でみて、実習先の団体の方や、訪問したコミュニティに暮らす住民、学校の先生、エステイトマネージャーからのお話を聞くだけでなく、その中で自分が興味を持った事柄を質問することを意識した。学校やエステイトオフィス、現地のローカル NGO である Navayugam Social Development Foundation を訪問した際は、事前に台本を準備し、インタビューのような形で、学校や住民の生活の実態についてお話を伺った。茶園内のコミュニティを訪問した際は、台本通りのインタビューというより、現場で見聞きしたものに対して、柔軟に聞き込みを行った。実際にコミュニティに行ってみただけでなく、様々な立場の方からお話を伺うことで、スリランカの茶園プランテーションに暮らす人々の実態を、把握することができた。また、実習の活動時間だけでなく、移動時間や食事などの普段の生活の中で、同団体の方と積極的にコミュニケーションを取ることを意識した。その中で、今までのプロジェクトや新しく始まるプロジェクトの具体的な活動内容、茶園内の問題や課題、活動の障害などについて見識を深めることができた。今回の実習では、同団体で現行プロジェクトがなく、実際のプロジェクトの活動に同行することはできなかったが、コミュニティや学校、農園オフィスに訪問し、事前調査する中で、国際協力の分野でローカル NGO の活動が実際に行われるのか、捉えることができた。

学んだこと

これまで授業の中で国際協力における脆弱層について、勉強をしてきたが、実際に脆弱層の方のコミュニティを訪れ、そこで様々な立場の人から話を伺ったことで、脆弱層を取り巻く障害の複雑さと支援の難しさについて、実感することができた。農園マネージャーの方は、言葉ではプランテーション農園内に暮らす住民の暮らしを案じ、外部から来た私たちにも非常に協力的だった一方で、学校以外でのプロジェクトや、私たちがコミュニティを見学することに消極的であった。また、農園オフィスに農園ワーカーは入ってはいけないなどのルールがあったり、紅茶工場が嚴重に有刺鉄線で囲まれていたり、植民地時代の名残が感じられる部分も数多く残されており、歴史も障害となっていることがわかった。こういった状況にある人々に対して、国際協力はどのようにアプローチしていくのか、授業で今まで習ってきたことが、実際に意味していたことを痛感した。

実習生 みぞぶち ゆうの 溝淵 悠乃

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 3年(実習参加時)
 実習先： スリランカ セワランカ財団
 実習期間： 令和5年8月13日～9月2日

実習目的

今回の実習目的は二つあった。一つ目は、途上国で暮らす人びとの生活を、自分の目で見ることに。二つ目は、JICA 草の根事業協力のプロジェクト対象地の現状を確認すること。

一つ目に関しては、中学生のころから興味を持っている途上国について、すでにある本や論文、映像のみで支援について考えるのではなく、実際に体感し自分の目で見たものを記憶したうえで、どんな協力ができるかなどを考えたかったため、実習のテーマとして設定した。また、先行研究やこれまでの支援と、住民の間にギャップがないかどうかについても気になっていたことから、衣食住などの生活環境を知るということを目的とした。二つ目は、JICA 草の根事業協力に関して、UU-TEA の活動で知ったことやこれから始まるプロジェクトについて理解を深めるために、対象地の状況や問題を確認することを課題とした。具体的には、学校とコミュニティの訪問の中で、プロジェクトの可能性や実現性を把握することができれば良いと考えていた。



農園内の小学校で折紙を教えている様子



農園マネージャー訪問時の記念撮影

実習の成果

まず目的に対する成果としては、良いものが得られたと考えている。一つ目の目的として、途上国で暮らす人びとの様子を知るということを上げていたが、これはコミュニティの訪問において大いに成果を得ることができたと思う。途上国で暮らす人びとの生活に関して、写真や文字で事実としての状況を理解してはいたが、実際にコミュニティを訪問し、自宅の中を見たり、住民に質問したりしたことで、どんな仕事でどれくらいの収益で何を使って誰と暮らしているのかなど、具体的な内容を知ることができた。また、実際に足を運んだことで、コミュニティ内でも差があることを知ることができた点がとてもよかったと思っている。

二つ目の目的として、プロジェクトの対象地の現状を知ること上げていたが、これに関しても、大きな成果があったと考えている。ごみ捨て場やトイレ、水道の様子と、コミュニティ内の若者や保護者の様子を確認することができ、プロジェクトに対するイメージがより膨らんだと感じている。

学んだこと

ローカル NGO で実習を行ったことで、支援をするために、どのような段階や手順で進んでいくかのイメージを以前より、はっきりと持つことができた。現地のことは現地に行ってみないとわからないし、実際にどんなことができるかなどは日本からはわからないので、支援を行う際にローカル NGO は大切な組織であるなと感じた。

将来への影響

国際協力に関する仕事をする際は、理論を使って理屈で人々の支援を行いたいと考えていたが、今回の実習で、現地に行って現地を見て、出来ることや改善できる点を考えていく支援がより継続的な支援になると気が付いた。例えば、実習先でない NGO が茶畑に共用物を寄付したが、一年後には使用されなくなっているという話を聞き、それではまったく意味がないと思った。このような経験から、自身が支援や開発にかかわる際は、現地で活動する組織で、その場所に適した支援を行いたいと思うようになった。

実習生 めかる みゆ 銘苅 実祐

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 4年(実習参加時)
 実習先： ペルー ラウニオン学校(自己開拓の実習先での実習)
 実習期間： 令和5年3月6日～6月30日

実習目的

まず前提として、私の専攻は国際協力・国際関係学である。

高等教育での2年間にわたる国際協力に関する学修は、私に非常に重要な気づきを与えた。それは、国際協力において(もちろんそれ以外のいくつかの分野においても)教育は良くも悪くも大きな影響を持っているということである。大きなポテンシャルを以て内在しているということである。ペルーの学校で働くという貴重な機会を生かし、日本との相違点や共通点などを観察することでペルー文化に対する理解を深める。また、初等及び中等教育における「教育」の在り方を見ることで国にかかわらず重要な人格形成の一部となる段階で教育がどうあるべきかを考え、国際協力におけるコミュニティ開発や教育分野の仕事など今後のキャリアに生かす。



ミニイラスト教室を実施している様子



日本語ウィーク期間の折紙教室での様子

実習の成果

このインターンでの一番の収穫は、「臨機応変な行動」である。できる限り日常で意識してきた、私のモットーともいえるこの行動基準。しかし自分を「仕事」という環境に入れた時、それを忘れてしまいがちになることに気が付いた。その原因は、仕事には組織の規則や従来手法(学校教育の場合で言うとカリキュラムや先生らの授業の仕方など)があることを知っているため、それがほとんど不可変なものであるということにあった。

最初の2か月ほどは、どのように先生を手伝うべきか戸惑う部分が多かった。例えばあまり先生の言うことを聞けない子のそばに付いて教えるべきなのか、教室全体のアクティビティに同行する形がいいのか、などである。また、児童生徒とのかかわり方も学年とクラスによってレベルが異なってくるため、難しいと感じることも少なくなかった。特に低学年のクラスに入って日本語で話す際には「生徒たちがこれまでに習った文法で」話す必要があったため、「これはまだ習っていないから、この言い方で言って」と言われた時、先生はこれを常に考えながら授業をしているのだと気づき、私にもうまくできるだろうかと不安に思ったことを覚えている。しかし少しずつ授業の流れや教材を見てこの実習で自分がしていることの全体像が見えるようになり、先生に質問しつつうまく授業をまとめることや、生徒たちのレベルに合わせた会話や指導ができるようになったと感じる。

将来への影響

海外の一般的に言語としての日本語を教える日本語学校ではなく、学校カリキュラムの中に日本語を取り入れ、教えるという私が知る限りではかなり稀なこの学校で、日本とペルーの間にある文化の違いや、逆に「教育」という分野において共通している部分などを日々発見しながら働くという異文化体験は、まさに「国際キャリア実習」と呼ぶに相応しいものであった。

「学んだこと」で先述のように、ラウニオン校での国際キャリア実習を通して、「教師」という仕事にはカリキュラムがありながらも彼ら自身の指導方法は多様かつ柔軟であるべきだということ、そして生徒がいかに「学ぶ」という行為を楽しみ将来へつなげることができるかは教師が担う部分も大きいということを知ることができた。海外で日本語を教える機会があればぜひこの期間に考えたこと、ラウニオン校の先生方が持つ柔軟で素晴らしい授業の仕方、改善の余地があること、すべてを自分の経験として賢く活かしていきたい。

令和5年度 国際キャリア教育プログラム 報告書

協力者一覧

- 主催： 大学コンソーシアムとちぎ、宇都宮大学
後援： 宇都宮大学国際学部同窓会、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、
NPO 法人 宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流協会、JICA 筑波センター
協賛： (一財)栃木県青年会館、(公財)あしぎん国際交流財団
特別協力： 宇都宮市創造都市研究センター

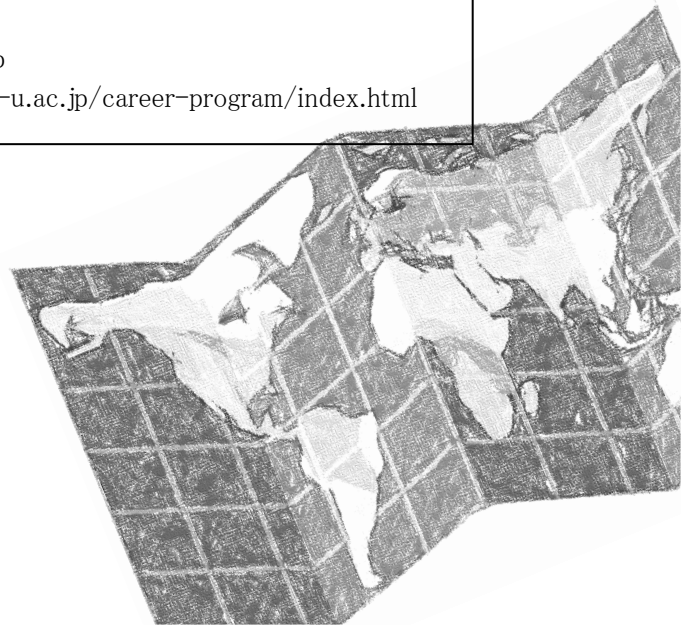
執筆・編集担当

宇都宮大学 国際学部 「国際キャリア教育運営委員会」

- | | |
|----------|--------------|
| 国際学部長 | 中村 真 |
| 教授 | 吉田 一彦 (委員長) |
| 教授 | 湯本 浩之 |
| 教授 | 高橋 若菜 |
| 准教授 | スエヨシ・アナ |
| 准教授 | 栗原 俊輔 (副委員長) |
| 助教 | 申 惠媛 |
| 助教 | スギット アルジョン |
| 助教 | キム・イルジュ |
| コーディネーター | 佐藤 裕香 |

発行月： 令和6(2023)年3月

発行者： 宇都宮大学 国際学部
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350
TEL 028-649-5172
Email kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp
Website <https://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/index.html>





宇都宮大学
UTSUNOMIYA UNIVERSITY